
我が家のアクマ！？

朔夜 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家のアクマ！？

【Nコード】

N9535A

【作者名】

朔夜 楓

【あらすじ】

「雅は今日から私の下僕だからね！？」自らを悪魔という少女>シロくと平凡(?)な高校生>妃雅くのラブコメ×ダーク!!

少女と少年が出逢い、マスカレード仮面舞踏は始まる。

その1:ぷろろぐ&1t:シロネココネコ>

「……ほら、美味しいか？」

フローリングの床に温めたミルクの入った小皿を置くと間髪入れずに一匹の仔猫が舐めにかかる。

「やれやれ、いったい何処から入ったのやら……」

仔猫にひつかかれた傷を見やりながら溜め息を吐く。

数十分前、帰宅した俺はこの仔猫を発見した。と、いうより階段の下に寝そべっていた。

今の俺は一人暮らしだ。その為、誰かが拾ってきたということもなく、まして猫など俺は飼っていない。

よってこの猫はどこぞから侵入したことになる。

仔猫は衰弱していたらしく鳴き声にも張りがなかったが、その新雪のような毛皮は染み一つなく綺麗なままだった。

近所でこんな猫を見た記憶もなく、取り合えず抱き上げようとしたら思いの他強力な抵抗にあってしまった。

だがまあ、やはり衰弱していたらしく、疲れきったような仔猫をキッチンに運びミルクを与えて今に至るというわけだ。

「にい」

思い返す俺にそんな鳴き声が届く。

見下ろすと仔猫は小皿のミルクを飲み干していた。

「まだ、欲しいのか？」

「にい」

仔猫が鳴く。

まるで言葉を理解しているように鳴く仔猫に笑みを浮かべながら俺は冷蔵庫に向かう。

「ちょっと待つてろ。すぐに温めるから」

そう言うのと足元に仔猫が寄ってくる。前足を俺の制服の裾に固定し、後ろ足で二足立ちしている。

こちらを急かしているような感じがだ。

「にい」

つい先程ひつかかれた時とはうって変わった甘えるような仕草にますます笑みが溢れる。

両親が渡米し独り暮らしを始めて早一年、自宅でこんなに和んだのは久しぶりだった。

俺は腰を落とし仔猫を撫でる。心地よい毛波の温もりと柔かさを感じ、仔猫の喉が鳴る。

「お前、いつそ一緒に暮らすか？」

「……にい」

目を細めて仔猫は一声鳴いた。

俺こと>妃きさき 雅みやびくはこの時何も知らなかった。

自分の浅はかな言動がもたらすモノも、仔猫が俺の言葉を『理解』しているということも……

その2:&1t;ハンザイシャ?>

「……………」

皆さま、おはようゴザイマス。只今俺こと妃 雅は我が部屋、我がベット上にて目覚めました。

カーテンの合間から差した曙光が本日も外界は良き日和であると告げている。

鳥もさえずり本日は絶好の休日であります。

……と、いうわけで二度寝を敢行。

馬鹿にするなかれ世間よ！

『休日に二度寝！』

これ以上の贅沢が如何程ある！？

休日はその名の通り休むべき日なのだ！ そのような砂漠のオアシスの如く貴重な資源を遊び呆けて疲れを溜めるなど愚の骨頂！

正義は我にある！

……等と妄想してみたり…

「……と、いうわけでおやすみ…」

脳内妄言も程々に、再び眠りにつくよう瞼を閉じる。

「……すう…」

…何だろう。耳元に妙に生温かく、くすぐったい風を感じた。

俺は仰向けに寝ているためその風は俺の耳内にピンポイントで攻めてくる。

窓は閉めたはずだ。昨夜はネコを発見した後、全部屋確認した。不思議な事に階段踊り場にある窓が空いていたのみで他に空いている窓は一つもない。

踊り場の窓の外にはネコが登れそうな土台などはなく謎は深まった。

まあそれは置いてだ。

「……すうゝ、すうゝ」

耳の奥へと進む生めかしい微風。

ハッキリ言つて俺の安眠を妨げるもの以外の何モノでもない！
今一度叫ぼう！

睡眠とは生きとし生けるモノにとって尊大かつ重大な行為なのだ！
そして人生のにおいてもっとも過ごすこととなる悦楽の時！

それを妨害するとは即ち倫理への反発！ 世界への敵対！ 宇宙
への冒瀆！ 秩序の崩壊！

……… つか、俺大丈夫か？

「……… たく、何処から来る風だよ？」

寝起きの妙な空想論を消し、頭を動かして横を向く。
幾分覚めた目にその発信原が映った。

「すうゝ、すうゝ……」

一言で言おう。

少女がいた。

「………」

美少女だ、それも『超』が付く美少女だ！

みためは年の背小中学生くらいか、透き通るようなアッシュブロ
ンドの髪、西洋系の小柄で整った顔立ちに頭頂部にはレースのヘッ
ドドレスが呼吸にあわせて揺れている。

精巧なアンティークドールを連想させるような少女が文字通り、
目と鼻の先であどけない寝顔を晒してる。

「………」

ハイ、ちよつと待つてね。

落ち着いて考えようね。

俺はこんな女の子知らないんだよ？ ホントだよ？

昨日は一人で寝たんだよ？ ホントだよ？

酒も呑んでなければ危ない薬もやってないよ？ ホントだよ？
幼女誘拐なんてしてないよ？ ホントだよ？

「すう〜、すう〜」

コンナびしょうじょシラナインダヨ！？ ホントダヨ！？ オネ
ガイ、ダレカシンジテエエエツ！？

いや待て待て！ 現実でこんなことがあるわけない。落ち着
け、俺！ そうだ、これはきつと夢！ dreamってヤツだ！
でなければ……………両手に手錠？ 頭にコート？ お迎えの散光式回
転灯付き白黒車両？ ……ハンザイシャ……………？
「うわあああ！？」

あまり現実味のある想像に思わず飛び起きる。
床に背中から落ち、一瞬呼吸が詰まるがそれと同時に分かったこ
とが一つ。

これは夢ではなく現実。

背中を打った痛みから考えて冷静な自分が囁く。

それはすなわち見知らぬ少女が我が部屋の我がベット上で寝てい
ることが事実だということの証明であり。同時に

「……………んっ、なあに、朝からドタバタしてえ〜」

少女が目を擦りながら布団から這いだしてくる。サファイヤブル
ーの瞳は焦点が定まっておらず。まだまだ眠そうだ。

ソプラノ調の可愛らしい声に多少の怒りが混じっている。

「あ、ああ、あ」

動転のあまり『あ』しか言えない俺。

それもそうだろう。

いつ悲鳴を上げられても仕方ない状況だ。

美少女の涙と悲鳴は最強にて最終。その破壊力の前には一流政治

家さえ弁論の余地はなく下手に出ざるをえない。

男と美少女。勝つのは常に美少女なのだ。

「……ん？」

少女が俺を見た！？ 死刑宣告五秒前！？

「……………」

3、2、1

少女はニツコリと可憐な微笑を浮かべ

「あ、おはよう！ 下僕！」

そう言った。

その3∴&1t∴アクマでアクマ?>t∴

「んく、んく」

「……………」

「んく、んく、」

「……………」

所は我が家のリビング、俺と少女のはダイニングチェアに腰掛け向き合っていた。

「ぷはあゝ、下僕うおかわり！」

俺は少女が突きだしたグラスに無言のまま傍らにあるミルクを注ぐ。

「ありがとう んく、んく」

再びミルクを消費する少女。非常にのんびりした様子である。
反面、俺は気が気ではない。

少女はゴスロリ風の衣服を見に纏っていた。

白い生地と同色のフリルやレース、紫のリボンや刺繍が映える中世的なでたち。

少女のアッシュブロンドの長髪とあいまってそのたたずまいは人形のような可憐さである。

考えてみて欲しい。そんな見知らぬ美少女が机を挟んだ正面でグラスに両手を添え『んく、んく』飲む姿。

…………可愛じゃないか。

何だよ！？ 思ってもいいだろ！？可愛いんだから！

…………ちよい待て！？ 今、誰か『犯罪者め』とか思ったろっ！？

「ああ、美味しかった。ありがとね、下僕」

そう言って少女がグラスを置く。年相応な笑みを浮かべながら俺を見る。

「ってかさあ、どうしてずっと黙ってるの？」

「えっ、ああいや」

少女の言葉に引き戻され、自室を出た後は言葉らしい言葉を発していないことに思い当たる。

少女は眉根をすばめ、少し頬を膨らませている。不機嫌サインであることは間違いないだろう。

「…………ごめんなさい。と、いつか言いたいことと聞きたいことがあるのですが、イイデシヨウカ？」

「別に構わないけど、なにい？」

何で俺こんなに腰低いんだろ！？　というよりなぜに君はそう『居るのが当たり前』みたいに振る舞う！？

これじゃ、俺がオカシイみたいじゃないかあろ！？

はい、すいません。さっさと言うこと言うので、その『ウザッ』みたいな視線は止めて…

「君、だれ？」

「え？」

キョトンとした顔を浮かべた少女だがすぐさま得心したように笑う。

「ああ、そつかそつかあ。ゴメンねえ、そういえば自己紹介がまだだったねえ。だから妙ちくりんなへっぽこ顔だったんだねえ。んで、下僕の名前は？」

ここは怒っていいのかな？　俺が黙ってるのをいいことに言いたい放題だな、この子。

だいたい『下僕』ってなんだよ！？　会話から察するに代名詞が『下僕』だよ！？　なんなのこの子！？

「……俺は妃 雅。一応、この家で一人暮らしをしている者だよ」

内心とは裏腹に律儀に答える俺。

ふう、まあ落ち着け俺。相手は子供だぞ？　きっと言葉の意味を理解せずにいつてるだけだ。ここで慌てても馬鹿をみるだけだぞ。

あはは、可愛いもんだなあ。

そんな俺を見て何故か少女は目を薄めて心持ち後ろに引く。

「うわあ〜！　下僕下僕言われて平然としてるう〜。これが噂に聞くマゾってやつ！？　うわっ、キモっ！」

「誰がマゾだあっ！？　もっぺん言いやコラアッ！？」

俺の忍耐精神がものの見事に破壊された。

世の中にはいかに子供でも許されない発言がある！

紳士に対して『ハゲ』しかり！

淑女に対して『年増』しかり！

人に対して『ゴミクズ』しかり！

絶対この子挑発してるだろ！？　初めから下僕下僕とのたまって！

「人は誰しも見に覚えがあることに対しては強く否定するっていうし〜」

「極論だろ！？」

「げば　うっん、雅って呼ぶね。ねえ雅い？」

「ナニカナ？」

「ド変態い」

「君は何様だああ！？」

「ワタクシ様あ　」

なんだこれ、何で俺は正体不明の少女にここまで言われないうけないんだ？

俺の中で少女のランクが『超美少女』から『奇人変人美少女』にランクダウン。

「ってか、君は誰だ！？　何で俺の隣に寝てたんだ！？」

もう、勢いだ！　遠慮はいらん！　これだけ言われて黙ってられるか！

俺の言葉に何故か少女は嬉しそうに『ウンウン』頷く。

「私が誰か？　ホントに分からない？」

「え？」

「雅い？　昨日はホントに一人で寝たの？　隣に何もいなかった？」

少女の真意は分からないが、自然俺は少女の言葉を反芻する。
一人で寝たの？ 隣に何もいなかった？

……いや、正確には隣に『一匹』。迷いこんだ仔猫と一緒に、
ういえば朝はどこにも

「つまり、こういうことよっ！」

少女が叫ぶと同時に、煙が少女の体をつつみ覆い隠す。

「え、ちよつと え？」

煙が晴れるとそこにいたのは

「にいゝ」

一匹の仔猫がガラスの傍らに座っていた。

少女の姿は何処にもない。テーブルの下にも、天井にも、牛乳パ
ックのなかにも。

「ちょ、一体」

「にやつ！」

再び煙。晴れたそこにはあの少女。

「自己紹介するね雅い。私はシロラディア ルシファー。シロ
つて呼んで 華も恥じらう悪魔だよ」

「は？ あ、熊？」

突然の事についていけない。

女の子が猫になってその猫が女の子に

「違うよう。ア、ク、マ、だよお」

いらん訂正をいれる少女シロ。その言葉の意味を噛み締める俺。

「あくま？ アクマ？ …… 悪魔ああ！？」

理解しました。しちゃいました。否定したいけど今さっき見たのは事実で、そう考えると少女が隣で寝てたのも頷けちゃうわけで。

「リアクションがいいねえ」雅は ずばり、面白いで賞をあげようお」

そんなマイナー賞はいらない。

「つまり君は」

「シロ！」

「シロは猫で悪魔？」

俺の言葉に満足げに頷く。

「そういうことお。あ、昨日はミルクありがとねえ。わざわざ温めてくれたし美味しかったよお」

そついいながら空のグラスを回す、空中で。

昨日、俺が仔猫にミルクをあげたことも知ってる。温めた事までおまけに硝子のグラスをどうやってたら空中でコマのように回転させることができる？

どうやら、信じざるをえないような雰囲気だ。

「信じてくれる？」

多少声が不安げだ。何故だかは知らないが。

「少なくとも君が嘘をついてるようには見えないかな。でも、分からないことが二つあるんだが？」

「なに？」

人間ワリキリと諦めが大切だ。取り合えずシロの言葉を信じてみよう。

「一つ目は何で俺の家に居たんだ？」

「あゝ、それはあゝ」

シロの目が泳ぎ、言いすらそうに呟く。

「あゝそのねえ、…実は私家出しちゃってさあ。はじめての人間界だから迷っちゃっててさ、お金もないしい、しょうがないから食糧だけでも調達しようとしてさあ……」

この際は不法侵入についてはとやかく言つまい。

「でも、窓の鍵は階段の踊り場しか開いてなかったと思うが？」

「あ、私飛べるから」

そうでした。この娘は悪魔だもんね。そのくらいは出来るか。

「でも、中に入ろうとしたときに窓枠に足をひっかけて階段から落ちちゃったんだ。んで、ちょっとして雅が帰ってきたから獣化してたって訳え」

なるほど、それなら納得だ。確かに説明上不明点はない。問題点はあからさまに多々あるが。

「一つ目は分かった。じゃ二つ目だけど、何で自分が悪魔って教えるんだ？」

普通に考えて妥当の質問だろう。自分を悪魔なんて言う娘は、捉えようによっては精神科ものだ。リスクばかりでリターンがあるとは思わない。

まして自分は一応一般人だ。

どこぞの黒魔術師でもなければ悪魔崇拝者でもない。
だが、シロからは予想外の返答がきた。

「ちょっとお、雅がそれをいうかなあ？」

「は？」

「は？じゃないでしょう！？　自分で言ったことも忘れたのお！？」

何故に怒るのこの子は？　当然の質問だろ？　『自分で言ったことも忘れたの？』ってなんだよ？

本来は素直に聞けばいいのだろう、『俺が何か言ったか？』と。
だが、言えませんよ。
何故って？簡単です。

「ねえ！　何とか言つてよお！？」

全身から黒い雷光を発してバチバチいつてる激情気味のシロをど
うしろと！？　あ、ちよとヤメテ！　右手をこっちに向けないでえ
え！

「答えて雅！　昨日、一緒に暮らすか？　って言ったのは嘘だった
の！？」

！？　ちよい待て！？

「おいシロ？　まず落ち着け。その一緒に、って昨日猫だった時に
言つたヤツか？」

「そうだよ！　確かに言つたよね！？」

って、その時は悪魔だって知らなかったぞ！？

「その言葉を信じて正体明かしたし契約までしちゃったんだからね！？ 責任はとりなさい！」

「は？ 契約、って？」

言ってからシロはハツとする。電光を納めうつ向くと照れているように指先をいじる。

「え、えつとう……そのね。はじめてあんなこと言われたから、……嬉しくてね。雅が寝てる間に、その、ちょこつと……」

自らの唇に指先をあてがい、更にうつ向く。シロの言葉は途切れ途切れになりやがて消える。

これは、不味いな。このまま沈黙を続ければ気まずさは増す一方。

しかし感情変化が忙しい娘だ。

シロがいったい何をしたのかは気にはなるが取り合えず今はいい。

問題は

「なあ、シロ？ その契約ってするとどうなるんだ？」

その契約内容いかなを知らないと話にならない。シロの今後を決めるためにも。

シロは顔をあげ、端的に述べる。顔は何故か紅い。

ホントに『ナニ』をしたんだろうこの子は？

「えっとね、特にはどうにもならないんだ。私がしたのは仮契約、って種類で、効果は只単にお互いの大まかな場所の把握と、念話くらいだよ。ちなみに念話っていうのは」

「こんな感じだよ」

頭の中に直接声が響く。テレパシーみたいなものか。

「電話に近いけどお互いに送受信を意識してないと会話できない場合がほとんどだし、念話している間は集中しないといけないから身動き取れない。だからあまり役にはたたないけどねえ」

そう言い机に頬杖を付く。

「ねえ雅？ 私、ここにいちや駄目かな？」

そんな事を言う。

「ホントは分かってるんだよう。契約したのは私の勝手だし、別に強制力があるわけでもない、家出なんてやめて早く家に帰れ、って言われても仕方ないって」

「……………」

急に消沈した声音に戸惑うがシロは『でも』と続ける。

「……………まだ帰りたくないんだ、あの場所には。それに……………雅は私を

私として見てくれた初めての人だから、嬉しかったから。お願いだよ、雅い」

懇願する。

俺にはシロがどんな存在だか、よく分らない。

この子はいったいどんな子なんだろう？ 初めは俺をからかい、フツとしたキツカケで怒り、と思ったら次は悲しそうになる自称悪魔。

俺にはどうみても『普通の少女』にしか見えない。

だからこそ少し知りたくなってしまったのかもしれない。

『普通ではない普通の少女』の事が。

リビングの壁にかかる時計はちょうど8時を指すところであつた。柔らかなメロディが流れる。西洋系列の童謡だったと思うがまあどうでもいい。俺はメロディが鳴り止むまで待つ。ものの数秒で音楽は止んだ。

「シロ？」

シロの瞳を見つめる。よく見るとシロの瞳は薄く朱が混じっている。これも悪魔だからであろうか？

シロは目を反らさず真っ直ぐ俺の瞳を見返す。不安気な表情であるものの、そこには懇願はあるものの媚のようなものはない。シロ

はきつとどんな言葉でも受け入れる。

そんな意思が窺えた。一瞬魅とれたのは永遠に秘密にしておこう。
いつまでもそんな顔をさせておく程、俺は腐ってない。

「朝食、なに食べたい？」

そう言い、席を立つ。シロは一瞬あつけにとられたようだが意味を理解すると満面の笑みになる。

「雅！？ それってえ！」

「あまり面倒なモノは駄目だぞ。好き嫌いもな」

シロが椅子から立ち、俺に背後から飛び付く。

「雅いい〜！ 蟻蟻蟻蟻蟻蟻蟻蟻蟻蟻蟻い！」

蟻？ 蟻×10〓ありがとう！？

「分かりづらい礼をするな！」

「男が細かい事気にするなあ〜！」

内心溜め息をつく俺。何か実際とんでもない事を承諾してしまったのは間違いないだろう。
けど。

「やったやったやったあゝ」

こんなに喜んで貰えるなら、悪い気はしないってもんだ。

「まあ、なるようになるか」

小さく呟く。シロには聞こえてないようだ。

「そうだあ。雅い！」

腰にまわしていた腕を解き、俺の正面に周りこむシロ。背筋を但し、可憐に一礼。

「どうか、これから宜しくお願いします」

いきなりそんな挨拶である途端に気恥ずかしさを感じるが、あまり意識しないことしよう。

「ああ、こちらこそ宜しくな」

右手を差し出し挨拶。シロは両手で握り返してくれた。

少女らしい華奢で小さく、冷たいようで暖かい手。不覚にも心地よく感じてしまった。

「ふふつ、いい雅い？ 雅は今日から私の下僕だからね！？」

「ハイハイ、わかりましたよ猫娘」

軽口の叩きあい。まるで旧知の間柄のようなやりとり。俺たちにはそれが似合ってる気がした。

これから賑やかになりそうだな。

その4:&1t:カイモノに行こう!>

「雅雅雅いゝゝ!？」

「どうかしたか？」

「雅の脳味噌はツルりんこ？」

「知らん」

「雅雅雅いゝゝ!？」

「何だよ？」

「脳味噌腐ってるねえ」

「お前がな」

俺たちは隣街にあるショッピングモールに来ていた。

シロは朝からこの調子を維持し続け、今は時折俺の左袖をクイクイ引きながら隣を歩いている。

昨日シロを受け入れることにした後、俺たちはシロの居住スペースを創りはじめた。

物置としていた部屋を掃除し、使わなくなったベットを組み立て、幾分か家具を配置した。

が、まあ当たり前なんだがその部屋は妙に殺風景な感になってしまった。特にシロの様に『一応』麗美な少女の部屋としては。

ん？ 何故『一応』を強調するって？

おいおい、冒頭の脳味噌発言忘れたわけではあるまい？

この少女はハッキリ言っただけでかなりdangerousだぜ！
おっとすまない、話が逸れたな。

その部屋を見てシロ曰く。

『華がなあぁいい』

その言葉を聞いて俺曰く。

『ここにいるだろ。ちっこいラフレシア　　がぁぁぁぁ！？』

殴られました、蹴られました、ひっかかれました、噛みつかれました。

『ギヤアアア~~~~！』

『誰がちっこい！？　誰がラフレシアだぁ！？』

ドシャ！　ボゴツ！　ベキ！　バギ！　ズドドドツ！　ドンツ！
ドカアツ！

『　カハアツ、ちよっ！　グツハアツ！　やめっ！』

ドスドスドスッ！　バシッ！　ドドドドドドッ！

連打連撃雨あられ。しまいには右手に黒い雷を纏わせました。

『トドメエ〜!』

『じよ、冗談だ! シロはただ小柄なだけだよな!? それにラフレシアなわけないだろ!? そうだな、えつとお そうだ! 水仙のような可憐さだ!』

鼻先三寸でシロの右手が止まる。

『……ホントにいい?』

『もちろん!』

『……………』

『……………』

『えへ』

何とか事なきを得ました。

そんな騒動があつて少しは丁度品及び生活用品を揃えようとこの場に来たわけですよ。

しかし、何気にちっこいこと気にしてたんだなあ。

まあ、隠された皮肉には気付いてないみたいだがな、ふっふっふ。

「雅い〜。何か顔が気味悪いよお?」

ん? 今、何気に酷いこと言わなかったこの娘?

「ちよつと休まない？ 私、歩き疲れたよぉ」

既に小物や衣服などの買い物は済んでいる。お陰で俺の右手は紙袋が占有している。

妙なモノを買うつもりかと思つたら以外にそういったこともなく、いわゆる『女の子』らしい物を選んでいた。二言目には『魔界ではこんな可愛いの見たことないよぉ』なんて言っていたな。

やっぱり地はただの女の子が。

「そうだな。軽く休むか」

「おう！ 何処行くう？」

そう言い、俺の手を握る。

シロの手の温かさを感じながらも俺は単息する。

シロは分からないのだろうか？ この一帯に満ちる独特の気配。

シロは今例のゴスロリ服、オマケに外見は『一応』超が付く美少女だ。

ただ町中で着ているだけでも目立つその服をシロのような少女が着たらどうなるか？ それも隣にいる平平凡凡にいやに親しくくっついていたらどうなるか？

見られてます！ 見られてます！ 見られてます！？

「うわぁ、可愛いあの子」

「でも隣の男はペケね」

「同感」

と、通りすがりの女子。

即答かよ！？

「あんな娘がいたら……」

「隣の男の子が息子だったら？」

「抹消」

と、通りすがりの若年夫婦。

お前が消えるオッサン！

「ハアハア！ カメラカメラア」

「隣の男は写すなよ！」

「ガッテン！」

と、通りすがりのオタク青年団。

俺は素早く手近にある自動給水機から冷水を紙コップ二つ注ぎ、
無言でオタク共に放り投げる。

「カメラアああ！？」

「冷たああ！？」

「ガッテムウー！？」

そして逃走。行動は迅速にが基本です。もちろんシロの手を握つて。

それにしても。

「地元で買い物しなくてホントに良かった……」

少しして走るのをヤメにする。余計に目立つからだ。

これが地元だったら瞬く間にシロの噂は広がりそれに便乗して俺の学生という社会的立場まで崩壊しかねん！

これでもまだまだうら若き高校生ですよ？ 幼児愛者なんて不名誉極まりない称号なんか欲しくないですよ！

だが油断は禁物だ。

隣街とはいえ俺を知るものとの遭遇は避けなければならない。

つまり今の俺は警戒状態なわけだ。

「おゝい、雅い？ 何か焦ってるけど大丈夫う？」

と、今度は左腕に自身の腕を絡めました！？ なんか意味深な笑みを浮かべながら。

そこで俺は『まさか』と思いましたよ。

「……シロ。お前もしかして？」

「んゝゝ？ どうしたのおゝ？ み、や、び」

片腕では飽きたらず両腕を絡めてきましたよ！

未発達体型とはいえ二つの膨らみは健在！

何とも役得！

心中でガッツポーズ！ なんてやってる場合じゃねええええ
くくくく！？

確信しました！

コイツワザトクツツイテキテルヨ！ 俺の社会的立場ぶち壊す気
だよ！？

辺りからは視線が突き刺し、囁きが微かに耳につく。

「兄妹じゃないよな？名前で呼んでるし」

「やっぱりロリ？」

「公衆の面前でアレだもんなあ…」

「ペドめえ」

ヤメテエ！？ 違うの！ そんな目で見ないでええ！ 俺は『
ロリ』じゃなあああいいい！

「注目の的だね み、や、び」

この小娘えええ！

「ってか、焦る雅見るのも微妙につまらなくなってきたから早く休
も」

人の不幸を『つまらない』の一言で済ませやがったあああ！？

俺の葛藤いざ知らず、周囲の視線などなんのその。普通に手を握

りシロは歩き出す。

と、唐突にシロは一軒の店先で止まる。

そこは雑貨屋といったような店であった。造花やキャラクターの置物など統一性がないような物が多数置いてあった。

その一角にシロは注視している。視線を追うとそこにあるのは一冊の本があった。

「ねえ雅、この本なに？ 鍵ついてるけど」

確かにその本には表と裏に金具が取り付けられていて南京錠によって開かないようになっていた。

鍵は細い木綿糸で本に繋がれている。

その本の表紙に書かれた『memory』の文字から推察しシロに教える。

「日記帳かな」

「日記帳？」

「ああ、分からないか？」

「何に使うの？」

悪魔だからであろうか、シロはいわゆる一般常識にかけるところがある。俺は日記についてかいつまんで説明した。

「へえ、そんな風に使うんだあ」

興味深げに日記帳を手に取りしげしげとみやる。その顔はまさに始めて知った事に対して興味を持った子供そのものだった。我知らず笑みが浮かぶ。

「日記に興味あるのか？」

「うん、ちょっとやってみたいかも。面白そう」

眩き視線を俺に向ける。

「いいかな、雅？」

俺は小さく息を吐き財布から代金分をシロに渡す。

「買ってこい、そしたら早く休もう。俺も疲れた」

シロがパアツと笑む。

「ありがとう、雅い！」

シロは代金を受けとると日記帳を持ってカウンターへと向かった。

その後ろ姿を見ながら思考する。

俺は結局シロがなぜ家出をしたのかくわしい理由を聞いていない。聞く必要もないと考えてる。

『理由』なんて所詮は今現在から見た過去に対するこじつけ、言ってみれば自分の行動を正当化する自己便宜だ。

俺はシロの口からそんな言い訳まがいの言葉を聞きたくない。こんな事を言つとシロは激昂するだろうか、やはりシロはまだまだ

だ小さい子供なのだ。

些細な悪戯を考え、可愛い物に惹かれ、不愉快に怒る。

そんな子が何かを思い詰め、まったく見知らぬ土地に降り立った。並大抵の覚悟ではないと思う。例えそれが何かから『逃げる』ためであっても。

シロはシロなりに何かに『追い詰められていた』、それは恐らく間違いない。そしてそれが安易に口に出せるようなことでないことも想像に難くない。

だからこそ、俺はシロを受け入れた。望んで翼を休める枝葉となるうと思った。シロという少女にはそれが必要に思えたから。

翼が癒えた後はシロ自身がしたいようにすればいい。たかが枝葉ごときに語ることがなければそのまま帰るべき場所へと帰るだろう。だが、もしその枝葉を己の『家』と想う時が来るとしたら、その時はシロが自ら語ってくれるだろう。

『自分自身の過去』を。だからこそ俺は聞かないことにした。

「雅いゝ、買ってきたよぉ」

相も変わらず笑み満点。再び俺の左手に自身の右手を添える。左手には青い紙袋を下げていた。

思考を中断。意識をシロに向ける。

「なあ、シロ。手を繋ぐのやめないか？ 恥ずかしいんだが」

するとシロは盛大な溜め息を吐き、仰行に肩をすくめる。

「雅さぁ、こんな美少女が手を繋いでるんだよぉ？ 普通ならおもわずリンボーダンスして喜ぶところじゃない？」

細い目で見てやったわ。

「…………ちんちくり」
グシャッ！

只今現在進行系で左足の小指を踏まれております！ 痛すぎて声がでません！ なんか全体重を踵に乗せて小指ピンポイントって卑怯じゃないですか！？

「雅いゝ？ デリカシーのない男に存在価値はないって知らないゝ？」

ぎゃああ！ 踵を『グリグリ』捻りはじめましたよこの子おお！？

「シシロ…やめっ」

「ふふふ、痛い？ ねえ雅、痛いゝ？」

怖ええええ！？

「すみません水仙のように愛らしいシロ様！ ドウカユルシテ……」

一気に巻くしたてました。その言葉にシロは満足気味に微笑み、小指を解放する。

「あはっ 分かればいいんだよ」

マジ怖ええええ！

やっぱり地は少女でも根は悪魔か……

シロはマイペースをもって俺を引く。足を痛めた俺としては少し辛いぞ。

近くを見ると丁度一つのベンチが空いていた。

「シロ、取り合えずベンチに座らないか？」

「うーん、そうだね」

俺の提案を受け入れ、二人揃ってベンチにつく。

「ってかさあ、シロはなんであんなに粗暴なんだ？」

「何言うのさあー！？ 雅が酷いこと言うのが悪いんじゃないか？」

「言葉には言葉で返しなさい」

「制裁はいつの世も実力行使と決まってるのぉ！」

靴の爪先部を摩りながらの俺にシロは膨れながら反論する。

制裁とかいて『私情リンチ』と読むような意見だ。

溜め息一つ。適当に視線を人混みに向けると視界のアイス屋の看板が目映る。

「なあ、アイスでも食べるか？ 買ってきてやるぞ」

「やったあ！ バニラ味でえー」

足をばたつかせながらシロ。俺は立ち上がりアイス屋へと向かうとするが何故かシロも立ち上がる。

「？ シロは座ってるって、すぐ戻るから」

「いやっ！」

「は？」

言い、立ち俺の手を握る。

「行こ、雅い」

数分も休まずにシロは椅子から離れようとする。俺は慌てて紙袋を掴み、シロに問う。

「おい、シロ。休まなくていいのか？」

今日は休日でも多い。案の定ベンチは俺たちが離れたあと、親子連れに座られてしまった。

「もう休んだよ　それより私は濃厚バナナねえ」

店先の品書きを見てシロは軽快に笑うが俺はそれに違和感を覚えた。

まるで何かを取り繕うような意識して作られた笑み、根拠はないがそう感じた。

もしかして……不安なのか？

シロは今まで一度も人間界に来たことはないと言っていた。それはつまりこちらでは知人らしい人間は俺だけということ。

ああ、なるほど。

そこで思い当たる。

先程あった悪戯まがいの行為もシロなりに不安をまぎらわせるための手段だったのかもしれない。

それを関知されないための笑み、それが違和感の正体かな。

なら、俺のすべきことは一つだ。

「雅は何にするの？」

「んー、じゃあ俺も同じもので。すいません、濃厚バニラを二つお願いします」

代金を支払い、品を受けとると、二人揃ってほど近い壁に背を預ける。

「しかし、ホントに牛乳系好きだな？」

「ふっ、まあねえ」

「その割りには」

「それ以上言ったら顔が背中を向くぞ」

「……………」

些細な談話をしながらただシロの手を握ってやること、それが妥当だ。

『不安がるなよ』なんて言っても所詮は気休。そんな言葉をシロは望んでないだろう。

だったら俺は求められた事をしてやるだけだ。

「……………雅の手って温かいね」

ややしてシロ。アイスを舐めながら独言気味に呟く。

俺は少しシロの手を強く握ってやる。

「シロの手もな」

言う。不安を払拭するように小声でいて力強くシロに言う。

「まあ当然だな。ここにいて、一緒に生きてるんだから」

少なくとも俺はシロを受け入れた責任を投げ出すような真似はしない。シロの気の済むまで付き合うつもりでいる。

「あはっ　それもそっかあ」

はにかんだように笑う。

こんな純粋な子を『逃亡』までに追い込んだ『何か』に怒りにも

似た苛立ちを覚えた。

シロはいつか自らの意思でその『何か』と対面しなくてはならな
いだろう。恐らくそれほど遠くない日に。

俺はその日が来るまでシロを支えようと思う。この純粋な子が泣
かないように、今度こそ負けないように。

それが俺なりのシロに対する『責任』の取り方だ。

「……ありがとう、雅」

そんな声が頭の片隅に響いた。

シロはアイスを食べ終え笑んでいた。違和感のない花が咲くよう
な笑顔。シロに一番似合う表情だ。

「じゃ、そろそろ行ってみよ」

「行ってくて、何処に？」

「雅にまかせるよ。帰るのもいいし、ブラブラするのもいいし
」

シロは俺の手を引いていく。俺は残ったアイスを口に放り込み、
荷物を手に取る。

というかもしや今の考え、聞かれたか？

もし無意識にシロに対して念話していたのだとしたらかなり恥ず
かしい…。

まあただの空耳だとも考えられるし、別の意味で言ったのかもしれない。

れない。

そんな考えなどシロは知った感などなくどんどん歩いていく。

その後俺たちはウインドショッピングをしていた。いつしか俺も人目を気にすることなく気ままにシロと二人楽しんだ。

その間も含め俺たちは帰宅までの数時間、一時も手を離さずに握っていた。

夜。

風呂上がり、牛乳を飲みにもリビングに足を踏み入れた俺はソファにもたれながら本を読むシロを目撃した。

「まだ寝てなかったのか？」

俺より先に風呂に入ったシロはもう寝たものだと思っていたので問掛けるがシロは沈黙。

淡い桃色のパジャマに濡れた銀髪の少女は手元の本を注視したまま動かない。

家のリビングには母親が買った趣味系の本が数冊ラックに収まっている。料理本や著名人のエッセイなどジャンルはまばらだが。

シロが読んでいるのもその一冊だろう。余程集中しているのか、微動だにしない。

俺は邪魔するのも悪いと、そのままドアを抜けて冷蔵庫へ向か

「雅」

その言葉には俺はおろか空間さえ凍結させかねない絶対零度の冷気があった。

液体窒素のプールに飛込んだらこうなるんじゃないかってくらいに俺は固まりました。

人はその冷気を『殺気』と言う。

ブリキの人形よろしく振り返るとシロはゆっくり腰を上げる。

「ねえ雅。私のこと水仙、って言ってたよねえ？」

ギクウウウ！？

立った拍子に本の表紙が目につく。そこには『草花大全』なるタイトル名。

ヤベエエエエ！ バレた！ バレた！ バレたあ！？

「私ねえ、考えてみたら水仙って花見たことなかったんだあ。それでどんな花かって考えてたら、この本を見付けたのお」

シロは笑ってます、とても愛らしく笑ってます。ただ、目だけは燃えてます。憤怒の業火に。

「ねえ、雅い？ これはどういう事かなあ？」

シロはこちらに開いていたページを向ける。そこには白い一輪の

花写真と説明文が印刷されていた。自分も暇潰しに読んだことがあるからわかる。まぎれなく『水仙』だ。

水仙：ヒガンバナ科スイセン属、多年性球根植物。花色は赤、ピンク、黄、オレンジ、白、緑、複色、覆輪、底白等様々。開花最盛時期は12月から4月の主に地中海沿岸方面原産の花。

ここまでなら何の問題もない綺麗な花です。『ここまで』は

「この花言葉、なんなのかなあ〜？」

花言葉。それは花に与えられた言葉なき言葉。

時に愛するものへの賛辞。

時に恩師に対する多大な感謝。

時に……、自らを傷つける両刃の剣。

「うぬぼれ、自己愛、ナルシストって何かなああ〜？」

小首を傾げ、笑う。まるで心底疑問のような仕草。

『天使のような悪魔の笑顔』、これほどこの言葉を実感したことはない。

「ま、までシロ？ 俺はそんなの」

「知らなかったなんて言わないよねえ〜？ み、や、びい〜」

俺の弁明即否決。シロは一步一步こちらに寄る。

もし某ホラー映画の代名詞こと貞　さんが笑みながら接近するならこんな風になるだろう。

後ずさる俺。しかし真後ろには壁。

噓おおおお！？

シロは既に雷を纏ってる。

明らかに昨日見た雷をしのぐ放電具合いだ。

ちよっ！？　噓だろっ！？　あんなの食らったら……………雅
の丸焼きの出来上がりいゝ

……………。

まてえええゝゝゝ！？

「シロ！？　ほんの軽い茶目っ毛だぞ！？　本気じゃない！　信じ
てくれ！？」

「ふふっ、雅？」

シロはもう間近。距離にして二メートル弱。純粹無垢な微笑を浮かべたシロは鈴のなるような声で宣告する。

「逝け」

その夜。

静寂が支配する住宅街に盛大にして特大の悲鳴が上がった。

その5：&1t：ガッコウとユカイな仲間たち>t：前編

「生きてるって素晴らしいなあ」

カーテンを勢いよく開け放ち一言。

オハヨウございます、雅です。はっきり言ってもうこのように出てこれるとは思わなかったです。

「マジ死ぬかと思った……」

説明はいらないでしょ？　ってか思い出したくないですよ……、真面目に死を覚悟しましたよ。

しかし、バニラアイス二十個に救われた俺の命って……

ああ、朝日が眩しいぜえ。

兎にも角にも、九死に一生を得た俺だが本日は学校だ。

手早く制服に着替え部屋を抜け、階段手前で欠伸が漏れる。

「ねむ……」

と、背後で扉が開く音。

「雅い」

朝から眠気を感じさせないような声に振り返る。

「オハヨウ、シ　　口オオツ!？」

途端声が裏返る。

シロは自室から三步で俺の懐に入り込み、腹部から約一寸の位置に右掌を沿え、瞬間腰を捻り右足で床板を踏み込んで

「おっはよお〜」

発勁を打ち込みやがったあああ!?

「カハアアツ!」

呼気が漏れながら俺は束の間浮遊。そして落ちるべきところには階段…………

ははっ、なんだよこれ？

ズガガガアア！　ズガツ！　ドガツ！　ズガガガアアツ！

ええ、落ちましたよ。正確には『転がり落ちましたよ』。階段を転がるボール見たことあるでしょ？あれだよ！

「お〜い、雅い。何寝てんのお〜？」

一階にトコトコ降り、床に倒れ伏した俺を見下ろしながらシロ。

「…………お前には俺が寝てるように見えるのか？」

「他に何かある？」

ふ、ふふふ

「お前にやられたんだろうがあああ！？ 朝っぱらから何すんだああ！？」

怒涛の勢いでガバツと起き上がり俺。

「朝の挨拶じゃん？」

「起きぬけに寸勁を打つのが挨拶かああ！？」

「え！？ 違うのお！？」

「さも意外みたいに驚いてんじゃねええつゝ！？」

「あはははっ 雅面白〜い」

疲れます。かなりしんどいです。まだ早朝だよ？ 何でこの子はこんなに元気なの？

「大体あの寸勁はなんだ？ どこで習ったんだよ……」

「雅の部屋の漫画」

漫画恐るべし！ シロ恐るべし！ 以後は格闘系の漫画をシロに読ませないことを心中にて誓う。

「あと少しで流星拳も打てるように！」

セイント
聖闘士！？

ある意味、尊敬すべきかもしれない。

「それよりご飯にしよう。今日の朝食はミルクとグラタンとシーザーサラダね」

ちなみに作るのは俺だ。ミルクとமாக, そんな面倒な朝食を作るほど今の俺には肉体的にも精神的にも余裕がない。

「……お子ちゃまランチでちゅね。ちょっとおまちくだちゃんい」
ドロップキックをお見舞いされた。

「んくんく、そういえばあ何処か出掛けるの？」

「まあな。学校だよ」

ミルクを口に運ぶシロにトーストをかじりながら俺は答える。
今日のメニューはトースト二枚、ベーコンエッグ、簡素なサラダに鶏肉のソテー、そしてシロはホットミルクに俺はコーヒ―。
あの申し出はもちろん却下した。

「学校お？ 雅、学校行ってるの？」

「当たり前だろ。俺は高校生だぞ」

シロはいぶかしむような声を上げる。

「ええ？ だってその割には雅って魔術はおろか空も飛べないじ

「やん」

「……ありきたりなお約束だが、魔法学校なんて奇想天外摩訶不思議な学校じゃないぞ。平凡極まりない学問の学舎だ」

俺はコーヒーをすすりながらシロに『こちら』の学校について説明する。時折頷きながら耳を傾けるシロ。

「と、いうような学校なんだよ。まあ、うちの学校はちょっと他とは違うところがあるがな」

「へえ」

説明はやや乱雑になってしまったがシロにはそれで十分だったらしい。

感心したように仕切りに頷いている。

俺はコーヒーの残りを一気にあおり

「面白そうだねえ」

一気に吹き出した！

弾ける水滴が朝日を反射してキラキラ輝く。

「……雅い、間欠泉の物真似はいくらなんでも流行らないと思うよお？」

そのままシロを無視。台拭きで暗色の液体を拭い、席に座りなおし、食事を再開。

「雅い？」

「何だ？」

「私も」

「学校に行きたああい、なんて言うなよ？」

皆まで言わせず電光石火で言葉を遮る。

「なぜ分かったあ！？」

わからいでかああ！？

「ねえ、連れってよお。別にいいじゃあ、ん」
猫撫で声で不服を洩らす。

「いいわけあるか、断固拒否だ」

残りのベーコンエッグを口に運び食事終了。

この破天荒娘は何を考えてるんだ。普通に考えて一緒に行けるか！
第一学生という立場上一日の大半を学校という職場で過ごす俺だ。
その学校にシロというsweet dangerous devilと同居していることが漏洩しようものなら社会的体裁云々以前に
三途の川が拝めるかもしれない。

「むう、雅と一緒に居たいっていう乙女心が分らないのお」
「？」

上目遣いで口許に恥じらいを浮かべつつシロ。

あははっ、可愛い奴め。

「そして雅の体裁を奈落に叩きおとして……」

目を横に流し口許を邪悪に歪めながらシロ。

あははっ、憎い奴め！

「それが目的か？ 同居人」

「半分は」

この悪魔がああ！

「いいでしょう？ ねえ。連れてけえ」

椅子を前後に揺らしながら駄々をこねるシロ。
完璧に幼児だ。

そのくせ子供扱いすると暴れるんだから始末が悪い。

「駄々こねても無理は無理だ。おとなしく家にいなさい」

椅子から離れ、食器を洗い場に持っていく。

シロは不機嫌気味にこちらを睨み、頬を膨らませる。

突っついたら柔らかそうだなあ。

「……どうあっても連れていかない気い？」

「ははっ、諦めなさああい」

早速昼食用に余った食パンでサンドイッチ製作に取り掛かる。

シロの分も作り置きしておくのも忘れない。

冷蔵庫から具材を取りだし、手始めにパンをサクッと切る。

シロも朝食を終え、椅子から降りると食器を台所に持ってきて

「……そうですかあ！ 分かりましたよあ！ 雅の馬鹿っ！」

弁慶の泣き所にロー一発。

シロは一目散に階段へと走り去り、数秒もたたずに力任せに閉ざされたドアの音が響く。

後に残ったものは心地悪い静寂だった。

「……はあゝ、怒らせちゃったかなあ」

脛を摩りながら一息。包丁を持っていた手前手加減したのか、それほど痛みはない。

シロには悪いが普通は連れていけないだろ？ まあ、それでも少しかわいそうだし夕食は何か好きなものでも作ってやるか。確かミルク系が好きだったし、クリームシチュー辺りが賢明かな。

唐突に西洋童謡風の音楽が流れる。

！？ヤバッ、そろそろ出ないと。

時間は通常登校時刻を少し過ぎている。手早く昼食の用意を仕上げ、洗い物もそこそこに洗面所で顔を洗い、自室へと鞆を取りに戻る。

一般的なシヨルダータイプの鞆を肩に掛け、急ごうとした矢先シロが気になった。

仕方なくシロの部屋前でノックをし、呼び掛ける。

「シロオ。行ってくるぞ。冷蔵庫にサンドイッチ入れておいたから食べろよ?」

返事はない。相当ひねくれているようだ。感情表現がストレートなシロらしいというかなんというか。

「なるべく早く帰るよ。じゃ、行ってくる」

俺は階段を駆け降り玄関を通り外界へと抜ける。

我が家から学校までは歩いて三十から四十分前後、このペースなら遅刻にはならないだろ。

朝の新鮮な空気を肺一杯に押し込む。

季節ここに至って増した心地いいひんやりとした外気は俺の心を癒す形なき抱擁のように感じた。

俺は辺りを観察しながら通学路を闊歩していく。

昇る斜陽の光。ちらほら通学路を歩く同校らしき高校生と社会人。時折走り行く車の駆動音。雀のさえずり。

………ビバHEIWA!

今思えば何故に俺はシロにあのような扱いを受けていたのだろう。シロは『スキンシップだよ』なんて言っていたが、下手をしたら怪我では済まないことになりかねない行為を『スキンシップ』とは言わない。

だが! 『だが』だ! 今の俺はどうだ!?

It HEIW! The HEIWA! HEIWA OF
HEIWA!

「HEIWAって素晴らしいなあ」

この数日で命と平和の有り難みが身に染みて理解できた俺です。

今も世界中で理不尽な暴力や冤罪に苦しむ方々にエールを送りたい気分だ。

あ、何か目から熱いものが溢れそう……

「おゝい雅? 何朝からトリップしてんだ、お前は」

前触れもなく耳につく声に俺は振り返ると見知った顔。

「……よう、宏治」

「おっす! ところでHEIWAってなんだ?」

俺の友人、霜塚 宏治>しもつか こうじく。背は俺と大して変

わからない年齢平均と同程度ながら体つきはがっしりしており、短髪に精悍な顔が今は疑問に染まっている。

良く言えば親友、悪く言えば悪友。

「ふつ、平和惚けた日本男子にHEIWAについて弁論したって意味なんかないんだよ宏治。俺の心情はお前には理解出来ないさ」

「……いい精神科を紹介してやる。今すぐ行つてこい」

普段通りの横柄な宏治の言葉。

「冗談まじりの日常的なやりとり、こんなことに感動している俺がいる。」

「ああ、何か涙でそう……」

「……ホントに紹介してやろうか？」

携帯を取り出した宏治を制し、二人で歩き出す。たわいのない雑談を交しながらいると暫くして学校が見えてくる。

『私立駒瀬高等学校』

些か苔生した感のある校舎は小高い丘の頂に建っており、そこに至る道は緩やかな昇り坂になっていた。

「あ、そういえばちょっと面白い話を聞いたぜ」

唐突に宏治がそんな事を言う。

「面白い話？」

こいつがそんな風に語り出す話題はそこそこ信憑性のある愉快な話題なので俺はすかさず聞き返す。

「ああ、なんでもな」

「おおーい、コウー！ ミヤアー！」

宏治の声を遮り、歓高い少女の声が響く。

これまた良く知った少女が何を思っただけか学校への道を逆走してこちらに向かっていた。

シヨートの髪を上下に揺らし、学校指定の制服を見事に着こなして、活発な笑みを顔に張り付けた少女は駆けている。

話題が途切れたことは若干残念だが俺たちはそろって少女に挨拶を交わす。

「よう美さ　きいいい！？」

「つつす美さ　きいいい！？」

後半から俺たちの声は裏返る。

少女は走行スピードを瞬く間に上げ、俺たちのおよそ三メートル手前で跳躍。

「とう！」

両腕を左右に鷲の翼の如く拡げ、僅かな帯空後俺と宏治の中央に

滑り込み

「ダブルリアットオ〜」

強烈な一撃を放ちやがったあああつ!?

「オブツ!?!」

「グバアアツ!?!」

俺たちは加速にて発揮された少女自身の質量を最大効果で受け……

……ああ、今日も空は青いなあ。

ズザアアアツ!

ええ、滑りましたよ。正確には『後頭部打ち付けながら仰向けへツドスライディング』ですよ。築地で冷凍マグロがどのように扱われるかテレビで見たことありますか? それだよ!

「うつす二人とも! 御機嫌いかがあ?」

蒼久に染まる空を正面に見据えながらの俺と宏治に少女は敬礼なんかをしている。

少女の名は宮下 美咲>みやした みさき<。宏治と同じく俺の友人にして傍若無人な超絶女子高生だ。

「……なあ、雅?」

「……何だ? 宏治」

「……どうして俺たちはコンクリートに寝そべって蒼天を眺めなくちゃなんのだ？」

.....。

「およ？ どうしたのだ二人とも、空など見上げて、UFOでもいるのかい？」

「「お前のせいだあああ！」」

演技感たつぷりに空を振り仰ぐ美咲にダブル突っ込み。異口同音で息はピッタリだ。

「おお、凄く息があつてるねえ」

「お前は朝から何をするんだ！？ 後頭部強打だぞ！？ 死んだらどう責任とる！？」

「外面だけ泣いて、葬式まんじゅう貰う」

「貴様ああ！」

俺の叫びなんのその。そんな美咲に宏治は俺の隣で諦めたように嘆息する。

愛嬌感のある可愛いげな顔に騙されてはいけない。こいつの腹黒さはシロに退けをとらないのだ。

余談だが俺がシロの理不尽極まりない仕打に耐えられるのも日頃こやつにこずかれているからだ。

誤解ないように言うが間違っても『怪しい趣味』なんかないからな！

「……まあ、いい。早く学校行くぞ」

俺の言葉に二人が目を剥く。

「ちょっ……、ミヤどうしたの？いつもならこの後、お前の脳はゼラチンかぁあ！？ とか言うのに……。もしかして本気で怒った？」

「いや、何かコイツさっきから様子が変なんだよ。HEIWAとかなんとか言ってるさ」

「はあ？ なにそれHEIWAって、ニュアンス変じゃない？」

当初曇った声音は宏治からの言葉によって疑惑に変換されたようだ。

俺は二人を見据えながら『フッ』と笑う。

「俺は本当の意味で恐怖というものを知ったんだよ……」

ここでBGM！ 某コーヒーメーカーのCMより抜粋でよろしく！

そう、コレは文字道理『修羅場』を体験した者のみが行き着ける余裕の域！ 日常を安穏と過ごしては感じることをさえままだらない究極にして至宝の極地なのだぁあ！

ダバダァ〜

「もしもし、救急車をお願いし 」

若干二名、携帯を耳に妙な事を言い出したので神速で奪い取り、
通話を遮断。

その後、俺たちは三人で校舎へと向かった。

その6: & 1 t : ガツコウとユカイな仲間たち & g t : 後編

「よし、今日はここまでにする。後半に出した方程式は重要だから覚えとけえ」

その言葉を待ち侘びたかのようにチャイムが鳴り響く。

馴染んだ音を皮切りに教師などそっちのけで教室を脱兎の如く我先へと教室を後にするクラスメイトを眺めながら俺は単息する。

そんなに昼飯が惜しいなら購買なんて非生産な方法より自分で持つてこいと思ってしまう。コンビニなり、弁当なり。

まあ、そうならなかったで購買部には死活問題だろうけどな。

窓際最尾席で脱力しながら、やや頭が薄まりつつある数学教師に目を向けると、そこにはすでに教師の姿はなくなかりに、

「お前らああ！俺への謝礼の挨拶と昼飯のどっちが大切なんだあああ！」

「「「「「昼飯！」「」「」「」

「待てコラアアツ！」

等と言った叫びと共に地響き地味た足音が遠ざかっていく。

隣れ数学教師、アンタはパン以下の存在だ。

そう、今現在は昼休み。授業という労働の合間に学生たちに与え

られた至福の一時。

つつがなく午前の授業を終えた俺は一つ伸びをする。

「雅、一緒に飯食おうぜ」

そうこうしているうちに宏治が近付いてきた。手には弁当の包みなんぞをぶら下げている。

「ああ、いいぞ」

俺もサンドイッチを詰めた弁当箱を机上にて開き、宏治は正面の椅子に陣取ると、俺と向き合い弁当を食し始める。

サンドイッチを頬張り、何気無しに俺はふと教室を見渡した。

「あれ、あの千年まな板娘は？」

「ああ、美咲なら他の女子と何処かに」

上履きが二足飛んで来て俺と宏治の頭部にクリーンヒット！

「何か言ったあ？ 二人ともお」

ドスが効いた声音。

「「いえ、何にも…」」

教室の入り口から姿を表した美咲は靴下のまま俺たちの所にやって来ると上履きを履きなおす。

「ねえ、私も一緒させて。勿論いいよね？」

弁当らしい小箱を小脇に抱えて美咲。先程の事象なんぞ全く意に
関してない様子だ。

ぶつちやけ日常茶飯事ですから！

美咲はこちらの返事を待たずに右隣の椅子を持ち出し、俺の机に
て弁当を拡げる。

「あれ、お前今日は他の女子と食べるんじゃないのか？さっきそんな事を言ってたろ」

と宏治。その言葉にばつが悪そうにコメカミを掻く美咲。

「ああ、実はね。あれ友達がセッティングしていたみたいでさ、
その……、男女混同の食事会みたいなノリでさあ」

その言葉にピンときた。

「相変わらずか、お前も人気者だな」

無言ながら俺は宏治の言葉に首肯する。

はつきり言つて美咲は男子にかなり人気がある。

愛嬌感のある顔に大きく開いた瞳、解放感溢れる天真爛漫な笑顔、
すらりと伸びた手足に表れるスレンダーな臍軀。

そんな訳で美咲に告白する輩は後を絶たないが、その全ては撃
沈。今やその数は三桁を越えるのではと噂される始末。

「はあ、何で私がこんなことに思い悩むのさ」

究極に贅沢な悩みだな。

第一皆が皆外見に騙されおつて。こいつの危険度はジョーズクラスだ。

いっそ本性を表して並み居る男共を血祭りにしていけば、そういつたことも無くなるだろうに、くっくっく。

「ミヤ、何か失礼なこと考えてない？」

玉子焼きを箸でブツ刺しながら睨む美咲。

はっはっは、全然怖くなかいですよ。

こいつは妙に勘がいい所がある。シロが悪魔ならコイツは妖怪だな。

「んな事はないさ」

レモンの汁攻撃！ 我が目直撃！？

「ノオウウウウウ！ 目がああ！？」

「妖怪め、って思ってたでしょ？」

「雅、お前は顔に出すぎだ」

我が友よ！ 忠告は攻撃以前にしてもらいたかったぞ。

「コウは悪魔め、て思ったよね？」

「……ナアアア！ 目がああ〜！？」

宏治よ、その気持は分かるが悪魔は別に居るのだよ。

二人の視覚を麻痺させた当人は涼しい顔で玉子焼きを咀嚼しつつ切り出す。

「そういえば朝挨拶する前なんか二人で話し込んでたけど何話してたの？」

こいつの言う挨拶とやらには些か不条理を感じるが、その話題には俺も気になった。

目を擦りつつ、ハムサンドに手を伸ばしながら宏治に問う。

「そっぴゃあ、あの時何言おうとしたんだ？ 面白い話があるとか言ってたが」

「面白い話？」

俺と美咲に押され、宏治は目を萎ませつつハムカツを貪り、語る。

「ああ、そういえば話してなかったな」

『ニヤッ』という風に笑む宏治。

「実はな俺も人づてに聞いたんだが」

持ったいぶつた言い方に多少の期待が籠る。

「昨日、隣街のデパートに超美少女が現れたらしい！」

瞬間場は固まる。

この主張に俺はハムサンドに被りついたまま凍りつき、美咲は『はあゝ?』といった表情をしている。

「コウ。一体その何処が面白い話なの?」

もったもな意見だ。『美少女がでた! ひゃっほう!』なんて思想はハッキリ言っただけだ。だが、俺は宏治が独自の情報網と、ある趣向を持っていることを知っている。

「普通はそう思うよな。だが、よく聞け二人とも」

顔を伏せ俺たちにしか聞こえないように呟く。

「その少女の隣には男が一人いたそうなんだが、どうやらこのクラス男子らしいんだ」

その言葉に美咲は半ば啞然とした。

「ちょ、それどういう事?」

「そのままの意味だ。俺の情報にはなかった美少女が突然現れた」

説明しよう。何故に美咲が啞然としたのか。それは我が友こと霜塚 宏治の持つ趣向のためだ。実はこの男、この高校における男女友好関係及び職員内情について、莫大な情報を保有している。

それこそ純情な少女の片想いから、男性教師の浮気相手の名前まで。

一説にはその情報網はこの街一帯をカバーするほどのモノとも言われている。

無論、この事を知っている人間はごく僅かだし、宏治自身それらを悪用しようなどとは考えておらず、精々で『気になる異性の情報を知りたがる若者相手』に小金を稼ぐ程度だ。早い話、趣味として情報を収集している。

そんな常軌を逸した男がノーチェックであつた美少女が現れ、尚且つ同クラスにその少女の関係者が存在する。

宏治の情報屋としての顔を知っている者ならば啞然とするのも無理はない。

「でも、もしかしたら従兄弟とかそついうもんじゃない？」

「甘いな、俺の情報網は完璧だ。従兄弟ならある程度は情報があるはずだが、その少女は見たところ銀髪の西洋系人種だったらしい。俺のデータに外国人の従兄弟がいる校内家庭は七家庭、だがその中に該当者はいないし、そもそもこのクラスではない」

「ってか、誰か突つ込めよ！明らかにヤバイこと言ってるぞ！プライバシーの侵害じゃないの！？」

「つつか今、銀髪のヨーロッパ系って言いました！？」

「じゃあ、恋人とか？」

「それが妥当なんだが、そもそもそんな情報を俺が見逃す訳はない。それ以前に少女は見た目小学生位だったらしいし」

「まさかっ！　　ロリ……」

不吉な事言うなああ！

「そういう可能性も捨てきれないな。ふっふっふ、これは是非とも調べなくては」

弁当を閉じながら宏治。

うすら寒い笑い声であった。こいつの場合、知的好奇心としての欲求に加えての美少女好きだから始末が悪い。

いつの間にやら食事は終了していたようだ。見ると美咲も自らの弁当箱を包みなおしていた。

俺はというと

「おい、雅。何ハムサンドを口に入れたまま放心してんだ？」

その言葉に我に還りハムサンドを咀嚼して呑み込むと、まだ残っているサンドイッチを惜しみつつ食事を終了。

「……なあ、宏治。その情報はどっから入ってきたんだ？」

「ん？ 前に話したろ、俺の知人の三人組だ。ほら、別名オタクトリオ。しかし、冷水食らって逃げられるとはな」

あの時のオタク共かあああつ！？

「写真さえ納めていればなあ。二人とも何か心あたりないか？」

あります！ ありがとうございます！ ってか、シロだろそれ！？

「ちょっと不思議なんだけど、そいつらはなんでその男がウチのク
ラスの生徒って分かったの？」

「それは単純だ。この高校の女子指数が高いからアイツらよく観察
しにくるんだよ。そのなかでたまたま授業中に俺と一緒にの所を目撃
していたらしい」

「なるほど」

なるほど、じゃねええっ！ 明らかに犯罪ギリギリの行為
だろうがあっ！？

あのオタク共があっ！ 次逢ったときが貴様らの命日だああ
っ！

「ってか雅、さっきから何肩を揺すってハアハア言ってるんだ？」

「ミヤ？ あんた、大丈夫？ 顔青いよ」

二人は優しい声を掛けてくれます。けど俺はその優しさに背徳し
ます！

「……すまない、ちょっと保険室に行ってくる」

落ち着け俺！ まだ完全にバレた訳ではない！ それに宏治だか
らこそ、その情報を得られたただだ。大丈夫、まだ

おぼつかない足取りで椅子を立った瞬間。

「号外だあっ！ 号外だぞおおっ！」

駒瀬高名物、新聞部号外配り。

高らかな声と共にビラが撒かれる。

「号外だあ！ 我が高に正体不明の美少女が現れたあああつ！」

ガッタアアン！

椅子につまずき、盛大に転倒。

そうこうしているうちに俺たちのグループにもビラが一枚配られた。そこにはピン呆けした一枚の写真と文書が印刷されていた。

『深窓の令嬢のごとき可憐な少女現れる！ 目撃者は多数。正体不明の美少女の目的とは！？』

プリントされた写真には柔らかな銀髪を翻した少女がゴスロリ服ではなく、薄手のシャツにネックカーディガン、プリーツスカートの姿で写し出されていた。

「これはああつ！？」

驚愕の声を上げる宏治を無視し素早く意識を集中、シロをイメージする。

程なくしてシロの声が頭に響く。

「おゝい雅いっゝ！ 聞こえてるのは分かってんのよおおつ！？ いい加減返事しなさい！？ 無視すんなコラアアゝ！」

.....。

聞かなかったことにしていいかな？

「ううう〜！ 留守録設定くらいしとけえっ〜！」

「出来るかぁアホ娘えっ！？」

咄嗟に突っ込む。

「え！？ 雅い！ 聴こえるう！？」

「シロ、お前は学校に来てるのか？」

シロの言葉を横に流し、もう確定的となった事を聞く。

「フンッ！ 連れてってくれないなら自分で来るまでよ！」

主張。

「して、その感想は？」

「助けて雅いっ〜！？」

救助要請。

呆れてモノも言えず深く息を吐く。

「何で猫になってないんだよ？ それならまだましだったのに」

「うう〜、獣化は魔力の消耗が激しいんだよう〜。仕方ないじゃん……」

「まったく。近くに何か目印になるようなものないか？　すぐ行くから」

「……意識を私に向けてたら大体の場所は雅の方から分かるでしょ？　何か白い建物の裏だよお」

幾分、意気阻喪したようなシロに少し申し訳ないような気分になるがそれはそれ、これはこれだ。

言われた通り意識してみると気配地味たものが確かに詠めた。

体育館方面にある白い建物と言えば

「体育用具室の裏だな。すぐ行くから待ってる」

「うん」

その言葉を聞くと俺は念話を終了する。
気が付くと宏治が俺を懸念するように覗き込んでいた。

「どうしたんだ、宏治？　まるで西瓜が実は野菜だって知ってしまった小学生みたいな顔だぞ」

「アホっ！　どうした、じゃない。お前大丈夫か？　さっきから呼び掛けてたのにまったく返事しないしよ」

「え？」

見ると美咲も宏治と似たような表情をしていた。

もしかしたら、念話のせいかな？

集中しなければいけないとは言われたが、まさか現状のコミュニケーションまで封じられるとは。

「ミヤ？ 今日帰った方がいいんじゃない？ 先生には私たちが説明しておくからさあ」

その言葉に思案する。ここで帰宅するならシロを連れて今すぐ学校を抜け出せる。

だが、このままずるずる放課後まで授業を受けると下手をすればシロは公衆の面前に晒されかねん。それ以前に自業自得とはいえアイツを苦しめることに

「そうだな、今日は早退するよ」

思案するまでもなかった事だ。俺は二人の厚意に甘える事にした。昼休みは後数分で終りそうだ。俺は鞆を肩に担ぎサンドイッチをしまい込むと二人に別れの言葉を交し、真っ直ぐ体育用具室の裏へと向う。

同じ敷地内だ。数分で着いた用具室裏は雑草が蔓延し、荒れ果てていた。

日光は用具室に遮られ、陰が支配した空間はまるで不可侵の領域のようだ。

「シロいるか？ 俺だ」

草むらに押し入り呼び掛けると。

「雅いいいっ！？」

前方の草むらを掻き分け一つの影が抱きついてきた。上目遣いの瞳はうつすら滲んでいる。

「シロ、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないよう！ 変な人には写真撮られるし、変な人には追い掛けられるし、変な人にはジロジロ見られるし」

一気にまくしたてる。

しかし、皆が皆『変な人』ってちょっと酷くない？

「雅は雅で助けてくれないし……」

「あのなあ」

そう言つて上着の裾を握るシロ。

「……ちょっと、怖かったんだから」

自らの顔を俺の制服に押し付ける。嗚咽はないが悲哀は読み取れた。

「自業自得だろうが、ったく」

「うう」

言い、頭を撫でてやる。シロの髪はきめ細かく、さらさらと流れるように揺れた。香水などは使用していない筈だが、ほのかにいい

香りが漂う。柑橘系の甘い香りが。

「……さあ、今日はもう帰るぞ」

暫く髪を撫でた後、俺はシロの手を取り用具室裏から抜け出し付近を見渡す。

「え？ でも、雅は学校じゃ？」

「今日は早退する。流石に今のままシロを独りにしておいたら俺の地位は地に落ちる」

「ちよつとおく、朝の体裁云々まだ気にしてるのおく！？ あんなの冗談に決まってるじゃん！」

チャイムが鳴り響き、昼休みの終りを告げる。生徒たちはワラワラと教室へと引き戻し、辺りに人影は俺たち二人だけになった。俺たちは人目につかぬよう、体育館を迂回するように正面玄関へと向かう。

「雅い、もしかしてホントに私のせいで早退するのぉ？」
迷惑を掛けた自覚があるのだろっ。シロは小声だ。

「まあ、それもあるが」

シロはシロなりに考えてここに来た。確かに結果、シロは俺に迷惑をかけたかもしれない。

けど、『それがどうした？』。

一人でいるのがつまらなくて来たのかもしれない。悪戯を考え来

たのかもしれない。寂しくて来たのかもしれない。

『それがどうした?』。

己の純な思いに忠実に行動することの何処に非がある?

自分の浅はかな行動に反省する少女の何処に責がある?

俺に温もりを求めるシロの何処に咎がある?

だから俺は言ってる。朗らかに馬鹿のように偽善でもって愚者のように堂々と。

「それ以前に今日はサボりたい気分なんだよ。家でのおんびりとな」
暗に『お前は悪くない』と。

「……駄目学生い」

「五月蠅いぞノラ猫娘」

俺たちは笑い合いながら校門に差し掛かる。が、その時。

「み、雅 おま!」

「ミヤ……あんた……」

突然の呟き、反射するように振り向くと 宏治と美咲がいたあ
ああっ!?

鞆をぶら下げて明らかな帰宅ルックに『世紀末が来たぜえっ!』
的な表情でワナワナ震えている。

「なっ!?!」

何でこいつらがここに！？ 今授業中だろ！？

「……様子が妙だったのはこういう事かぁ雅い」

と、目をギラつかせながら宏治。

「……心配だから付いて行ってやろうとしたのにこんな風に裏切る
とはねえ、ミヤア」

と、闘気をみなぎらせながら美咲。

いやあああ！？ コイツらの人の良さが裏目にでやがったああ！
ってか、本心は遊びたかったただけだろうが……今はそんな事言っ
てる場合じゃねええっ！？

二人は何やら屈伸、伸脚、アキレス腱伸ばし等のストレッチをし
とります。笑ってはいますがそれは笑い般若のようで。

シロはというと訳が分からないといったように顔中に『？』を張
り付けている。

「雅い、あの人たちは何で準備体操的な事してるの？」

握った手をクイクイ引きながらシロ。

そう、準備体操だ。

何の『準備体操』だって？ あははっ、それは極めて単純だ。

「位置に付いて」

何故かクラウチングスタートの姿勢をとり、宏治。

「よゝい」

同じく美咲。二人の輪唱の後、同一の言葉が轟く。

「ドンッッ！」

生死を賭けたりアル鬼ごっこ開催いいっ！

風を切り、塀を乗り越え、屋根を伝って俺は駆けた。

忠実な忍のように、少女を小脇に抱え黒き二つの気配から逃れるために。

こんな日が来ることは分かっていた、だが心の何処かでそれを否定している俺がいたんだ。

『大丈夫だ、HEIWAはいつまでも続く！ 正義は己、悪は世間！ 恐れるな妃 雅よお！』

そう思ってたんだよう！？ 半分嘘だけど……

忠実な忍は敵に捕縛され今は自宅、リビングにて拷問まがいの行為を受けています。

え？ どんな『拷問』かって？

良い子のみんなは『ミノムシ』って知ってるかな？ 秋から冬にかけて枯れ木にぶら下がってるのをよく見掛けるよね？

蛾の幼虫が口から粘性の糸を出して枯れ葉等を繋ぎあわせて創る

蛹のようなモノなんだけど、今の俺はまさに『その状態』なんだよ。
ん？ 分かりづらい？ はっはっは、こう言えば分かるかな？

『人間サンドバック』だよっ！

「……にわかには信じられないけど、実際自分の目で見るとなあ」

「手品じゃないの？ この変質者が弁明するために仕込んだだけで！」

顎に手をやりながら呟く宏治と天井の梁にロープで逆に吊された俺を蹴りながら美咲。

あああゝ、揺れるううゝ。頭に血が昇って気持ち悪いよあゝゝ。

「手品じゃないもん！ 魔術だよお！」

煙が炸裂し、仔猫がシロへと戻る。

俺はこれまでのシロとの経緯を二人に話し終えていた。

「いい加減信じてくれよあゝゝ。今の見ただろうゝゝ？」

「だあ、まあ、れえゝゝ！」

「回すなああゝゝ！？」

俺を回しながら美咲は吠える。

それを冷静に観察しながら宏治はやれやれといった面持ちだ。

「やあめろ美咲。雅が事ここに至って嘘を吐くとは思えん。それに」

シロはふよふよ浮き、微弱ながら放電していた。何処か面白くなさそうな顔だ。

「こんな間近で浮きながら放電されると信じるしかない」

シロから一步距離を置く。静電気にあてられたからであろう。そんな事をおくびにも出さず、宏治はシロに話しかける。

「えっとシロちゃん　でいいか？　自己紹介がまだだったな、俺は雅の友人で霜塚　宏治。んで、雅を回してるのが」

「とどとめめめろろおお〜〜！」

「宮下　美咲よ！」

俺の制止、馬耳東風。美咲がシロを睨みつけるように名乗る。その言葉に数瞬『カチン』ときたように表情を強ばらせたシロだが、その後すぐさま微笑。

「え、何？　万年トレース台？　あははっ、変な名前だねえ」

「なっ！？」

顔を赤らめ怒りの形相の美咲。宏治は宏治で呆然といった様子でシロを見ている。

出たあ！　流石シロ！　美咲、唯一無二の劣等感直撃の一言だあ

！ これは痛い！　ざまあみる美咲！　あっはっはっは

「　ぐふうううああっつ！」

シロを見据えたまま渾身の裏拳炸裂！　勘のよさはここでも出た
ああ！

ああ、揺れるうう。

吐気が込み上げてきました。サンドイッチ全て食していたらと思うとゾツとする。

「何だと小娘ええっ！？　あんたの胸でそんなこと言う！？」

「はあ、宏治はいい奴っぱいけどトレース台は五月蠅いね。それに私の胸には将来が、あ、る、の　誰かさんみたいに終わってないもおゝん」

右人指し指を右目下瞼に添え、舌を出して『あっかんべえ』。

スゲエよシロ！　尊敬するよマジで！　俺もそこまではできねえ
えよ！

美咲はもうかなり憤慨しているらしく痙攣なんぞしている。
俺には背を向けているため表情こそ知れないが、滲み出る負のオーラと宏治の表情から察するにかなりの悪鬼具合いのようだ。

「……ふふっ、どうやらお仕置きの必要のようねえ？　お嬢ちゃ

ん」

指の関節を鳴らしながら美咲。

「ふふつ、おばちゃんに私が捕まえられるかなあ？」

不適な笑みを浮かべたシロ。

睨みあう両者。そして

「死に晒せええつ！」

「へへえゝん、捕まんないよおゝだあ！」

猛進した美咲を浮遊しながらヒラリと交すシロはそのままリビングを抜けて二階へと向かう。

「ツルペタこちらあ 手の鳴る方へえゝ」

「ああゝ！ 待ちなさああいつ！？」

律儀に手を叩きながら挑発の言葉を吐くシロを鬼人と化した美咲が追う。

弾ける豪音、軋む床板、揺れる我が家。

何だよ、この理不尽極まりない展開は？

「……おゝい、宏治いゝ」

今だ人間サンドバック状態の俺は居間に取り残された友人に声をかけた。その言葉に導かれるように友は側に来てくれる。

「何だ？」

「もうすぐ近くのスーパーがタイムサービスだから下ろしてくれえ」

無駄に間延びした口調にも関わらず、宏治は俺を自由の身にしてくれた。

助かったぞ、親友。

久方振り降り立った地面は船上のように揺れていた。
数時間も逆吊りだったんだ。そうなって当然だろ？

「頭いてえ」

「半分は自分のせいだろ。俺たちに隠し事なんかするからこうなる」

「うう、面目ねえ」

宏治の言う通りだった。初めに事情をキチンと説明していたらここまで事態は悪化しなかっただろう。

信頼できる友人の筈なのに何故そうしなかったのか、軽く自己嫌悪だ。

「悪かったな、宏治」

痛む頭を抑えながら宏治に謝罪をしておく。

宏治は横柄に笑っていた。

「よおし、なら今日は晩飯呼ばれてもいいよな？ 親睦を深める
為の夕食会だ。それで許してやる」

断わる理由はない。

「ああ、問題ないぞ。この調子だと美咲も食べていきそうだな」

相変わらず二階からは豪快な足音と努声が響いている。

俺たちは溜め息を揃って吐く。

「じゃ、一緒に買い物行くか？」

「だな」

『お前は行くか？』とは聞かない。こんな激戦区並に危険な場所には俺でも一人で居たくないからだ。

俺たちは玄関を抜け、スーパーへと足を運ぶ。

二人の罵声もそれほど近所には響いてこない

「待てって言ってるでしょおっ！ この小娘ええっ！」

「待てと言われて待ってたら、おばちゃんみたく未発達のまま行き遅れちゃうからいやあ」

「誰が未発達だあっ！？ 誰がおばちゃんだあああっ！？」

嘘です、かなり反響してます。お願いだから現実逃避させて

……。

「しかし、あんな超絶美少女と同棲かよ。羨ましいな、おい」

「お前の目は節穴か？ 美少女ともかく、アイツの性格は美咲以上だぞ。ちなみに同棲ではなく、同居だ」

「実はもう、アンナ事やコンナ事を」

「ダマレロリコン」

「俺は美少女全般が好きただけさ」

「美咲もか？」

「アイツは鬼人だ」

適当な会話。『ニヒヒ』といったように笑む宏治。

「……なあ、宏治」

「ん？」

茜色に染まる空を眺めつつ初秋の風に吹かれながら俺はどうしても腑に落ちない点を宏治に聞くことにした。

「どうして、シロも美咲も初対面であんなにいがみあうんだ？ 理由がわからないんだが」

初め顔をあわせたときからシロも美咲も同様に相手を値踏みするような不機嫌顔だったことを思い出す。

宏治はそれなりに男女経験が豊富である。

俺が知らない二人の機敏な心情をこいつなら解ると思つての質問だった。

が、いくら待っても返答はなく、仕方なしに宏治を伺うと、半開

きにした口許を苦虫を噛み潰したように歪ませて半眼で空を仰ぐという実に妙な表情をしていた。

「どうした？ 歩いていたら鳥のフンでも口に入ってたか？」

再び空を望む俺。

俺の半ば本気の言葉に宏治は肩を大仰に落とし、

「……お前だよ、鈍感野郎が」

と、呟いた。

「鈍感？ 何言ってるんだ？」

「何でもねえよ、気にすんな」

投げ槍気味に宏治は一步前を歩く。

『鈍感』？ 『お前だよ』？ いったい何を言ってるんだ？ 待

てよ、会話の流れから察するに…… っ！？

「おい、宏治まさかっ！？」

宏治は驚いたように振り返った。

「雅？ 気付」

「俺にフンがついてるのかああっ！？」

茜の光が照らす往来の片隅、頭をまさぐる俺に宏治は無言でボデイブローを決めた。

その7:<メイドin冥土?> (前書き)

更新、大幅に遅れてしまいました。申し訳ありません。
その分、かなり長くなってしまいました。読んで頂けたら嬉しいです。

その7:<メイドin冥土?>;

天には真円の月が栄え、それを飾る様に星々が瞬く。
淡い月の光が差す広場の一角に俺はいた。

「雅、約束だよ……」

俺の胸に身体を預け、そう呟く少女を俺は抱き締めていた。
強く、強く。少女の温もりを感じるままに、少女の香りを貪る様に、少女の存在を永劫に己に繋ぎ止めておくように。

少女も俺に抱擁を返してくれる。

優しく、優しく。俺を包むように、俺に安らぎを与える為に、俺を悲しませないように。

「俺は……」

言葉が続かない。

少女は優しくすぎた。

少女は誠実すぎた。

少女は強かった。

「俺は、お前ほど」

強くない。言葉は不意に訪れた少女の唇に塞がれた。

柔らかな感触、甘い吐息、香水等では決して成しえない柑橘系の淡い香り。

名残惜しげに少女は唇を離し、俺の瞳を見据える。月光に照らされた少女の漆黒の瞳は水面の様^{みなも}に揺らぎ輝く。

「大丈夫だよ。だって雅は強いもんね?」

こちらの意図を悟ったように少女は微笑する。

……何で、……何でお前はこんな時に笑えるんだ!?

言葉なき言葉は胸中に消える。

涙に濡れた瞳に耐えられず俺は再び少女を引き寄せ、成すがまま

の彼女を必死に腕に抱く。

首筋に温かな雫が落ち、俺の視界が歪む。

「お願い……、約束して？」

その言葉に、俺は

「いい加減、起きろおおおっ！」

「ツァー!?」

鼓膜を震わせる美咲の叫びとコメカミに走る鈍痛にて俺の意識は現実へと帰還した。

「美咲……、幾等なんでも爆睡中、頭部に蹴り入れるのはどうかと思っぞ」

「これくらいやらないとこの朴念仁は目覚めないわよ」

と、腕を組みながら渋い顔をしている宏治と蹴撃の体勢を解きながら美咲。

「……宏治、言うだけなら小学生でも出来るぞ？」

「何が言いたいんだ？」

「実行する前に止めんかあああつ！」

「そつだぞ、コウ！ お陰でミヤが教科書に埋もれて床に這いつくばってるじゃん！？」

「貴様がほざくなああつ！」

俺がいるのは普通の教室。だが生徒はまばらにのみで、校庭からは運動部の掛け声なんぞ聞こえる。

教室の時計で時刻を確認すると、ホームルーム終了から十分程度経過していた。

どうやらうたた寝していたようだ。

「ふんっ、幾等呼んでも起きなかったのが悪いんじゃないっ」

そつぽを向き、鞆を肩に掛け直す美咲。

机と散らかった教科書を整理するや、俺は鞆を手にとり、美咲を真剣な眼差しで見据える。

「美咲」

「なあによお？」

ぞんざいな言葉遣いの美咲も、俺が真剣な表情をしているのを知るや、慌てたように目を見張る。

「な、何？」

深く息を吸いながら瞼を閉じ、それらを吐き出すとゆっくり瞳を晒す。

美咲は俺の言葉を待つように俺を見据えている。その頬は紅潮しており、何かを期待するような眼差しは小動物のそれを連想させる。俺はそんな美咲に

「ピンクの水玉柄は高校生としてどうかと」

ガスッ！

美咲の細足が我が愚息を襲撃！

「がああっ！……………うつ……………うう……………」

全国の男性諸君！ この痛み分かるよな！？ 詳しく説明しなくても分かるよな！？

全国の女性諸君！ この痛み分からねえよな！？ 世の中にはなあ、罪には問われなくても安易にやっては駄目なことがあるんだよ
おおおっ！

「おまつ！……………何さするだあああ……………」

「滅べ変質者あつ！」

顔を真紅に染めた美咲はそう言い放ち、教室のドアを乱暴に開くと廊下へと赴く。倒れ伏し自ら腰を叩く涙ぐんだ俺など見向きもしない。

美咲めえ〜！……………フルスイングで突き上げおつてええ〜……。マジ痛てえ……………。

「……………大丈夫か、雅？」

宏治がしゃがみ込み腰を叩く。自分でやるより大分マシだ。

「す、すまねえ……」

「言つな、見ている方が痛ましい」

クラスに残った男子生徒は皆一様に顔を青ざめ、股間を抑えて『あれはヤベエぞ……』やら『俺なら多分耐えられねえ……』など、女子は女子で『そんなに痛いのかな?』ってな話をしている。

数分経過して鈍痛はあるものの大分楽になった俺は宏治を手で制しておもむろに立ち上がる。

「いてえ、あのキュボンキュ娘めえ。たかだか柄布の一枚で」

「見たのか?」

「蹴りの時にバッチ」

親指を立ててゲットサイン。

何やら手早くメモを執る宏治。

「転んでも只では起きんか、やるな雅」

「ふっ、まあな親友」

固く握手。

何てやりとりをしながら二人揃って鞆を手に教室を後にする。

「お、そうだ忘れてた」

昇降口間近まで進んだ頃、おもむろに宏治は自らの鞆から一冊の本を取り出した。

「っ！？ それまさか！」

「頼まれてたもんだ、いい情報聞けたし貸し借りなしでお前にやるよ」

宏治の手から渡された『ブツ』を素早く己の鞆に押し込む。

「サンキュ、悪いな」

「ふっふっふ、完全に潰されなくて良かったな」

「ふっふっふ、だな」

下駄箱から靴を取り出し細く笑む男二人。

束の間、男同士の友情を分かちあった俺たちは揃って昇降口を進む。

「ところでよ？」

「ん？」

宏治は極めて自然に俺と併歩しながら普段通り言葉を摘む。

「さっき何か夢でも見てたのか？ うなされてたぞ、お前」

瞬間、心臓が一段と激しく鳴動する。不快な疼痛を感じ、視界がうつすらとぶれる。

それらを全て意思の力で捻り伏せ、平静を装い普段の調子で進む。

「……いや、別に。夢は見なかったな」

「そっか、ならいい」

返答が遅れた事など意にも返さずに宏治。

その後は校門前で美咲を交え、三人で帰路に就く。

取りとめない雑談の中、俺は一步前でふざけあう二人の背を眺めながら我知らず、

「………琴香」

そう、呟いていた。

「いやあ、食後のバニラアイスは一段と格別う」

「オヤジか、お前は」

夕食後のリビングで俺とシロはくつろいでいた。俺の手元にはブラックコーヒー、シロの手元にはバニラアイスが三パック、うち二つは既に処理済み。

白米はお碗一杯しか食わないくせにアイスはこの量。

この子はどうも主食がミルクかバニラアイスの節がある。この寒くなりつつある秋只中よく食べるものだ。

「だりえが、オヤヒよあ！？」

「アイスを口一杯に頬張りながら喋るなあ！こっちの口が冷えるわあ！」

シロの存在が宏治たちに知られて早一週間が経とうとしていた。その間、宏治が独自の情報網をもってシロの表面上の経歴を『国外にいる妃夫妻の知人の娘が所用で居候している』としてくれた為、近所からは興味の視線はあるものの、深くは追求してこない。

だが、宏治は『所用』の内容については一切答えなのだ。あからさまに気まずそうな調子で話題を転換しようとするのみ。

一度、回覧板を渡しに来たおばちゃんに、

『私は応援するわ！ 雅君、女の子一人のために命賭けているなんて凄いいじゃない。世間の目なんか気にしちゃ駄目よ！ 頑張つてね』

などと言われた。勿論翌日、宏治をしばいたのは言うまでもない。

「ねえ、雅い。この後なんか予定ある？」

三つのアイスをたいらげたシロは喜々とした様子で机に頬杖をつく。

食事も終わり後は風呂に入り就寝するのみ。特に予定はない。

「特になんもないぞ、どうかしたのか？」

「じゃあさあ、今日も対戦しない？ いいでしょ」

シロはこのところテレビゲームに夢中だ。俺が学校に行っている間暇だろうとやらして以来、飽きることなく連日続けている。

あまりの気に入りぶりに、シロの故郷にはこういったモノがなかったのか聞いてみたところ、

『あつたにはあつたけど……、やらせて貰えなくて……』

だ、そうだ。余程、抑圧された生活だったのかもしれない。

「ああ、別にいいぞ、しかし懲りないな。あれだけ負けていながら」

まあ、あまりやりすぎはどうかと思うが多少は子供らしい娯楽を与えるのもいいだろう。

俺は椅子から立ち上がりテレビとそれに繋がれたゲーム機の元に座ると、シロも隣に腰を降ろし電源をオン。

「ふう〜ん、そんな事言えるのも今のうちよお。特訓の成果を見せてあげるわ!」

「随分自信あげだなあ」

「まあねえ、秘策があるからあ」

「秘策?」

「そう! 名付けて、リアルで雅をしぶらせてその間に全力攻撃作戦!」

「フザケルナヨこむすめ」

拳を握り締めながら主張するシロの額にエセ地球外生命体口調でデコピン一発。

「いたああい、何すんのお〜! 暴力なんか最低だあ〜。訴えてやるう!」

「ソレヲおまえガイウカ? いってシマウノカ!? いえるタチバナなんか!」

これまで味わった、めくるめく暴力の数々が頭をよぎる。

「私が法なお〜! 文句あるう!」

「ウラア」

デコピンを四連撃! 軽くのけぞるシロ。

「何すんのお〜!」

「制裁じゃ、やるんならさっさとキャラきめい」

俺はキャラセレクトで長大な野太刀を構えたキャラを選択、シロは『うう』などと唸っている。

「……電撃は」

「デコピン乱舞、カイシマデアト五ビヨウマエ、四、三、二」

「さあ、対戦だああ」

親指でおさえた中指を連続で弾きながらの俺に対し、シロは又ンチャクを装備した中華風の少女をセレクトし、意気高々とした調子相変わらず切り替えがはやい娘だ。

画面が変わり、二人のキャラが画面上で睨みあう。
いざ、開戦！ と思った矢先。

『ピンポーン』。

インターホーンが鳴った。

画面内のチャイナ娘が又ンチャクを俺のキャラに振り落とす寸前にポーズボタンをプッシュ。

「ああ〜！？ 時空間制御とは卑怯なあ〜！」

「ただのポーズだ。近未来魔術師風に解釈するでない」
腰を上げる俺に、シロは不服そうだ。

「ちよい待ってる？ 出てくるから」

「うう〜、無視したらあ〜？ もう八時なのに来客なんて凍ったバナナを武器にしたグレイかもよあ〜？」

「……ある意味見てみたいな」

中途半端に剥き身の冷凍バナナを腰溜めに構え、『おとなシクシ口、ちきゅうジン』なんて言う宇宙人の姿が浮かぶ。

なんだかファンシーかファンタジーかSFホラーわからなくなる微妙な図柄だ。

摩訶不思議な思考を残し、玄関に向かう俺。

「はやくしてよぉ？ 私はすぐ遊びたいんだからぁ」

シロの言葉を背後に聞き、玄関の鍵を開けノブに手を掛ける。

「はい、どちらさまですか？」

言い、扉を開く。

「夜分遅くに申し訳ありません。恐れ入りますがこちら、妃雅様の御自宅でしょうか？」

訪ねてきたのは二十代前半程の女性であつた。上品な物腰で一礼したのちつむがれる言葉にはどことなく優雅な印象が伺えた。

ノンフレームのメガネを掛け、両サイドのもみあげ部から肩口辺りまで垂らした黒髪を白いリボンでまとめた独特のショートカットをしている。

「……………」

俺は黙つた。というより、固まつた。

それはもうロウソクから垂れ落ちた雫の様に。

女性は俺の言葉を待つように俺を不安気に見ている。

「あ、あの？ もしかして私、間違えてしまいまわたくししたか？」

「い……、いえ。ここは、確かに……、妃家です……が」

自然、言葉が途切れがちになる。女性はその優雅な物腰にひけをとらない美女だった。シロが『可愛い系』ならこちらの女性は『綺麗系』といえるような感じと言えば分かりやすいだろう。

だがしかし！ そんな外見でその人物を判断する事によっておこる世間一般的な『困惑』などが俺におこるはずはない！

あの帯電猫娘と暮らしていれば嫌でも警戒心が先にたつ。『綺麗なモノにはトゲがある』ってやつだ。

ってな訳で俺は別段見とれていて言葉が詰まったのではない。
理由は別にある。

「では、貴方様が雅様ですか？」

「え……、ええ。まあ……」

俺が何故にここまで自失しているのか、簡潔極まりなく短絡的な
がらこのうえなく理解できるのであるう理由をワンワードで答えよう。

……女性は『メイド服』を着ていた。

「……………」

淡い紺色に純白が栄えるレースが多用されたエプロンドレスに胸
元のワインレッドのリボン、メイドお馴染のカチューシェにその口
調。

どこからどうみても『メイド』さんだ。徹頭徹尾完全無決に『メ
イド』さんだ！ ヒヤッホウ~~~~~！

……………。

何が『ヒヤッホウ』だあああつ！？

ちよい待て！ 何なの！？ 何なの！？ 何なのおおつ！？ 何
故に『トンネルの向こうは不思議な世界でした』みたいなノリでフ
アンタジック感溢れるメイドさんがでてくる！？ あああ、アレか
！？ これは新手の詐欺とかそういうやつか！？ おのれえ！ 俺
の弱点的要素を狙つての策略かああ！？ 個酌な真似をおお！？

こんな女性に『雅様の元で働かせて貰えませんか？ 通常一ヶ月間百五十万円の所、今なら半額の七十五万円での大サービスです。

あ、お金はこちらが指名する消費者金融がありますので御心配ございません。……あの、お願いします雅様。貴方様が雇ってくださるなければ私の家族が全て路頭に迷うことに……。精一杯頑張りますから……。』なんて言われたら……。ノオオオウウツ……。！？ 爆撃か！？ 空襲か！？ 俺を墜とす気かあ！？

『錯乱中につき暫くお待ちください』。

いや……。いつそ雇うという手も アホかあああつ！？ 現金持ち逃げされて借金が残るのがオチだろ！？ 騙されるな俺！ 騙されるな俺！ 騙されるな俺ええっ！

「あ、申し遅れました。私」

柔和な微笑みを称えた女性がなにか言おうとした寸前、俺の後頭部に妙に角張った『何か』が飛来した。

「ノガアアツ！？」

「こらああつ下僕うゝ！？ いったいいつまで待たせんのよおおっ！？」

シロの怒声を背後に受け、飛来した物体によって俺の身体は前のめりに押し出され

「つ！？」

「え？」

女性に覆い被さるように倒れた。

混乱が消え去り、新たに困惑が表出する。

至近距離に存在する女性の顔がみるみる紅に染まってい

「きゃあああつ！？」

その時、俺は確かに見た。知らぬ間に女性の手に握られた黒光りする長方形の『モノ』を。先端にある電極から電光を発する禍々しき『凶器』を。女性の手には不釣り合いなそのデカさからあきらかに違法であろう『スタンガン』を。

それを理解したときには俺の意識は闇に溶けていった。

ははは、悲鳴すらでない……。ああ……。

瞼を開くとそこは不思議な世界でした。……なんて事はなく、視界には見慣れた天井がある。

ここは自室、俺はベットに寝ていた。

ってまさか『夢オチ』！？

まあ、確かに突然メイドさんがやって来るなんて設定的に無理があるしな。だいたい俺から倒れこんだとはいえいきなりスタンガンですよ？ そんなメイドさんありえない、ありえな

「ですからシロラディア様？ いくらなんでも、いきなりタウナージを頭部に投げつけるなんて危険な真似はやってはいけないことなのです」

「ぶうー、それをいうなら初対面でスタンガン押し付けるのはいいわけえー？」

「……突然のことに動揺したとはいえ許されることではないでしょうね」

「だったら」

「だからといってシロラディア様が悪くないわけではありませんよ。私は勿論、シロラディア様も雅様に謝罪すべきです」

「……ぶうう」

「………ありえたよ。ベット脇にてシロと会話してるよ。ってか、会話の流れから察するに

「あ！ 雅い！？」

俺の意識回復にいの一番に気付いたシロが枕元にやってくる。

俺は上体を起こすが腹部には疼痛を感じ、身体のいたるところが痺れて思うように動かない。

「雅いゝ大丈夫う？ まったくホントにイルはどうかしてるよおゝ。出会い頭にスタンガンなんてえゝ！」

『プンプン』といった形容がよく似合う感じで唇を尖らせるシロに俺は秘密兵器を手に取り痛恨の一撃をお見舞い！

「お前のせいじゃあああ！」

『スパーン』といった小気味いい音とともにシロが頭を抑える。

「いったああい！？ 何よそのハリセン！？」

「対シロ用ツッコミ兵器だ」

使用済みの兵器をベット下に戻し、非難がましいシロの視線を無視して、俺は女性に問掛ける。

「あの、もしかして貴方はシロの関係者ですか？」

女性は先程の言葉のとおり、謝罪を全面に表した表情で気まずげに立ち上がり頭を下げる。

「御挨拶が遅れ、大変失礼いたしました。私、ルシファー家侍従兼

シロラディア様のお世話をさせて頂いたイルフィール レスターと申します。先程は本当に申し訳ありませんでした」

……やっぱり関係者でしたか。

侍従つてことは間違いなくメイドさんということ、しかもシロの家の。

……………もしやシロってかなりのお嬢様なんか！？

「あの、頭をあげてください。俺ならこのとおり問題ありませんから」

俺の言葉に沈黙のままの彼女、イルさんは身じろぎせずに姿勢を維持したままだ。

「それに、もとわといえバシロのせいですから。　　ってかお前、タウン　ージなんか投げたんだと？」

「なんのことアルかあ？」

「黙れ、エセチャイニーズ」

秘密兵器再び！

「いたああい！」

「　と、いうわけでイルさんはまったく悪くないのでまずは座ってください。落ち着きません」

「は、はあ……………」

呆氣にとられたようにイルさんはカーペットの上に腰を降ろす。それを見計らい、俺は早速本題に入ることにした。

「まずは初めまして、妃　雅です。前置きもなくすみませんが、今日はこういった用件だったのでしょうか？」

俺の言葉にイルさんは穏やかな微笑で言葉を返す。

「はい、もう御気付きでしょうが。私はシロラディア様を保護してきました」

……やっぱりか。

家出中のシロのもとに身内が来る理由はそれくらいしかない。シロがイルさんから影になる位置で俺の上着の裾を握る。

いつかは来るだろうと予想はしていたが、まさかこんなにはやいとはな。

「……イル、さっきも言ったけど私は帰らないからね。あそこはヤだもん」

シロがイルさんに背を向けたまま独白気味に呟く。

「シロラディアさ」

「ヤだもん！」

イルさんの言葉を遮りシロは悲痛な言葉を吐く。

いつしか、険悪な雰囲気満ちた沈黙の自室に居心地の悪さを感じた俺は意を決して静寂を破る。

「……シロ、悪いがコーヒーでもいれてきてくれないか？　ちょっと頭がボォってなってる」

「……雅い」

顔をあげたシロはすがのような眼差しをしていた。先程のおふざけも俺が寝ている間にあったであろう『何か』のはげぐちだったのかもしれない。

「悪い、頼むよ」

言う。暫く逡巡していたシロだった。がややあって俺のもとを離れ、

ドアを開ける。

「……すぐ煎れてくるね」

「おお」

笑い答えてやる。

ドアが閉まり、部屋には俺とイルさんの二人っきりになる。

「さて、何か俺に言いたい事があるんでしょう？」

シロが退室した後、俺はイルさんに問掛ける。以外氣に目を見張る彼女。

「気付いていたんですか？」

「わざと俺の前でシロを挑発して退室させようとしていたことですか？ それとも 俺にシロを説得させようってことですか？」

俺の言葉に満足したように笑みを浮かべるイルさん。

「御明察です。雅様が氣絶している間、シロラディア様から貴方様のことは聞かせて頂きました。雅様が特に事情も知らないシロラディア様を受け入れたこと、仮契約をしたこと、そして 貴方様のことを大変慕っていることも」

言い、ゆっくり立ち上がりエプロンの裏に右手を伸ばし、引き抜く。

その掌にはイルさんの細腕に明らかに不釣り合いな、黒曜石の如き艶やかさをもった凶器、大型の自動式拳銃が握られていた。

銃口がでかい。……本物か。

「随分と物騒なモノを持ってるんですね」

「護身用ですよ。近頃は何かと物騒だと聞きますから」

俺の眉間に照準を合わせながらイルさんは相変わらず微笑みを浮

かべている。

「シロラディア様の話を聞く限り、雅様が邪な方でないのは分かりました。もしかしたらシロラディア様をこのまま預けても大丈夫かもしれません。しかし、シロラディア様はまだ子供です。旦那様や奥様の心配さえ理解している様子もありませんでした。それに自分の身分も省みずに人間界に逃亡されたことでルシファー家の表札に泥を塗りました。これらは主であるシロラディア様といえど許せる行為ではありません」

「だから俺に説得して欲しいと？」

「いえ、正確には拒絶して貰います」

容赦のない言葉。『拒絶』とは即ちその人物に対しての『存在の否定』。シロが俺に望んでいた事のまさに対極の行為。

「……もし嫌だと言った」

イルさんが撃鉄をあげる乾いた音が部屋に木霊する。

「言えると思いますか？」

イルさんが言う。柔らかな表情、和かな声、雰囲気、それら全てに明確な殺意を込め。

いままでシロや美咲が俺に向けた『モノ』とは一線を隔てるであらう異質な気配。

『殺す気』で『殺そう』としなければだせない『殺気』だ。

「……はあ、これじゃ選択肢なんてないじゃないですか」

イルさんは無言で俺の言葉を待つ。

俺から言えるのは一つだけ。それだけで問題ない。

俺はイルさんの瞳を見据え

「ふざけるな、雑魚が」

瞬間気配を変質させる。普段のお茶らけた『雅』ではなく『妃雅』へと。

日常では不必要な狂気を纏った『殺気』を解放すると同時ベツトから降りたち、背後に手を伸ばして鉄製筒状のモノを握り、振る。鉄がスライドし、約一メートル程の鉄棍となる。『特殊警棒』といわれる武器だ。

「……流石は天位の使い手ですね。ここまでの殺気だとは」

『天位』、彼女はそう言った。どうやら俺のことも随分調べていたようだ。だが、今はそんなことはどうでもいい。

「あんた、さつきから聞いていればいい加減にしろよ。子供だから心配を理解してない？ 表札に泥を塗った？ ふざけるなよ。何でシロがそんな風に言われなくてはならない」

「結果論です。シロラディア様は純粹すぎました。それ故に、魔界での生活に耐えきれずに逃げ出しました。私は彼女を連れ戻す義務があります」

「義務だと？ はっ、自分の責任を放棄した者が義務だと？」

「まわりくどい言い方ですね。何が言いたいのですか？」

嘲笑と侮蔑をもって俺は言葉を吐く。

「あんたシロの世話係って言ってたな。なら当然シロが家出をした理由も知っているはずだ」

無言の彼女を肯定と受けとる。

「それほどシロの近くにいながらあんたはシロを支えてやってたのか？ あの純粋な少女を救おうとしたのか？ シロが逃げだした所をみれば一目瞭然だな」

俺は怒りに燃えていた。いつ爆発するであろう激情を抱えていた。

「それを子供だから、泥を塗ったから連れ戻す？ 調子に乗るなよ。自分達の怠慢が招いた事象をシロになすりつけるな！」

彼女のみに聞こえるよう、語気を強める。

「俺はシロが望む限りシロを守るつもりだ。あいつが独り歩き出来るまで。拒絶なんかするつもりもない」

「……それは偽善ですよ。いくら仮契約をしたといっても雅様とシロラディア様は所詮は赤の他人。そこまでシロラディア様に尽したところで意味はありません」

「はっ、元々俺は偽善者だよ。意味なんかいらない、意義があればそれでいい」

得物を彼女に向ける。

「あいつは隠しているつもりだろうが、シロは今、必死に自分自信と向き合おうとしている。子供だからこそ真剣に純粋に、な。それを邪魔するというならシロの身内だろうと……容赦はしない」

「スタンガンで多少麻痺した身体で私とやりあう気ですか？」

「いらん世話だ。こんなものハンデにもならん」

お互いに睨みあう。

大気に満ちる緊迫した雰囲気以身を任せ、双方ともに互いの出方を窺っていた。

時は不変だ。やや緩やかに一定のリズムで流れていく。

数分後、お湯が沸き蒸気が噴出するホイッスルのような音が響いたおり、場の雰囲気豹変した。

「合格です」

.....。

はい？

言葉後、いそいそと拳銃をしまいこみ、麗美な微笑を浮かべるイルさん。

そこには数瞬前にあった殺気はなくあるのは『喜色』だった。警棒を彼女に向けたまま俺は一瞬思考停止した俺にイルさんは再び頭を下げる。

「申し訳ありません。失礼ながら試させて頂きました」

..... 試す？

相変わらずフリーズしている俺をさておき、イルさんは口を開く。

「私ことイルフィール レスターはルシファー夫妻からある二つの命を受けました」

「..... 命？」

「はい、一つは先に申しました通り、シロラディア様を保護すること。二つ目はシロラディア様がお世話になっている妃 雅様がもし信用出来る方なら シロラディア様を暫く預け、且つ妃家に御使えすることです」

……おい待て、もしかしてこれって。

「……あのお、もしかしくなくてももしかして俺、殴られました？」

武器を下げつつ、左手で頬を搔く。額には冷や汗が滲んでいた。

「……申し訳ありません」

その言葉で理解した。このメイドさんが俺を試す為に愚言を吐いていたということを。

「…… 雅様の仰った通りシロラディア様はあまりに純粹です。それ故に表面上の親切に騙されている可能性も否定できませんでした。数々の無礼な発言、お許しください」

「つまり、シロの言葉だけでは俺の内面は知れなかった。だから脅しまがいの行動で俺の内面を探ろうとした？」

「はい、…… 正直、雅様があそこまでシロラディア様のことを考えているとは思いませんでした。それに比べて私は……」

頭をよぎる数分前の記憶。『雅』にはにつかわしくない罵詈はりさんほう讒謔の数々。

素早く得物を背後に戻しイルさんの正面で正座。

「？ …… あ、の、雅様？」

何で初めに気付けなかったのだらう。イルさんはするつもりなら

無理にでもシロを連れていった。それこそ俺が気絶している間にも。

イルさんはイルさんなりにシロを思い遣り、俺を見極めようとしたのだろう。それ故の殺気、それ故の殺意、それ故の敵意。そして、謝罪。

彼女はきちんと己の非を、責を、咎を理解し心底後悔していた。だからこそ、それを償うために俺を試した。

そんな彼女に俺はなんてことを……。

「すみません。貴方の事を著しく誤解していました」
土下座をした。額をカーペットに密着させ、誠心誠意気持ちをこめて。

「え？　あ、あの？」

頭上から聞こえる声に答えることなく俺は言葉をつむぐ。

「許して下さいとはいえませんが。俺は間違いなく貴方を傷つけたでしょう。ただ、贖罪とはいえませんが俺に出来ることがありましたらなんでも言ってください。お願いします」

「みや、び様……」

見掛けだけの欺瞞を見せつけられて愚劣にも挑発に乗ってしまった浅薄な自分に心底嫌気がした。どんな無理難題を乞われても文句など言える立場ではない。

それだけの事を俺はした。

ややあって、目の前の気配が座り込むのがわかった。

「顔をあげてください、雅様」

促され、ゆつくりと顔をあげると、イルさんが慈愛に満ちた聖母の様な笑みを浮かべて俺を見ていた。

「……イルさん」

「雅様が謝る必要性はどこにもありません。これは、私が自分で招いたことなのですから」

「それでも」

俺がイルさんを傷つけたのは事実。

その言葉を俺の前でたてた人指し指で停めるとイルさんは聖母の様な笑みを妙に子供っぽい無邪気な笑みに変えて続ける。

「でも、雅様がどうしても謝罪したいというのでしたら、私をこの家において貰えませんか？」

「え？」

イルさんは至極単純な要望を唱えてきた。

「お願いできますか？」

悪戯地味な調子で言うイルさんはどこか楽しそうな様子でいる。急にあどけない仕草のイルさんに俺は何故かおかしくなり

「　　はは、あはは！」

不思議そうに俺を覗きこむイルさん。

「あの、雅様？」

「あはは ご、ごめん、はは。何かさあ、ついさっきまでお互いに得物を向けていた奴らの会話じゃないなって思ったらつい、はは」

声を出して笑う俺に呆けていたイルさんだが、ふとした拍子に彼女も笑いだした。

「ふふふ、確におかしいですね」

「だよなあ、あはは」

声をだして笑いあう俺たちに気付いたのか、シロが階段を登ってくる音が耳に届く。

俺はイルさんに右手を差し出し、シロの時とおなじように握手を求める。

「喜んで歓迎しますよ、イルさん」

俺の手を握り、はにかむイルさん。

「ありがとうございます。それと、私の事はイルとお呼び捨てください」

「それはいいけど、出来れば俺のことも呼び捨てにしてくれないか？ それなら気兼ねない」

顔を何故か朱に染めつつ向くイルさ じゃなくてイル。

「あ、いえ。主をるように呼ぶのは」

「俺は主じゃない。友人として俺は仲良くしたいんだが。それに一緒に暮らす以上、これからは家族だし俺には気兼ねしないでくれ」

俺の言葉に顔はそっぽを向きつつ瞳は俺に向ける。

「ってかべらぼうに可愛いよ！ しかも綺麗だよ！ 『キレカワ』だよ！」

「しかももしかめメイドさん！ うおおー！ 全世界の熱き情熱が俺を蹂躪してるぜえっ！」

ん？ さっきの『俺』はどこに行った？ フツ、ヤツは銀河を越

えてブラックホールの彼方に消えたのさ。　ごめんなさい。謝りますからその痛いものを見る目はやめて……。

「友人、家族、ですか？」

「ああ、駄目かな？」

ほんの少し躊躇したようにするイルだが、耳まで紅く染め、恥じらいを混ぜた声音で、

「ふ、二人だけのときでしたら………」

と、蚊の鳴くような声量で囁くイル。

「ってかヤベエ！　限界ですよ！？　反則的だよ！？　微妙に『二人だけのときでしたら』って言葉ヤバくない！？　そんなこと言われたら理性もちませんよワタクシ！

はじめのスタンガン騒動の時もそうだが、イルは純情過ぎだ。しかも、俺のツボをすっかり押さえてる！

「そ、そうか。分かった」

「は、はい」

手を握りあっているため互いの体温が直に伝わる。イルの手はもうかなり熱を持っているようだ、かくいう俺も似たような状態だろう。

ヤベエ、ヤベエ、ヤベエ、ヤベエ、ヤベエ、ヤベエ！　何故に手を離さないの！？　むしろしっかり握ってるよイルウ　！待ってええー！？　理性ブレイクするよお！？　ちよつとちよつとちよつとおおー！！？

俺たちは今、至近距離で見つめあっている。気のせいだろうか、イルの顔が徐々に近付いているような！？

「あの、みや」

ビーストモード
野獣状態まで秒読み十秒をきった頃だった。

「入るよお、雅い　って何やってんのアンタラアア！？」

突如出現した猫娘は事情を問うことなく床に置いたトレイから力
ツプを一つ取り　灼熱のコーヒーをぶちまけやがったああ！！

「　アジイイイイ！？　アチアチアチイイ！？」

イルの手を離し、狂喜狂乱踊り狂うように自室を飛び回る俺。

心地よい緊張感だったイルの体温よりあきらかに高温の液体が服
に染み込み、体表を駆け巡る。

最早、熱いではなく『痛い』。

悪寒を感じ、冷や汗が背を伝う。

「み、雅様！？　大丈夫ですか！？」

「ちよつと雅い！？　あんたまさかイルに手え出したんじゃないで
しょうねえええ！？」

突然の出来事におろおろしているイルに、ご立腹気味で論点が意
味不明な発言をする放電をはじめたシロ。

俺はどちらにも対応している余裕はなく、直ぐ様上着に手をかけ
脱ぐ。

「ちよ！？　な、何で脱ぐんですかあつ！？」

「雅い！？　早く答えないと黒焦げにするよおおつ！？」

両手で顔を覆うイル、更に電圧をあげるシロ。

軽く騒乱状態の自室。タオルを取りだし半裸で体を拭きながら俺

は騒乱の先導者を討つことに決めた。

三度^{みたひ}秘密兵器を手にし、シロに渾身の一撃を浴びせる。

「いい加減にしやがれえええっ!？」

本日三度目の心地よい音が部屋に響いた。

「はあ、どつと疲れた……………」

俺は自室のベットに寝そべりながら窓から見える夜空を眺めていた。月はまだでていないようで星々がその控え目な光でもって夜空をきらびやかに彩っている。

時刻は十一時を過ぎ、あの騒動から三時間は経過していた。

あの後、俺とイルはシロにことの事情を説明した。もちろん、俺たちが一触即発の状態になったのは伏せて。

シロはそれを聞くと大袈裟なほど喜び、イルに抱きつきながら「やったあ! イルも一緒お イルも一緒お」なんて言っていた。

やっぱりイルはシロに信頼されているようだった。仲のいい姉妹のようでなんとも微笑ましかった。

それから客間を簡単に整理し、イルの居住スペースを生成した。

シロは「一緒に寝ようよお」とイルに言っていたが彼女は「侍従風情が主とおなじ環境を得るわけにはいきませんから」と断っていた。

あの時のシロといったらまさにフグのような膨れっ面だったなあ。自然笑みがうかぶ。

日常に変化が生まれ、大変な事はやまほどあるが今の俺には『守るべきモノ』が沢山ある。

「……………琴香」

つい言葉が洩れる。

夜空を眺めながらの呟きは誰の耳にもとまることなく虚空に消えた。

なあ俺、『約束』守れてるかな？ 今の俺をみたらお前は喜んでくれるか？ なあ……琴香。

妄言だと分かりつつ考えずにはいられなかった。下らないと思いつつ考えずにはいられなかった。決して、アイツの事を忘れる訳にはいかないから。

目をつむり、大きく息を吸い、吐きだすとベットから跳び降りる。数時間前までといい、今といいどうも今日の俺は『雅』らしくない。まあ、昼間の夢が原因だろうな。

頭を掻き、雑念を振り払い勢いをつけて立ちあがる。

「たくつ、……俺もまだまだだな」

窓を開き夜風にあたる。

冷えた外気が髪を撫でるのを感じながら俺は両手を打ち合わせ口を開いた。

「シリアス状態は終りにして、だ」

束の間の外気を遮断し、机のうえに乗せた鞆をひらいて中から放課後、宏治から受け取った『ブツ』を取りだして備え付けの椅子に座る。

ふっふっふっ、さてさてえー、読ませてもらうとするかあー。
『ブツ』を開こうとしたとき、

「雅様、起きてらっしゃいますか？」

控え目なノックと意識して下げられたであろう声が耳に届いた。すかさずページを閉じ、鞆に押し戻して俺はその声に答える。

「お、おう、起きてるぞぉ？」

語尾が疑問系なのが謎だが、突っ込みは禁止だ。動揺と寂寥感を封じ込め俺が応じると一拍おいてドアがゆっくり開かれる。

「失礼します。すみません、こんな時間に」

案の定、そこに立っていたのはイルであつた。

メイド服をいまだに着込み、俺の部屋に入ると直立不動の姿勢で待機する。

「いや、問題はないけどどうかした？」

「いえ、実は雅様に」

「雅、だろ」

言葉を割り込ませる。今は二人だけだし、シロはもう寝ているだろう。後ろ目たさはないはずだ。

照れたように視線を下げ、恥じらう姿勢になんとも言えない『情欲』を げふげふつ、失礼、『愛らしさ』を感じながらイルの言葉待つ。

「……………雅に、その、言うておくことがありますて……」

観念したように絞りだした言葉に俺は問いかえず。

だからさぁ、何で俺の胸を突き刺す言動と行動するわけ？ 誘ってるんかこのメイドさん？ これでも華の男子高校生ですよ？

俺も一匹の狼なんですよ？

一息つき、ベットを指差しながら俺。

「話があるなら座って話してくれないかな、落ち着かない。それと
言っておくことって？」

遠慮がちベツトに腰を沈めると、イルは厳かに口を開いた。

「シロラディア様の事と、雅さ　雅……の事です」
椅子を回転させイルに身体をむける。

「イル、俺の事っていうのはある程度想像できるが、シロの事情を
話すつもりならやめてくれ。本人が話したくないことを第三者から
聞くのは筋違いだ」

首を横に振るイル。

「わかってますよ。私が言いたいのはそんな事ではありません」

「え？」

おかしい。話の流れから間違いなくシロ自身の生い立ちや身成を
語るものだとばかり思ったが。

読みが外れ、頭を捻る俺にイルは続ける。

「雅の口からお聞きしたいのですが、シロラディア様と仮契約をし
たのは間違いありませんか？」

「は？」

予想外もいいとこだ、まるつきり検討違いの質問に言葉に詰まる
が、今までシロと生活してきたなかであつた『念話』の事や『位置
検索』などのシロが言う『契約の証明』を交えてイルに答える。

「　こんなとこかな。つと言つても、俺が寝ている間にしたつて
言つてたから実際はどうだか分からないよ」

「……そうですか、はあ」

そう言うイルはうつむき気味に何やらブツブツ呟いている。

「……負けた、シロラディア様に……負けた」

「おい、負けたって何だ？」

殊更に驚いたようにイルが頭をあげ、入室時からほんのり朱に染めた顔を俺に晒す。

「な、何でもありません！？ 気のせいですよ！？ 決して私は“負けた”なんて言ってますから！？」

なんか、必死に弁解してるけど……いや、突っ込みは放棄だな。きっと嘘がつかない女性なんだろう。

咳払いをし、気を取り直したようにするイル。

「雅の証言とシロラディア様の言葉を組み合わせで考えた結果、雅とシロラディア様は仮契約をおこなったとほぼ、断定して間違いないでしょう」

言葉を切り、意味ありげな視線をむけてくるイル。

「雅は、シロラディア様から仮契約の意味を知らされていないと思いますので、この場を借りて説明しますね」

「契約の意味？」

「はい。まず契約というと私たちには二つの意味合いがあります」
流暢に言葉を続けるイル。

「一つは人間界同様に約定をたがえること、企業や個人間での取引などの際によういられるます。一般に交渉契約といえますね、そして二つめ」

会話の内容からこちらが本命だろう。心持ち耳をかたむける。

「異性間で用いられる契約、交際契約があります」

……は？

……！！？

「ちょ……、イ、イル？ それって……もしかして……、まさかシ
口と俺が……！？」

「御想像の通りです。仮契約とはすなわち、交際状態を意味します」
視界が暗く染まる気がした。

得体のしれない頭痛と目眩を意識しながら俺はあからさまに動揺し
ていた。

「ちょ、嘘……、マジかぁ……？」

「正確には婚約者といったほうが正しいですね」

「なあああつ！！？」

更なる衝撃の言葉に開いた口が閉じられない。そんな俺に構わずイルは会話を進める。

「交際契約にも二種類ありまして、一つは知つての通り仮契約。二つ、本契約。本契約はこちらの世界での結婚となります」

嘘おおっ!!？

「本契約は仮契約をした後の発展型というわけです。 って大丈夫ですか？」

頭を抱えうめく俺にイルは声を掛けるが正直まともな思考が出来やしない。

だつてオカシイでしょ!？ いつの間にか俺『シロの恋人』みたいな位置付けだつたて事だろ!？ 何だよそれええっ!？ 相手『シロ』だよ!？ あの『お子ちゃまランチ』だよ!？ ってか、シロはそれを知つて『契約』したのか!!？

「多分、シロラディア様は意味らしい意味を理解せずに契約したのでしょうね。なにぶん無邪気な方ですから」

俺の内面を察してか、イルが補足を入れる。

「ちなみに一度契約した以上、雅側から契約破棄は出来ません。原則的にシロラディア様が破棄しない限り雅はシロラディア様の契約者でありつづけます」

「マジかよおお……、アイツたいした事ないみたい風に言つてたのにそんな大事だとは……」

「信頼したからでしょうね」

だからといって一笑に伏す事など出来やしない。

「……あのさ、その事誰にも言わないで貰えないかな？」

これからイルがこの家で暮らす以上、宏治や美咲との遭遇は避けられない。そのような事実が漏洩しようものなら……ごめん、想像の範疇を越えております。俺、原型を留めてるかな？

「勿論です。ただそういう事実があるという説明をしておきたかったです。他意はありません」

一礼して上げた顔には真剣な色がみえた。

いや、だからシリアスはいいって。コメディで行こうよ？ キヤラ合わないだつて、俺え！？

「雅、次は貴方のことです」

どうやら今回は内情は読んでくれなかったらしい。どうせ話題は『アレ』だろう。

「“天位”の事か？」

辟易したようにいう俺にイルは首肯する。

「はい。先刻の貴方の殺気からみて、かなりの使い手ですね」

「イル、やめてくれ。確かに俺は天位の使い手だがそれほどだいそれた奴じゃない」

面前で手を振り否定を表す。

「それに、さっきのは正直本気で反省してるんだ。頼むから蒸し返さないでくれ」

誤解で、それもシロの身内に刃を向けたことははっきり汚点としか言いようがない。

「別段、蒸し返すつもりはありませんよ。ただ、シロラディア様はこの事を知ってるんですか？」

「いや、知らない。言っていないからな」

『天位の使い手』。

この意味を知るものはそうそういない。

「出来ればシロには黙っててくれないか？」

「どうしてです？」

問いに反問で返すイルに肩をすくめながら俺。

「…………正直、君はあまり気分がいいものじゃないだろう？」

目を伏せがちにイル。

「確かにそうかもしれませんが、私が言わなくても恐らく近いうちにシロラディア様は知ることになりますよ」

確定的なイルをいぶかしながら俺は先を促す。

「何でだ？」

「シロラディア様が望んでませんので詳しくはお伝えできませんが、シロラディア様は魔界においてかなりの重要人物なのです。ここだけの話、厄介事に巻き込まれたのも一度や二度ではありません。その彼女が、ろくに護衛のいない人間界にいるなど知れたらどうなるか」

まさか。

「シロを狙いに何者かがやってくるかもしれないって事か？」

「絶対とはいえませんが、可能性は高いです」

淡淡としたイルの言葉には一切おどけた様子がないところをみると、この話は事実を語っているのだらう。

つまり、イルが言いたいのは

「シロを守るためには俺も動かざる得ない状況も考えられる。つま

り、そういう事か？」

「はい、私一人では流石にカバー出来ない場合もありますから」
イルの顔が苦笑に歪む。このメイドさん自体、ただ者でないのは先の件で明瞭となっているが、イルの言う通り一人でカバー出来る範囲など限られている。自分と同程度の能力、技能を持つパートナーがいれば心強いのだろう。そのパートナーとして選ばれたのが俺、俺に銃をむけたのはただ単にシロを預けられるかだけではなく、俺が『使えるか』というのも見てたわけだ。

なかなか、侮れないメイドさんだなあ。

「わかった。守るといった手前、そのときが来たら俺も動くよ。ただ、それまでは黙っててくれ」

「わかりました。しかし、私には貴方があまりよく分かりません。無防備に電話帳を後頭部に受けたり、スタンガンを抵抗なく受けたり、かといったら次はあのような気配を表す。いったい雅は何がしたいのですか？」

話は終りとばかりに立ち上がり当惑したようにイル。俺は朗らかに笑む。

「何故、笑うのです？」

「ごめん何て言うかさ、ホントにシロと同じ悪魔になって思ってたさ」

「……いえ、私は人が呼称するところの天使といわれる存在ですが」

「え、天使って？」

「今日はもう遅いですから説明はまた今度にしましょう？ 今は、天使と悪魔とはこの世界でいうところの白人と黒人のようなもの、頭においてもらえれば十分です」

『種族』の違いではなく『人種』の違いって事かな？

ドアの前で振り返り穏和に笑むイル。

「御時間を割いていただきありがとうございました。それでは私はこれで」

扉を開き、廊下に抜けると彼女はもう一度俺を見て、

「シロラディア様に出会って頂きありがとうございました」

言い扉を閉めた。

はあ、こういう話は疲れる。それにしても、

「俺の事が分らない、か」

彼女がそう言うのは分かる。普段の飄々とした俺と、気配を変質させた俺とは似ても似つかわしくないことを。どちらも『俺』には違いないが。

差異は鞘に納まって『いる』か『いない』かだけ。ただ、それだけのことだ。

まったく、今日はヤケに真剣身がある。だが、それももう終り！
鞆から『ブツ』を抜き取り表紙を拝む。

メイド服を着込んだ少女が熱っぽい瞳で写る本に手を掛け、いざ御開帳おゝ いざ至福の時へゝ

表紙を捲り、官能の世界に旅立とうと

「すみません、雅。言い忘れましたが、明日街を案内しては貰えませんか？ あまり地理に詳しくないもので」

今しがた閉じられた扉を再度開き、そこにいたイルが顔を覗かせた。すかさず鞆に押し込まれる秘宝。だが、いかんせんイルには目撃された。

「……………雅、今何を隠しました？」

「べ、別にいゝ、あ！ 明日なら問題ないぞ！？ 学校から帰つたらすぐ行こう！」

俺の肯定を意にかえさず、つかつかとこちらにむかってくるイル。

「どいてください雅。鞆の中から妙なオーラを感じます」

何者だ、この人おおっ!?

無機物の気配まで読むイルに感服しながらも、その若干冷めた眼差しにたじろく俺。

「イ、イル?今日はもう遅いことだし俺ももう寝よ」

「どいてください」

有無を言わせる事のない口調。渋々、椅子を立ち秘宝への道を譲る。

や、やばいよな。でも、相手がイルだし謝れば許して貰えるかも。

イルが鞆の中を探ると程なくして一冊の本を取り出した。

賢明な皆さんなら分かるよね?男の子なら九割九分はだあい好きなそという種類の本です。しかもメイド系!

.....。

メイド好きで悪いかああ!!!?

あの魅惑的な服装、献身的な態度、汚れなき清純さ、これらに引かれない男が間違ってるんだよ!俺は正しいんだああっ!!むしろ引かれない男は腐ってるっ!!

『男性極一部のメイド論展開中、暫くお待ちください』。

御主人様 やら、主様 やら、様 にグツと来て何が悪いとですかあっ!?!ん? 『じゃあ何でイルに様づけで呼ばせない』だと? 愚か者め! 普段は礼節をわきまえんとして敬語調で話すメイドさんが放つ親しげな言葉は更にグツとくるからに決まっておろっ!

ああ！？　もし女子で引いているのがいたら想像してみなさい！
かなりの美青年、もしくは美少年が執事服を纏い、『お嬢様』な
んて呼ばれたらどうだよっ！？　少しはこの気持ち分かったかつ！
？　いいか、そもそも

「……卑猥です」

ポツリと溢された言葉。一瞬誰が発した言葉か理解が追い付かな
かった。この部屋には現在二人しか存在していないというのに。

暗い井戸の底から響いてくるような、そんな声。

思わず身がすくみ、一步身体が後ろに下がる。

「……不潔です」

右手をエプロンの陰に入れ引き抜く。握ったるはあの自動式拳銃。
な、何で銃なんて抜くの？　それにこの感じ……嘘だろ……？

「……不純です」

続いて左手もエプロンの陰に入れるともう一挺右手に握ったのと
よく似た白銀の拳銃を抜く。

二挺拳銃うっ！？

俺はイルの背後にいたので顔色は伺えないが耳が真っ赤なところ
からみると容易に想像は出来る。

この感覚には覚えがある。あるときは感電死しかけ、あるときは
脳に血栓ができるのではないかというほど逆さ吊りにされ、あると
きはまな板娘に愚息を殺されかけた時とよく似ている。

イルが両手の銃を机、正しくは秘宝に向け　躊躇なく引金を引
いた。

豪快な銃声が轟き、机はおろか、カーペットを突抜けて床に直径約三十センチ近い穴を二つうがつ。

俺の秘宝がああっ！？　ってか何だよその銃うっ！？　しかも遠慮無用でぶっぱなしやがったあああっ！？

「……………雅、覚悟はいいですね？」

何の覚悟だあああっ！？

姿勢は変えずにイルは怒気を放ち続ける。

いや待て！　お願いだから待つて！？　あんなので撃たれたら明らかに逝くよね！？　ってか、なんでそこまで怒ってるの！？

思い至るのはイルの性格　否！　性質だ！

『純粹過ぎる』。数時間前の俺のイルに対する内面判断。

いきすぎた薬の摂取は身体に毒であるように、度が過ぎた『純情』が狂気になるとしたら

「……………雅」

黒き天使と化したイルは茹でダコのような顔色で身体を小刻に震わせ、あるうことが超絶的な威力を誇る二挺拳銃を俺に照準する。

「ちょ、ま、待てイル……………？　そんなに撃たれたら死ぬというより吹き飛ぶよなあ？　……………落ち着け、イルッ！？　何で引金に指を添えるんだ！？　よ、よせええっ！！？」

「このケダモノオオッ！！」

はは、もう嫌……………。

俺の絶叫は轟いた炸裂音に掻き消された。

翌朝、この街に一つの都市伝説が生まれたという。

『真夜中に所構わず悲鳴をあげながら疾走する少年とそれを追う拳銃を携えたメイドが出没』なんていうふざけた都市伝説が。

だがこれは翌朝の話し、追走劇は始まったばかりだ。

……はたして俺は生き残れるのだろうか？ もし、生き残れたら一応は遺書くらい書いとくかな。……いつ迎えが来てもいいように……。

「待ちなさああいつ！？ 待たなければ撃ちまあすっ！」
「もう撃つてるしいいつ！？」

「待ちなさああいつ！？ 待っても撃ちまあすっ！」
「選択権なしかよおおっ！？」

でもって蛇足。

シロは拳銃の轟音にも俺の絶叫にも目は覚めず、翌朝までぐっすりだったそうな。

チャンチャンッ

……………。

「チャンチャン じゃねえええっ！？」

「待てケダモノオオッ！？」

その8:・1t:楽しくイキマシヨウ > ; (前書き)

ここ最近、執筆がおろそかになってます(・|・#) が、まだ
まだ書く気はありますのでどうかよろしく願いますm(| | ;)
m

その8:&1t:楽しくイキマシヨウ >

「イル。これ持っていくぞ」

「あ、はい。お願いします」

サラダを盛り付けるイルに断りをいれ、俺は料理をリビングのテーブルに運んでいく。

「ねえ、雅い。美咲と宏治はまだあ？」

テーブルに頬杖をつきこちるシロ。

「もうそろそろ来るとは思うが」

多数の料理が置かれているテーブルにいましたがた持ってきた料理を置いていく。

「遅いなあゝ、暇だなあゝ」

テーブルに突っ伏すし、足をバタつかせぶつくさ呟くシロ。

本日は、妃家にて祝宴会を催すことになっていた。

ありていに言えば歓迎会だ。

簡素な食事はしたもののそれではもの足りないと思いイルが現れたこともあって俺が発端となり皆に提案した。

皆一様に賛成し、明日は休日ということもあり我が友人らは泊まり込みで騒ぐつもりらしい。

そんなこんなでイルは調理にいそしみ、俺はこしらえられたそれらや食器などをせっせと運んでいた。

と、というのがこれまでの経緯。

「暇っていうなら料理運びくらい手伝いなさい」

「それは嫌あゝ」

「ちなみに何でかな？」

「私は王様、雅は下僕う

私のぶんも雅が働きなさいゝ」

絶対王政施行っ！？

「おらあゝ、さつさと働いてこいやああゝ」

歌うような愛らしい声で独裁者然とした言葉。そして体制を起こしつつくりだされる脛へのライトジャブ連打。

「いだっ。地味に痛い！ やめなさい、こらっ」

「うらああゝ」

トストストストドストドスバスツバスツガスツガスツ！

あのうゝ？ 何か威力が増してるようなあゝ！？

「てやあゝ」

一拍おき、右手を大きく振りかぶり まさかのコークスクリュウブローが脛にクリーンヒットオオッ！？

「いでえええっ！？ 何すんだこのアホ娘ええっ！？」

片足で跳ねながら脛をさする俺。初撃の地味な痛みからおよそ五秒以内の出来事であった。ジャブのグレードアップなど予想外もい

いとこだ。

「乾坤一擲い、一点集中う、水でもいずれ岩に穴をあけるのよ」

「何がやりたい貴様あっ!？」

腕をくみ『ウンウン』呟く偉人ぶったシロ。

まったく意味のない暴力行為に頭を悩ませはじめた折り、インタホンがけたたましく連打される。

『ピピピピピピピピンポ〜ピピピピピピピンポ〜ピピピピピピピンポ〜ピピピピピンポ』

走る俺、弾けるようにドアを解放。妖怪と悪友を視認。開口

「うつさいわたわけええっ! 何をしてるかピンポン魔あっ!？」

闇夜が空にひろがりはじめた時分、インターホンに人指し指をそえた美咲とビニール袋をさげた宏治がいた。

「おっそいなあ!？ もう四秒も待たせて!」

「普通は“しか”だよな!？ お前価値観おかしいから!？」

「ふう寒い寒い、お邪魔しまっす」

「無視かつ!？ 無視するのかつ!？」

俺の横を素通りし土間に侵入する美咲。それにならい宏治もまた足を踏み入れる。

ふと、小声で語る宏治。

「あまりカリカリするな雅。美咲の奇行は今にはじまったことじゃないだろ？ あまり突っ込みしていると美咲菌が移るぞ」

美咲菌。感染すると奇怪な行動をとるようになり、場合によって

は軽い冗句にさえ激昂し暴力行為に及ぶ。未確認だが勘が鋭くなる
ともいわれている稀少な病原菌　　なんて妄想してみたり。

「……それもそうだな。ヤツはなにせ奇行レディだし、存在の七割
は奇異で出来てると言っても過言ではないか　　」

ドゴオオオ！

「カハアツ！？」

「グホオ！？」

「コウ？　ミヤア？　誰がなんだってえ〜？」

小声で語りあっていた俺たちをその身長差などものともせず、首
を両手でそれぞれ絞めつつ壁に押しつける美咲。

え？　さっきの『ドゴオオオ』ってなんの音って？　それはね
美咲が力任せに大の男二人を壁に叩きつけた音ですよ！

「ねえ〜？　もう一度言ってくれない〜？」

「ちよっ！？　　みさ、き！　ヤメッ！　じよ、うだん　　たの
　　」

「みざぎい！　　じまっでぶ……じまっでぶ！　ズマン！　ズビバゼ
ン……」

俺に続いて宏治と、両者それぞれ美咲に乞う。

「ふんっ、次はないと思いなさい」

美咲が両手を離し、自由を手にした俺たちは咳き込みつつ酸素を取り込む。

「ゴホッ、ガハッ なぁ美咲？ 動動脈を絞めるのは ゴホッ、マジ死ぬぞ？」

「そんな時はそんな時」

……恐ろしいヤツだ。

宏治も取りあえず落ち着いたらしく、二人揃っておもむろに立ち上がったころ、もう一匹の野獣が現れた。

「まあ、何かうつさいと思ったらまた貧乳かあ」

トテトテ歩いてやって来た我が家の奇行ガールことシロ。

しかし、ダイレクトに『貧乳』って……。

「現れたわねジャリッ子！？ ってか直球でくるな！」

身構える美咲にシロはなおも追い討ちを掛ける。

「誰が“ジャリッ子”よあ！？ そんな低レベルなことしか言えないからいつまでも貧乳なのよあ！」

「だから、直球でくるなあっ！？ この真性ロリータアッ！？」

「なっ！？ “真性”つけたなあっ！？」

ああだこうだ、ぴいぴいぎゃあぎゃあ、言葉でかわされる少女らの威信をかけた戦い。

………あははっ、なんて心和む光景だろう。こやつらが今日同じ屋根のもと一晩明かすなんて……嬉しくて涙がでるよ！

「現実をみる雅、逃避しても仕方ないぞ」

俺の肩を叩きつつ宏治も苦い表情。

「ところでシロちゃん？　ちょっといいか」

「何よ宏治いゝ、これは私と美咲の戦いよぉ」

二人の神経を逆撫でしないよう、宏治は一際膨らんだビニール袋をシロに手渡す。

「これ、お土産だ。後でみんなで食べようと思ってな」

シロが袋をいぶかしげに覗くと一瞬にして満面に笑みを浮かべる。

「こ、こんなにい！」

その袋には大量のアイスが詰まっているようだ。シロの嬉々とした顔色からして恐らくはバニラ味。

……親友よ。アイスのパックが袋からはみでる程買つか普通？

「バニラアイスが好きって聞いてたからな。沢山食っていいから」

『沢山』にも程度があるわボケエツ！

宏治の言葉にシロは物凄く嬉しそうにしている。

頼むから『それ』を今夜の主食にするのはやめろよ？

「ありがとつ宏治いゝ　宏治ってばやさしい」

華が咲くよう笑み、そう喻えても遜色ない至極の笑みのままシロは袋を両手でさげてリビングに駆けていった。

「イルウゝ、二人とも来たよぉ。御飯はやくう」

リビングからはそのような言葉が届く。

はぁ、しかし何とも

「くう、逃げられたあ」

悔しげな感である美咲にフォローでもいれといてやるか。

「許してやれ美咲。シロだって別に悪気があってやって……るかもしれないが、子供のすることなんだし大目にみてやれ。なっ？」

「……わかってるわよう。わかってますよあ！」
たぶん、わかってないなコイツ。

息を一つ吐き、いまだに開いたままの扉を閉じる。

「
少しくらい私の味方してくれても……」

「ん？ 何か言ったか？」

「何も言っていないわよ！」

美咲はひとつ睨みを効かせ、靴を脱ぐと足早に廊下を進んでいった。

「何故怒る？」

独白に答えるものはなく、頭をひねりつつ宏治に視線を移す。

「なあ？ 美咲なん どうしたんだ宏治？」

美咲の怒る理由について尋ねようとした俺だが、宏治は何故か虚空を眺めたままピクリとも動かず佇んでいる。

完璧に意識がアナザーワールドに飛んでいるようなそんな感だ。

「おい？ どうし」

ドカアアッ！

「ノガアアツ!？」

前触れもなく突如宏治は俺の胸ぐらを掴み壁に叩きつける。

「なあ雅いつ!？ 俺ロリコンじゃないよなあっ!？ なあ!？
違うよなあっ!？ 俺は至ってノーマルだよなあっ!？ なあ!？」
ドガア! ドガア! ドガア! ドカアアツ!

「やつ、やめろっ! 死ぬっ!？ ガハッ! こらっ
ちよっ! っあ!」

壁に叩きつけられること数回、宏治も俺の状況に気づいたのか慌てて俺を解放する。

「大丈夫か雅!？」

「ゴホッ、ゴホッ 大丈夫な訳あるかあっ!？ いきなり何すんだあ!？」

「……すまねえ」

俺が息を整え立ちあがるの待つて、宏治は口を開く。

「なあ雅。……シロちゃんのあの笑顔は反則すぎないか？」

「は？」

「俺は今まで自分は美少女好きではあってもロリコンではないと信じてた。LikeであつてもLOVEではないはずだった。だが……、なあ!？ 何だよあの笑顔は!？ “ドキッ” って来たぞ! “ドキッ” って!？ お前いつもあんな笑顔がそばにあるのか!？」

「どうなんだ貴様あつ!？」

首を掴まれ前後左右に振りまわされる俺。

「何言つてんだお前はああつ!？」

「羨ましすぎだあコラアつ!」

ああゝ、目があゝ、目が回るうゝ。

その後、宴の支度が整うまでの間、俺は宏治に振りまわされ続けるのであった。

「では　かんぱあゝい!」

「ゝゝゝかんぱあゝいゝゝゝ」

俺の声を皮切りに皆がそれぞれのソフトドリンクを注いだグラスを打ちつけ、宴の開始を告げる。

「ううゝ、アイスうゝ……」

隣でシロが唐揚げを箸でつつきながら恨めしそうな視線で攻撃してくるが、あえて無視を決めこみ生春巻をかじる俺。

やはり大量のラクトアイスをメインにする気だったかこの猫娘。リビングテーブル下に置かれた大量のアイスをシロに気づかれぬよう冷凍庫に詰めて正解だったな。

「へえゝ、この春巻美味いなあ」

「ありがとうございます」

「無視すんなあゝ!？」

だつてねえ、アイスつて以外にカロリー高いんだよ？ 食べ過ぎはよくないんだよ？

ちなみにイルも俺の意見に賛同しているため、シロの一日アイス消費量は朝昼晩それぞれ食後に一つづつ、計一日三つまでとなっている。

これもシロを思うがゆえ 決してくやしがるシロをみて内心ほくそ笑んでる訳ではないよ？ ふっふっふ。

「パーティーなんだし特例でいいじゃあん!? イルのケチいつ! 雅のアホんだらあ!」

「あははっ、シロオゝ? 残念ねえゝ?」

美咲が唐揚げを箸で摘みあげつつ、シロに微笑む。

「お子様は歳上の言う事を聞きまちょうねえゝ?」

「ううゝ! わ、わたしは成長期なのよゝ。少しくらい栄養採りすぎても問題ないもん!？」

「ほおっほっほっ、縦にならまだしも横に成長するかもねえゝ?」

「…ううゝ」

高らかに笑う美咲に目を向けながら俺はイルや宏治と会話する。

「今日は取りあえず騒ぐとして明日はどうする？　どっか行くか？」
「そうだなあ。イルさんは何処に行きたいところとかない？」

「え？　……わたくし私ですか？」

「あたりまえだろ。まさか俺たちが出掛けた後、留守番している気だったのか？」

「あ、いえ。……その」

「まあまあ、その場の勢いでいいだろ。街でもぶらついて適当に決めるのがいい」

「そうだな、それでいいか」

相変わらず、ぐだぐだ言葉でバトル中の二人組に視線を移す。

しかし、飽きないなこの貧乳共は。少しはイルを見習え。……外面的な意味合いと極一部の性質までは無理だろうが。

そう、何を隠そうイルはスタイルがいい！　出るとこは出て締まるところはしまつてい抜群のプロポーション。柔和且つ優雅な物腰は和服でも着せたら大和撫子の出来上がりいゝって程だ。

もう一度イルに視線を移し盛大に溜め息一つ。

たく、美咲もシロも同レベルだな。内も外も

「……　　かんぱああい！」

「オビヤツ！？」

美咲ならびにシロ。グラスを握り締めた拳で俺の両頬をクリーンヒットオオツ！？　更には双方、その手を『グリグリ』捻り込みます！
「……にやにをずるのがにやあ？」

このツルペタ同盟が！　何をす

頬に拳をめり込ませ御二方とも揃って口を開きます。

「誰がツルペタだああっ!？」

「ノギヤヤヤアアアツツ！」

しまったあ!？ 美咲の感のよさを失念していた！ ってか今シ
口も言つてたろお!？ まさか何かに感染しちゃったわ ノギヤ
アアツ!？

殴られ蹴られ投げられ関節を決められ、多種多様なコンビネーシ
ョンコンボツ!

まさに夢のコラボ！ 世界最先端!？ 拷問の新世紀!？

………… ダレカタスケテ。

数分かけてあらゆる苦痛を背負った俺。最早怖いものは何もない

…………。

「やるねえゝ美咲い。見直したよお」

「あんたこそ、やるじゃん！」

がっしり握手を交す少女二名。この二人が同一空間で微笑みあう
姿はホントに絵になると思う。

………… 足下に転がる俺を除いて。

………… あはは、何かとっても眠いよう…………。 あ、天使様だあゝ。

ぼろ切れと相なったワタシを心配気な面持ちで介抱してくれます。
………… このまま俺は天に召されちゃうんですか？

「大丈夫ですか？ 御二人とも、いい加減やりすぎですよ？」
眼前に立て膝をついたイルが俺に掌をかざすと口中でなにごとか

唱える。

するとイルの掌に暖かな蒼光が宿り、その光に触れた箇所が和らぐ。

とうとう、痛みまでやわらいできた……逝くの？ 俺逝くの！？

な訳あるかぁ！？

この光はイル曰く、『ヒーラーシャイン』。その名の通り『癒す光』。イルの得意術法であり、先日穴だらけになったマイホームを修復した際にもよういた力だ。……恐怖の思い出があぁあつ！？
「応急的ではありますが、多少は痛みがやわらぐはずです。……どうですか？」

「あ、ありがとうイル」

記憶の暗黒面を覗いてしまい、しどろもどろに答える俺。だが、そんな俺にイルは優しく微笑みかけてくれるのであった。

そんな時、何気無くイルの背後に例のロリコン野郎を見つけました。何やら床をどんどん叩きながら懸命に笑いを堪えているようす。忍笑いが漏れています。

………制裁決定え！

「なあイル。例の本の件なんだけど、覚えてるか？」

俺の言葉にキョトンとしたイルだが、キツカリ五秒後に茹で状態に以降。

何故かあとずさるシロとイルの現状を理解できていない二人。

「……………それがなにか？」

「実はな」

清く、優しく、羞恥に燃えるイルに俺は宏治を指差し言い放つ。
「あの本渡したの、その悪友なんだ」

「……………宏治様？」

静かに立ち上がり無言の圧力を放ちつつ、イルは宏治の襟を掴む。

「ちよつとこちらに来て貰えますか？」

「え？ あのおゝ？ イルさ　ちよつ」

問答無用でズルズル引きずられていく宏治。俺は親指をたて、
「グッドラック！」

呟く。

シロは心持青くなり、美咲はあつけにとられている。

ふと、シロ。

「……雅い。イルに何言ったのお？」

俺の言葉はイルにしか聞こえなかっただろう。声に破気がないシロの言葉と時おなじくして宏治とイルは扉のむこうに消える。

俺は心から笑みシロに答える。

「“盛^{さかり}のついた少年にはお仕置が必要” ってねえ」

「ギヤアアアアアアアッ!？」

程なくして悪友の絶叫が妃家を震わした。

合掌

「ちよつ…、いったい何が…？」

動揺の声をあげる美咲。そして洩れ聴こえる宏治のうめき。

「まあ、気にせず食おう」

箸をとり食事を再会する俺の袖をシロが引きつつ隣に腰掛ける。

「ねえ、雅い？ 宏治大丈夫かなあ？」

焼き鳥を噛みつつ困惑気味のシロ。

「はっはっは、何を言ってるんだシロ？ 大丈夫も何もあるわけないだろ？」

ぶっちゃんけ、ボロキレになってしまえ。あの裏切り者めが。

「つてか、イルさんどうしたの？ いきなりコウ連れてっちゃったけど」

「うーん、よくわからないけど魔界にいたときも時々あんな風になつてたよあ」

「へえ、ちなみにどんな時だ？」

興味本意で尋ねてみた。

「ん、お父様の書斎を掃除した後とか、寄宿舎の掃除した時とかかなあ。つていうか酷いときは銃撃しながら追跡なんかしてたよあ。『このケダモノがああつ！』つて言いながら。追い掛けられるほうも何か半ベソかいてたしい、いったい何があったんだらう？」

.....。

そつちでもやってたんですか？ しかも自分の主にさえ容赦なくつ！？哀れな。

「あのさ、それって.....」

「美咲、言つな。一応シロは純真な子なんだ」

苦笑を浮かべる美咲を遮りシロに顔を向ける。

「シロ、いいか？ イルはきつと昔いろいろあつて精神的な病気にかかっているに違いない。だから時折銃ぶっぱなしながら男を追いつけるんだ。男に何かしらのトラウマを抱えてるかもしれない。だからな、シロ？」

シロの頭を撫でり、撫でり。

「その事をイルに詮索しては駄目だぞ。もしホントにそうなら酷く傷つける事になるからな」

「……………うん、わかった」

真顔で語る俺の言葉にシロは神妙に頷く。

うゝむ、我ながら天晴れな演技である。

「うわぁゝ、馬鹿がここにいるゝ」

和やか且つ静粛な俺とシロを会話をぶち壊しつつ、美咲は小皿に料理を盛りつつジト目でこちらを見とります。

「何だよ、美咲？ 何か言いたそうだな」

「べつつにいゝ、ただ似たような噂を何処かで聴いたなあって思ってたね」

うつ！？

「噂あ？ 美咲いゝ、いったいどんなのおゝ？」

「聴きたい？」

「うん」

ま、まずい。何がまずいかってよくわからんが何かがまずい！

俺が美咲とシロの会話を寸断しようとした矢先、リビングのドアが開いてイル登場。

手はぐったりした宏治の襟元を掴んでおります。顔に満面の笑みを浮かべながら。

「……………」

三者三様の表情でそれを眺める我等。無駄話も強制遮断される。

「宏治様？ 若い故に仕方ないかもしれませんが、盛るのは程々にしてくださいね」

無造作にイルは宏治の襟元を解放する。床に落ちた宏治はピクピ

ク痙攣したように沈黙している。

「……やべえ、マジでボロキレだ…。」

外傷らしいものは見当たらない。いったい何があったのかは当人たちのみが知りえるのだろう。

「……うーん、やっぱりイルの料理は美味しいなあ」

「……ホントねえ。もうこの手羽先なんて絶品」

宏治の現状を窺い、惨状を見て見ぬ振りを決めこむ者二名。

……流石に哀れすぎる。

のりくらりと腰をあげ、宏治の肩を叩きつつ呼びかける俺。

「おい、宏治？　しっかりしないか？」

「み、雅い」

お、気づきましたよ。

「大丈夫かよ、お前」

もとわといえ俺が煽ったせいなのだが、それはそれ、これはこれ、だ。

「く……」

「く？」

「……空中コンボ……一二連……マジ……死ぬ……」

……。

マジですか？　あのメイドさんは生身の人間にどんな秘奥技くれやがるんですか！？

「……ところで雅様？」

宏治の境遇を悟り、額に汗を浮かべてた俺に投げかけられる声。

プラス襟を掴む彼女の見た目華奢な腕。

「だが、『精神的な病気』で『男にたいしてトラウマ』をもっているんですか？」

.....。

「.....ナンノコトカナ？」

「うふふ　どうやら雅様にもお仕置きが必要ですね」
ちらりとイルの顔を盗み見ると至極晴れやかな笑みを浮かべていた。

常人なら思わず見惚れること請け合いのその影に、『よくもシロラディア様にあることないこと吹き込みましたね！　しかも私が病気？.....いい度胸です雅！』という無言の言葉が見えました。

「ちょ、までイル！？　美咲！　シロ！　助け.....」

ほんのつたない希望の糸にしがみつく俺。だが..。

「見てえ美咲いゝ。チーズが溶けてビヨーンと糸を！」

「こっちは唐揚げにかけたレモンカットから種がズビヨーンと！」
救いを求めた瞬間体をクルツとまわしてテーブル向きやがった！
？　ってかその話題転換無茶あるだろう！？

「お前らああゝ！　俺を見捨てるのかああゝ！？」

叫ぶ間にもずるずる引きずられる俺。

「さつてと、お仕置きお仕置き」

「あんた以外にドSかああゝ！？　ってやめて、耳朵は引つ張らな.....千切れ、千切れるからっ！？」

『ドS』の言葉に反応して両手で両耳を引くイル。

ややして俺の体がりビングを挟んだ暗闇の通路に投げだされ、扉を閉ざすイル。そのほの暗い空間で一瞬イルの双貌が輝いたように

見えたのは……見間違いだと思いたい。

「……ねぎゃあああつ!？」

その夜、俺はゆうに一五秒間、空を舞った。

その9： オモイ思い（前書き）

別口小説作成でかなり更新疎かでした。これからはちよくちよく更新しようと思いますので飽きられずに読んで頂けたら幸いです。

その9： オモイ思い

夜、皆が寝静まったであろう時分に俺と宏治は近場にある寂れた公園にやってきていた。

月光に照らされた公園の中心に位置する古びたジャングルジムに宏治は寄りかかり、俺はブランコに腰を掛けた。

「んで？ こんなとこに来て一体なんの話だ雅。言っとくが俺は女の子が好きだぞ」

「そいつは残念だ」

「……マジか？」

「流せ」

互いに軽く笑みを交わしあう。

そう、この場に宏治を連れ出したのは俺だった。

「……本題にはいろいろぜ。話つてのはシロちゃんの事だな？」

不意に真顔に変わり、宏治が呟く。

『すまないが宏治、話がある。ちよつと付き合ってくれ』

数分前に俺はそういい、この場へと宏治と共にやってきた。

白く染まる吐息を吐き出しつつ俺は頷く。

すでに冬へとむかい始めた凍える大気のなか、満点の星空を望みつつ口を開く。

「なあ宏治。シロをみてお前はどっ思う？」

「は？」

突拍子もない言葉に目を白黒させる宏治。ややあつて曖昧に口を開く。

「そりゃあ、可愛いと思うぜ。確かにあの子は悪魔かもしれんがそんなの別に関係ないだろ？ ってか質問の意味がわからねえよ」

「いや、その返答で問題ない」

俺の態度に訝しむような宏治だが、俺は意に返さず言葉を続ける。

「普通の女の子だよな。ホントに」

「雅？」

若干の沈黙が場に満ちた後、俺はその言葉を放つ。

「……イルには“天位”の事がバレてる」

「……………それで？」

傍目には一切変化を窺わせない宏治の言葉。だが俺には宏治の心情がありありと理解できた。

「シロの現状を探っている時にでも知ったんだろうな。……十中八九はお前の事も知っているはずだ」

「……イルさんに敵対の意志は？」

「それはない。向こうからすれば数奇な偶然で俺とシロは出会っただけ。あくまでもただの偶然の結果だ。第一今更俺たちが争ういわれはないだろ」

「確かにな」

宏治はジャケットのポケットから煙草を取り出し、手慣れた手つきで火を付け紫煙を吹かす。

「煙草、やめたんじゃないのか？」

「んにゃ、基本的に自粛しているだけさ。それより話続けろよ」

促され俺はブランコから腰を上げ空に浮かぶ上弦の月を眺める。

「イルの話では、シロはいいところのお嬢様らしくてな。妙な厄介に巻き込まれる可能性があるそうだ」

「……なるほど、な。俺たちは使える手駒ってわけか？」

宏治も視線を月へと移し、溜め息混じりに紫煙を吐く。

「イル自身はそうは思っていないだろうがな。まあ、思っていようがなかるうが事実そんな感じが」

手前の携帯灰皿に煙草を押し付け、勢いをつけるようにジャングルジムから背を離す宏治。

「いいんじゃないの、手駒でもなんでも。あの子はもう俺の友人でもある。いざつてときは俺も動くさ」

宏治はいつもの軽快な笑みを見せる。そんな朋友の姿に心の中で感謝し、俺は別の言葉を紡ぐ。

「想い人、の間違いじゃないのか？」

「……………茶化すなよ？」

「……ちょいまで。何故沈黙が長い！？ おまけに何で疑問系だ！？」

「き、気にするな……」

気まずげに視線を横に送る宏治。

「……少夜ちゃんにバラしてやる」

「ちよつ、おおまえ〜！ やめろよお！ 冗談だ！」

とたんに慌てふためく宏治。俺はそんな宏治に笑みを向け、『焦るなよ、冗談だ』と答える。

「勘弁しろよお、ああ見えて結構俺にはきついんだからな」

「そいつはご愁傷様だな、お兄様」

「やあめえろ！」

手の平をあわせ拝むように宏治に『南無』などと言う俺を視線から外し、宏治は二本目の煙草に火をつける。

「……少夜ちゃん。具合はどうなんだ？」

「……」

しばしの沈黙。たゆたゆ紫煙が大気に消えていく。

「今は自宅で療養中だ。あいつはすぐにでも学校に行きたいそうだが、少し風邪気味だな。……お前ならこの意味はわかるな？」

宏治の言葉に心えず俺はその場に仰向けで倒れる。砂地の冷たさが背中越しに身体に浸透していく。

「………… ホント、最悪な現実だよな」

「まったくだよ」

淡い光を放つ月に、瞬く星々。紫煙の霞みに白く染まる吐息。その美しくも穢れた儚くも尊い優美で罪悪な世界。
俺たちはそんな世界をただ眺めていた。

「………… なあ」

「ん？」

三本目に火をつけたころ不意に宏治は声をあげた。

「………… 美咲には言わないのか？」

「わかりきった事を聴くなよ。………… あいつはこちら側に引き込むべきじゃない」

「………… そう、だな」

その後、俺たちは互いに言葉を交わすことなく、ただ空を彩る光を眺め続けた。

その10： シロの日記（前書き）

前回に引き続き少々シリアス系です（汗）

その10：シロの日記

『ふふっ、あの子ってホントに駄目ねえ』

『ホントにルシファー家の息女なのかねえ、アレで？』

違うもん……

『まったく、いい恥じ晒ですわ。私たちまでアレと同じ様に見られたらどうしますの？』

『疎ましいっいたらありやしない』

違うもん……！

『あははっ、まあ仕方ないんじゃないか？所詮ルシファー家の娘っただけで周りからちやほやされている世間知らずのお人形なんだ。僕たちが大人になってやらないとね』

『ふふっ、そうね』

違うもん！

暗闇に蔑みを孕んだ嘲笑が満ちる。人影など存在する余地はない深淵のなか、私は膝を抱えて暗涙にむせいでいた。

違うもん違うもん違うもん違うもん！ 違うもん！ 違うもん！ 違うもん！

うもん！ 違うもん！ 違うもん！

依然嘲笑はやまない。それどころか反響するように響いてくるそれらは最早呪祖の如く私を侵食しようとする。

助けてよお……誰か助けてよお……！

『アレはどうせ 』

助けてよおおおっ！

『役立たずなんだから』

「 いやああっ！？」

私は毛布を払い除けるように飛び起きた。
荒く呼吸を繰り返し、高鳴る心臓を鎮めようとするがうまくいかない。目尻には涙が溢れ視界がぶれる。

「違うもん……、違うもん……」

「うう、シロラディア様あ？ どうかなさったのですかあ？」

不意に聞こえたその言葉に隣をむくとイルが眠い目を擦りながらも心配気な面持ちでいた。

「……イルウ？ あれ？」

涙を拭いっつ改めて周囲を見渡す。

電光の淡い光が暗闇をうつすらと照らす素朴な和室の室内はよく見知った場所だった。

「……イルの部屋……？」

イルとは反対側には美咲が静かな寝息をたてている。その姿を確認すると自然、昨夜は三人で眠りについたことを思い出した。

「……怖い夢でも見たのですか？」

覗き込みつつイルが聞いてくる。その顔が少し辛そうにしているように見えるのは多分気のせいなんかじゃない。

私は背中から倒れるように、再び布団に身体を預けた。

「……うん、ちょっと」

自分で分かる。声にいつもの抑揚がない。

私が倒れるとイルも毛布を被りつつも視線をむけてくる。

「……申し訳ありません、シロラディア様。謝ることしか出来ない罪、お許してください……」

……やっぱり分かつちゃうんだなあ。

「謝らないでよおイルウ。私は大丈夫だからあ……、ホント大丈夫だからあ」

「シロラディア様」

「おやすみ、イル……」

イルの言葉をきり、私は毛布を被る。イルはまだ何か言いたげにしていたけど、諦めたように『……おやすみなさいませ』と一つ呟

いた。

あの悪夢のあと私は眠れずにいた。

そんな折り今日分の日記をつけていないことに気付いた私は今、自室の机の上に置かれた日記帳の前に座り込んでいた。

引き出しから取り出した鍵で錠を外し、ページを捲る。

「あつ……」

『今日、ミヤビと買い物行ってきましたあ 楽しかったあ。あんな風に関わり物したの始めてえ

……最初はミヤビにいたずらしちゃったけど、ホント言うとな不安だった。だって、突然現れた私を受け入れたのは私が無理だったから嫌々受け入れただけじゃないかって……。でも違ったみたい。ミヤビは気付いてなかったと思うけど、アイス食べてるときにミヤビの言葉、聞こえたから。凄く嬉しかったあ。あの時にネンワでお礼は言っただけど、あらためてお礼。ミヤビ、ありがとう

P S、誰がうぬぼれ、自己愛、ナルシストだあああつ!?!?』

なんの気なしに開いた一ページ目にはそんな文章が自分の字で書かれていた。

「ああ、この時は怒ったなあ P Sって後で付け足したんだっけ？」

その時を振り返ると自然に暖かい気持ちになる。

二ページ目を捲る。

『今日は学校行ってきましたあ』

まったくミヤビってばホントに私を置いて行くなんてえゝ（怒）
ってなわけでミヤビの学校に行っただけど……迷子になっち
やった（泣）ワケわからない人たちには追いまわされるし……、ミ
ヤビに迷惑かけちゃったのにミヤビってば怒るところか私を気にか
けて早退までしてくれちゃった。嬉しかったなあ。そういえば、今
日二人、新しい知り合いが出来た。コージとミサキっていうミヤビ
の友達らしい。コージはいい奴っぽいけどミサキめえゝ、よくもミ
ヤビをいたぶったなあ（怒）それは私の特権よお！……なんて
』

「あはっ　こんな感じで書いてたんだあ。自分で読んでみると結
構面白いなあ　」

一枚一枚読みながらページを捲っていく。　雅と出会ってから精
々で一ヶ月前後の思い出。

それらを読みすすめていくうちいつしか私は泣いていた。ただた
だ涙が溢れていた。

不思議な気持だった。涙は悲しいときに流れるものだばかり思
っていた。でも、この涙は

「何でかな、暖かいよお……」

右手で涙を拭いっつページを捲ると空白の文欄が現れた。

「……………」

ペンを握り、文を綴る。

『今日はみんなで楽しく一日を過ごした。

　　コウジとミサキにイルとミヤビ、そして私。　みんなでご飯食べて、
みんなで笑いあって、みんなでふざけあって、たまあゝにミヤビに
甘えた。ミヤビを叩いた。ミヤビを困らせた。みんなと一緒に私も
笑った。

温かった。私はきつとこういうのを望んでいたんだと思う。ルシファー家の娘じゃない私、ただのシロラディアとしての居場所。

これはわがままかもしれないけど、私はずっとここにいたい。コウジと遊んで、ミサキとふざけあって、イルに時々怒られて、ミヤビに時々甘えたい。

私はこの場所が好き。コウジも好き、ミサキも好き、イルも好き、ミヤビも……ううん、ミヤビは大好き。

もし、神様がいるのならお願いです。ずっとずっとここにいさせてください。

それから……ミヤビ。私を、シロを、ずっとずっとそばにさせて。』

書き終えた日記を閉じ、もともとつけていた鍵を掛け、鍵を引き出しにしまう。

「ううん、ちよつと恥ずかしいかなあ」

今更ながら自分の文面に少し照れがでる。もちろん誰かに見せるつもりはないが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

目尻の涙を拭いつつ、私は自分で先ほど書いた文面を少し思い出してみる。

『ミヤビも……ううん、ミヤビは大好き』

なんでわざわざ書き直したんだろう。

自分でも不思議だった。勿論ミヤビは大好きだし、嘘は書いてない。でも……。

「宏治も美咲もイルも好き。でも
雅に対しての『好き』は。」

「なんか違う気がする……」

胸に手をあててみる。鼓動が少しはやい気がするし、身体もいつもより火照っているような……。

「……雅い」

「ああ、お子様はつけえくん！」

「ひにゃあっ！」

突然の声に勢いよく振り返るとそこには、半開きにされたドアからこちらを覗く美咲の姿があつた。

「何奇声上げてんのよ、あんたは」

「み、みみ美咲い。いいいつからそこにい？」

「いつからもなにも、つい今しがたよ。ちょっとトイレがてら起きたらあんたいないんだもん。んで、こんな夜更けに何してたの？」

寝間着代わりのシャツにジャージという姿の美咲は私の部屋を見渡しつつ問う。

「えっとおー、今日の分の日記書くの忘れててえ」

「へえー、日記なんてやってたんだ。あ！これ可愛いー！」

こっちの説明は上の空で部屋に点在するぬいぐるみの一つを手

取る美咲。

「ああゝ！ それお気に入りなんだよお。潰さないでよおゝ」

デフォルトされた身体の長い白猫を美咲が胸に抱え込み、抱きしめるように頬摺りしている。

「いいじゃん。減るもんじゃないし」

「減るんじゃないで潰れるのお！ 私の長猫さん返してよおゝ」

ちなみに『長猫さん』というのはこのぬいぐるみの名前。私の持つてゐる白色の平均体型もあれば黒縁の肥満型、虎縞の痩せ型と様々あるの。全部に共通するのは身体が長いこと。その長さ約七十センチ！ ダックスも真つ青よ！

「はいはい、わかったわよ。別にいいじゃない」

渋々と美咲は長猫さんをもとの場所に置きなおし、私は抱き寄せるように猫さんを懷に抱える。

「まあゝ、この子が削れたらどうするのぉゝ」

「……普通ぬいぐるみは削れないでしょうが」

「わからないじゃない。美咲の洗濯板でけず いたいつ！ いたいつて！」

私の不満を美咲は両の拳で頭を挟み込みグリグリ捻って中断した。

「あ、ん、た、って、子はあぁっ！」

「によわあつゝ！」

しばらく頭を捻られたのち美咲は一步下がって私を見やる。
「まったく。これに懲りたらこれからは発言に注意しなさい」

「うううゝ、なにすんのよおゝ。頭が割れて脳漿まき散らせて絶命しかけたじゃんゝ」

「……あんたみたいな娘がいうとかなり生々しい言葉ね」

美咲は軽く頭を振ると、右手を差し出してきた。

「？ なに？」

「なに？ じゃないでしょ、今何時だと思ってるのよ。そろそろ寝ないと明日　ってか今日か。とにかく休まないと身体持たないでしょ。一緒にいきましよう」

差し出された手を見つめる私。

私はこれまでも幾度となく手を差し出されたことがあった。ある時は私を利用する為の手。ある時は私を嘲笑う為の手。ある時は同情と打算の為の手。

でも、この手は

「うん、そうだねえゝ」

『私』を求めてくれる救いの手。

私は美咲の手を握り、椅子から腰をおろす。

「うう、なんか寒いわね。もうすぐ冬かあ」

「んじゃあさ、一緒に布団で寝ない美咲い？　その方が暖かいよ」
「ああゝ、私を湯たんば代わりにする気だなあ」

「いや？」

互いに白く息をこもらせ、ドアに向かう。

「嫌じゃないけど　あ、どうせならイルさんの布団に二人で潜り込まない？」

「イルの？」

「そう、イルさんずっと寝てただろうから布団も暖かいだろうし、突然の侵入者にどんな反応するかもちよつと楽しみだし」

それこそ人間湯たんぽではと思う。

でも

「確かにい、イルの反応も面白そうだし、寝るのも三人の方がいいかもねえ」

「うんうん、じゃあ善は急げつてことで」

互いに悪戯顔を浮かべ私は美咲の手に引かれ暖かい寢床へと戻っていった。

ちなみにイルはどうなったかというところ

「　　ちょ、お二人とも何するんですかあ！」

コアラ宜しく左右から抱きついた私と美咲に向けてイルはいたく混乱していた。

「イルさんいい身体してるわねえ」

「イルばかりいゝ、んゝでもあつたたかいゝ」

「いえ、ですからお二人とも何をっ？」

「「夜這い」」

「いやああ〜〜!」

純情回路起動。

そんなこんなで、私の一日は過ぎていくのですた。

「うふふふ、イルさん可愛い。そおれえ!」

「み、み美咲様! どこを触っているんですかあ!?!」

「胸」

「いやあああつ〜〜!?!? ってシロラディア様! 何で耳に息を ひやつんつ!」

「ふっふっふ、ネエちゃん往生せいやあ〜〜」

「キャラが意味不明ですシロラディア様! って美咲様もやめてきやあああああつ〜〜〜!?!」

ちゃんちゃん

その11： 遊戯とは即ちイクサなり 〵前編〵（前書き）

前前回々回とシリアスモードでしたがここからは再びコメディパート！ お楽しみください！

その11： 遊戯とは即ちイクサなり 前編

「よつしいい！ 遊ぶぞぉ」

「おおー！」

前を歩く異様にハイテンションな猛獣二匹に続き、俺、宏治、イルと歩道を進む。

天候は快晴、遊ぶのには絶好の休日。

なのに俺と宏治は揃ってテンションダウンである。

「あ、あの？ お二人とも大丈夫ですか？」

「あ、……ああ、多分」

「イルさんが、居る三。くはは……」

……訂正。性格にはブラックテンションである。

ん？ 何故こうなったか？ ははは……説明しよう。実はこんなことがあったんだよ。

朝、俺たち男組が起床すると女性陣は既にテーブルにて食事をしていた。

挨拶も程々に席につきイルにコーヒーを頼もうとしたとき、シロがトレイにカップと赤い液体で満たされたグラスを乗せてやってきた。

『はい、“コーヒー”だよ』

俺が受けとると、宏治にはグラスを手渡すシロ。

『美咲に聞いたんだよ。宏治は“野菜ジュース”を朝飲むんだってねえ』

『どっちも私たちの“自信作”だから味見してみてね』

『……………』

『……………』

ええ、逃げましたよ。自室に戻って籠城しましたとも。そんな必死の抵抗もむなしく牙城は陥落。あまつさえ捕虜の口にジヨウ口を差し『劇物』を流し込みやがったあ……………。

ちなみにコーヒ―は『ホット醤油』。野菜ジュースは『ハバネロジュース』だったらしい。

お陰で俺は塩分過剰接種。宏治は思考がオーバーヒート。

この人外の鬼畜どもめが……………貴様らには悪意しかないのかあ……………！？

「ホツタイモイジンナァ、くはは……………」

「いい加減、戻れ」

脇腹に肘を一発決め、宏治の目を覚ます俺。流石にあんな宏治は見るに耐えんぞ。

「うう、辛え。マジ辛え……………」

「……………悪いイル。ちよつとこの喫茶店によってくから先行ってるあの二人に伝えてくれないか？」

指で傍らの喫茶店を差しながら俺。恐らく顔色は真夏の海のようにブルーだろう。

「あ、はい」

猛進する二人を追ってイルが進んでいったのを確認することなく俺と宏治は道ぞいの喫茶店に足を踏み入れたのだった。

「第一回、ボーリング大会開催いゝ！」

「いえゝい」

相変わらずのテンションで美咲に続いてシロが声をあげる。

喫茶店にて休息をとり、何となく回復の兆しをみせた俺と宏治は、後遺症を残しつつ美咲に『文字通り』引きずられながら中心街に存在する大型の複合型の娯楽施設にやってきていた。

『奴』の握力についての質問は却下ですよ。何せ片手で俺と宏治を壁に叩きつけたお方なんですから。

そんなこんなで手始めにボーリングすることになった我等が愉快的な仲間たち。

ボーリング初体験らしいシロとイルには既にルールは説明済みです。

そうそう、今日のイルはなんといつものメイド服ではありません！清純感満ち満ちる純白のワンピースに若草色のカーディガンとい

う何とも清楚ないでたち！

皆と出掛ける手前メイド服では、と考えてくれたこの私服。

来ました！ 『ビビッ』 来ましたよ！？ 普段メイド服の女性の私服……、しかもベリーマツチ！ ああ、いつそイルを連れだして二人でデートでも

「 ブゴッ！？ 」

側頭部に鈍痛を感じつつ崩れ落ちる我が身体。

更に倒れこんだ俺に追い討ちをかけるが如く落下したボーリング球。

「 カハアっ！？ 」

「 ぐっめえゝん 手が滑っちゃったあ 」

美咲はそう言いつつ野球選手バリの投球フォームを解き、再度ボールを選ぶ。

飛び起きる俺。抗議開始！

「 アホか貴様あ！？ どこの世界に見事な投球フォームから手が滑るヤツがいるかあ！？ 」

「 ぐっ 」

「 黙れゼラチン脳おっ！？ 」

抗議に燃える俺の前にボールを選びおえたらしいシロがとことこやってくると何を思っただか両手で球を抱えたまま停止する。

「 ？ シ …… 口っ！？ 」

口許を吊り上げたと思っただら、前触れもなく ボールを爪先め

がけて解放しやがったあああつ!?

「あ、おゝ……あ」

「ごつめえゝん雅い 重くて放しちゃったあ」

「アホ……かあ……」

あのさあ？ ホント痛いんだよ、爪先って？ しかもボーリング球って……俺が何をしたんだよお？

「お前は分かりやすいんだよ、まあ頑張れ」

片足になりつつ爪先を擦る俺の肩を叩きつつ同情の眼差しをむける宏治。

頑張れって、何をだ？

「イルさん凄いなあゝ、まだニゲームしかしてないのにスコア六〇弱って……」

「ありがとうございます。何となくコツが掴めましたので」

「それに比べてお子様は……くつくつく」

「雅いゝ、美咲がイチメルよおゝ」

指先でグリグリ突きつつかれたシロが俺の腕にしがみついてくる。

「そう言う美咲だってシロと数十点差　とわあっ!？」

目前に迫る渾身の正拳突きを読んで字のごとく紙一重でかわす。

「ちっ」

「なんだその“ちっ”はあ!？」

「気にしないでえ、ちよつと五月蠅い虫を黙らせようとしたただけだから」

二ゲームを終えて今は小休止中。揃ってジュースを飲みながら雑談を交していた我等である。

「そんなことはおいといて、次どうする?もう一ゲームやる?」

「理不尽をバリバリ感じるが、まあいい。俺は賛成だな。時間もまだあるし」

「まだ、昼前だし俺も賛成する。イルさんとシロちゃんもそれでいいかな?」

宏治の問掛けに二人とも肯定の言葉を返したのを見計らってなにやら美咲が口を開いた。

「じゃあさ、折角だしちよつとした賭けしない?」

「賭け?」

「うん、例えば一番になった人は午後の行動を全部決められて、最下位になった人は一つだけ一番になった人の言うことを聞くとか、

そんな感じの賭け。楽しそうでしょ」

「賭けって言っても、明らかに勝負が見えてる気がするぞ」

俺と宏治は基本的に二十点前後、シロと美咲は八十点前後、イ
ルについては前述参照。

はつきりいつて勝負にならないだろ。

「じゃあさ、男女対抗で平均点競わない？それなら割りといい勝負
が出来るし」

「確かにそれなら妥当だな」

宏治の言葉に美咲が頷く。

「だから、やろっ？」

その言葉に異論は上がることなく、早速五人集まってルール設定
がおこなわれた。

取り決められたルールは以下の通り。

『一、勝ったチームは午後の行動を決める権利がある』

うむ。

『二、勝ったチームは負けたチームに一人一回命令できる』

うむうむ。

『三、あらゆる妨害を許可する』

うむうむう　　なんだとおおっ！？

「おい美咲最後のなんだ！？ 普通はここで“あらゆる妨害を禁止する”って書くところだろっ！？」

ルールがまとめられたメモ用紙を突きつける。

「ああ、ごめんごめん 間違っちゃったあ」

メモ用紙を受けとり備え付けのボールペンを走らせる美咲。

いや、こいつならマジでやりそうだろ？ 『間違っちゃった』な

んて言ってるが俺が突っ込まなければ、公然と妨害したに違いない。

『言うことを聞く』かあ、もしかしたらとんでもない危険遊戯を引き受けてしまったのでは？

「はい、書き直したよ」

美咲が皆に訂正された第三ルールを提示した。

『三、あらゆる妨害を許可する（ただし直接危害を与えることは禁止）。』

.....。

妨害する気全開ですよおおおっ！？

かくして戦の火蓋は切って落とされた。

投球順は宏治、シロ、俺、イル、美咲。

..... 宏治、生きて帰れよ。

戦地に赴く徴収兵を見送るような哀惜を込めて心中で呟く。

『雅、大丈夫なのかよこの賭け?』

『始まった以上逃げは許されん! 正々堂々正面きって打ち破るしかない……』

『語尾が微妙に消え入りそうだぞ……』

『お互い様だ』

アイコンタクトのみで会話を交わす俺たち。最早俺と宏治は運命共同体! この戦……負けるわけにはいかん!!

『逝け、宏治! 骨は拾ってやる!』

「……とてつもなく嫌なこと考えてるだろお前」

うむ、流石は戦友。だが情けなど戦場では無意味だ。

正直『直接危害を加えず』に妨害をたくらむ美咲の思惑が掴めない。一体どんな手段で……。

宏治がボールを振り、投球を

「せゝゝの このロリ ン野郎おお!」

「ぬがああっ!」

そうきたか! お前らそうきたかああっ!?

手をメガホンにみたてたシロと美咲を尻目に放られたボールを見る。やる。

奴らの妨害により精神にダメージを負った宏治の放った球は、目標をおおきくそれ左方の溝に嵌る。

スコア表には『G』と表示される。

「……」

「……」

「ああ、宏治？ 大丈夫かお前」

「シロちゃんにも言われた……、俺は……、はは……」

うん、大丈夫だ。

「んなわけあるかあ！ 助けるよ！ 妨害を阻止しろよ！ 俺を生
け贄の羊にしやがって！」
スケープゴート

怒涛のごとく宏治。うんうん、突っ込みに切れが増したな宏治よ。

「それはともかく、早く投げろよ。進まないだろ？」

「……もういい」

言葉の通り次の投球には力が一切籠もらず、左側の数ピンを薙ぎ倒すに留まった。

第二投球者、シロ。

ふん、言っておくが俺は妨害などといったせせこましい事はせんぞ。正々堂々と勝負し、勝利してみせる！

隣でブツブツ呟いている廃人未満変質者以上の友人を瞳にいれずに俺は一人誓う。

「うふふふ、ねえ雅い」

「なんだ、子猫さん？」

そんな漢的な俺の心情を知ってか知らずかシロが俺に話しかけてきた。

「実はさあ、昨日の夜聴いたんだけど美咲ってね　「こによこによ」

「　なんだとおおっ！！　美咲の胸は実は陥没しててあの今の姿さえパッドを十枚重ねた姿だ　」

「何を奇怪な言動を声高々と曰うかあああっ！！」

「ノベラカアアッ！」

美咲の熟練されたドロップキックが後頭部に炸裂！　椅子に腰掛けていた俺はテーブルに額を叩きつけてしまった。

その時、一瞬視界に入った光景は
「あああああっ、ちよいまで！　今シロじゃなくてイルが投げたろ！」

机から勢いよく額を離し、抗議の視線をシロとその隣に佇むイルに向ける。

ボールは勢いよく転がっていき、軽快な音とともに全てのピンを薙ぎ倒した。

「やったあ、すといくだよお。いえゝい」

隣のイルと傍に寄った美咲にハイタッチを交わすシロ。ただイルの表情は苦笑ととって差し支えないものだった。

「お、お前らあ……」

「楽しみねえゝ、勝ったら何奢って貰おうかしらゝ。冬物の新作な

んていいかなあゝ」

「私は長猫さんフルコンプリートかなあゝ」

「えつと……その……」

俺の呻きなどなど右から左に流し勝手気ままに勝利時に俺たちに要求するであろう言葉をかわすシロと美咲。その傍らで気まずそうに視線をさまよわせるイル。

……ふふふ、そうかい……そうまでして勝ちたいか……。いいだろう、そっちがその気なら……！

「悪い、ちょっとトイレ。宏治も付き合え」

なかば自失状態の宏治の襟を掴み強引に立ち上がらせ、俺は宏治を引いていき程近い場所にある男子トイレにはいる。

「はは……、どうした雅？……こんな口リ　ン野郎はほっとけよ」

「よく聞け宏治！　もう手段なんか選んでいられん！　こうなったらこっちもやるぞ！」

俺の言葉に目を白黒させながら困惑気味の宏治。

「おい、本気か？　第一そんなことしたら後で俺等がどうなるか」

「言つたろ、手段を選んでなんかいられないんだ！　美咲とシロが何を要求するかで言つてたろ！　思い出せ！」

「確か……、冬物の新作と長猫フルコンプリートとか　っ!？」

「やっと分かったかこの馬鹿」

そう、シロと美咲が俺たちに要望しようとしている物品。これが大問題だ。

まず美咲所望の冬物ものとやら。言わずもがなながら勿論洋服である。

美咲はこれといってブランド好きといった訳ではないが、そこは華の女子高生！ それなりに服飾には気をつかう。そしてあの美咲の事だ、遠慮などといった概念は期待できない。

続いてシロ所望の長猫なるぬいぐるみ！ 一般にはあまり知られていないだろうが昨今のぬいぐるみとやらは異様に値が張る。それが今一部でブレイク中のものとなればなおのこと。しかもフルコンプリートときた！

これの意味するところ。つまり

「……無一文、か？」

「……無一文、だな」

宏治の呟きに俺が答える。

宏治にもことの重大さが理解出来たようだ。

「だが、相手が不味くないか？ イルさんはともかく、あの二人に逆恨みされたら」

「それは大丈夫だ。賭けで勝てば一人一回相手チームに命令できる。そのうちの一回で“逆恨みを禁じる”って言えばいい。ああ見えて

シロも美咲も約束は守る奴らだ。……多分」

俺の言葉にしばし躊躇するように視線をさまよわせる宏治だが僅かな沈黙の後、言葉を紡ぐ。

「……具体的には？」

「俺に考えがある。いいか、よく聴け」

こうして我らが男組の反撃の狼煙はあげられることとなる。
ふっふっふ、目にもの見せてやるぜえ〜〜！

その12： 遊戯とは即ちイクサなり 〵後編〵

「雅たち遅いねえ」

「ホントに。まったく、私が投げちゃおうかしら」
退屈げに呟く私の言葉に美咲が同意する。

雅たちが席をはずしてからもう15分はたった。次の投球は雅。
このままではゲームが進まない。

「ってかシロオ！ 雅の注意を乱しなさいって言ったけど、誰の胸が陥没してるってえ」！

美咲が突如、言葉と一緒に私の頬を左右に引つ張ります。
「いひゃい！ いひゃいってみしゃきい」！

「そんな口はこうしてやるこうしてやるう」！

「にゃあ」！

理不尽だ。自分で注意をひけなんて言っておいて理不尽だあ。なんとなく普段の雅や宏治の心境がわかった瞬間でした。

「あの……」

私たちが騒いでいる横で不意にイルが声をあげる。
「ホントに私が投^{わたし}げてよかったのでしょうか……？」
イルの言葉を受け、美咲が私の頬を解放する。
うう、危うく口裂け少女になるとこだったよあ。

「もう、思い悩み過ぎだよイルさん。第一あんなのまだまだ温かい」

手をパタパタ振りながらイルに答える美咲。

「それ以前にあんなで参るほどあいつらはやわじゃないって」

『それに』と言葉を続ける。

「……日頃の鬱憤はすっかり晴らさないとねえ」

うわあ、これが本音だね　黒い、黒い。あ、イルが渴いた笑みを浮かべてる。

……これからはちょっとは言葉に気をつけよう」と。

「まあ、私だつて鬼じゃないし上着一着頼みたいだけだし。シロだつて実際はフルコンプリなんて言う気ないんでしょ？」

「うん、でも一つくらいならいいよね」

お世話になつているのにそれほど贅沢いってはいられないもの。それくらい考えてるよ。

「はあ、ですが……」

なおも洩るイル。一体どうしたんだろう。

「どうしたのイル？」　まだ何か気になるのぉ？」

声に出してきいてみた私にイルは曖昧に口を開く。

「……何か嫌な予感がするんです」

その不明瞭なイルのものの言いに私と美咲は？を頭上に浮かべるのでした。

「悪い、遅れたな。いやあ、まさかトイレが二十分待ちなんてなあ」

さらに五分ほど経過したころ雅と宏治が姿を表した。

「遊園地のアトラクションじゃないでしょうが。いいから早く投げよ」

「だからすまんて。すぐ始めるから」

美咲の言葉に雅はイヤに爽やかな笑みで返す。

ふふ、でもねえ雅い。そんな余裕はすぐに消えるわよあ。

そう、いかに相手が雅とはいえこれは戦争なの。そして戦争はいつの世も無情……。ごめんね雅い」

細く笑みつつ美咲に耳打ちする。

「今度はどうするのお……」

「そおねえ……。じゃあまた、せうので“このドM野郎”で……」

「了解……」

そんな私たちをイルは相変わらず苦笑で見守るのですた。

そうこうしているうちに雅が投球姿勢をとりました。

よし

「「せうの、このドえ」

「ふっ」

言葉の最中、私の口に何かが具現する。いきなり現れた甘い食感に言葉は強制中断される。

こ、これは飴玉あ!?

そんな私たちをおいて雅のほおった球は直線で目標へ向かっていき

「よっしゃあ！ ストライク！」

隣を視ると美咲も私と同じように口内で飴玉を転がしていた。
ちよ……、何でいきなり飴玉が……？

「ちよつとコウツ！ あんた今指弾で飴を撃ったわねっ！」
美咲がいきなり立ち上がると宏治に効果音がつきそうな勢いで指を突きつける。

し、指弾って確か指で小石とかを弾いて攻撃するってあれえ！？
美咲の言葉に宏治と雅はハイタッチを交わしつつヤケに清々しい笑みをしていた。

「おや？ どうしたのかなlittle girl。指弾？ はて何のことやら」

「全くですなmy friend、AHHHAHHHAH！」
奇妙な哄笑をあげる雅。

「……なるほどね。あんたたち 挑戦と受け取ったわ」

何かなるほどなんだろう？ ってか宏治って何者？ あ、イルが頭抱えてる。

「ふつ、掛かってくるがいいさ！」

「私たちは負けない！」
指を突き合わせノリノリの両者。うーん、何かテンションおかしいよねえ。

「それはともかく」

三人同時にハモったあ！ 凄っ！

「イルさん、投げる番だよ」

「どうしたんだイル？ 調子悪いのか」

「ちよつと休みます？」

美咲、雅、宏治。言葉がこれほどリンクしてるよ。

ううーん、なんていうかこの三人は芸人になれるんじゃないだろうか？

「は、はあ」

溜息なのか返事なのかよくわからない声を漏らしてイルは立ち上がる。

むう、妨害を阻止されたおかげでスコアはほぼ同点。まあ、まだ一投目だけど。

「じゃあ、いきますね」

イルが球を手にとり、投球フォームをとる。

雅と宏治がどうやらやる気になったらしいということは私でも理解できたよお。でも今回の投球者はイル。

「あの二人、何かすると思う？」

「ううーん、無理じゃないかなあ。だって相手イルだし」

「そうよねえ、あの二人イルさんには結構弱いし」

「……私たちの時は油断出来ないよね？」

「……あの差別的エセフェミニスト共が」

アイコンタクト成功。

雅たちを窺うと渋い顔で互いに顔をあわせている。多分イルが相手だから妨害したくても出来ない苦悩の表れねえ。

イルウー、遠慮せずにやっちゃえー！

イルがボールを背後に振り

「うし！　ねえチャン胸でかいねえ〜！！」

「ひゃああ！」

やりやがったあ！　やりやがりましたよあの二人い〜！！

ボールはその勢いを留めることなく　右側の溝を滑っていった。

「……」

「……」

「……」

……。

「あんたらあああつ！！」

美咲が吠えた。

とこの問題発言者たちは口笛を吹きつつ明後日の方向をむいていく。

イルはというと

「……セ、セクハラア……」

うわあ〜、何かボール投げた余韻を残した体制で座り込んで何かしらつぶやいてるよあ〜。

「……もう我慢ならないわ、地獄でも巡ってきなさいっ！！」

ボールを凶器に狂犬と化した美咲は愚かな二人組に突撃していった。

もとはといえば元凶はこちらにあるんじゃない？

私は自分の言葉を心に閉じ込めて眼前に広がる地獄を眺めていました。

「ば馬鹿あ〜！　最初にやりだしたのはお前らだろあが　ややめてえ〜、マウンドポジションで凶器ボールは死　ぶふうっ！」

「み雅い！ おいつやめる美さ のぐうつ！」

「お前も同罪だあつ！」

美咲いゝ、いくら何でもボーリング球が霞むほどのスピードで投げける？ 宏治五メートルくらい吹っ飛んだよ？ あ、宏治泡吹いてる。

その後、ここの従業員が仲裁に入るまでこの地獄は続くのです。何か今回、私地味だったなあゝ。よおゝし、次はハツチャけよおつとつ

「だ……、誰 ぶふうつ か助 ー」

「私に胸がないからかああつ！ 嫌がらせかあ！」

…………… 美咲に胸ネタはもうよそおつと

その13： 空は青色、心はブルー（前書き）

評価なんか頂けたら幸いですo(^ ^)o

その13： 空は青色、心はブルー

「　　しかし、酷い目にあつたなあ」

「「俺らの台詞だあつ！」」

複合型娯楽施設の一階に位置するカフェテラスに俺と宏治の叫びが木霊した。

凄惨な戦いとなつた第一次ボーリング大戦は、ボーリング場責任者の厳重注意をもって強制的に休戦協定締結とあいなり、あつけない幕切れとなつた。

残りのゲームを冷戦中の米ソよろしく消化した俺たちは昼食もかねて休憩にやってきたわけで訳である。

「何よあ、口答えする気？　男らしくないなあ」

「……男とか女とか以前の問題だ。手加減を知らんのかお前は」

チョコレートパフェを頬張りながら愚痴る美咲に冷めた視線を向ける俺。

「うう、まだ少し腹が痛い……」

宏治は腹をさすりつつ食後の珈琲を啜る。

あ、そうだ。

「なあ、イル？」

「……何でしょうか？」

うわっ、何か恨めしそうな目で見てるよ。ってか絶対恨んでるよ。ケーキをはみつつ紅茶を啜りながらイルはあきらかに落ち込んでいた。

額に汗を浮かべつつ宏治に視線を移す。俺と同様気まずげな宏治。

互いに一つ頷きあうと揃って口をひらく。

「さつきはホントにすまなかった」

「悪気はなかった　　ってのは言い訳ですが、許してくれませんか？」

「え？　　あ、いえ。別に気にしないでください。私だって、そのシロラディア様の時に投げてしまいましたし……、えっと……こちらこそすいません」

揃って頭を軽くさげる。そんな俺たちをみてイルは殊更慌てたように言葉を紡いだ。

そんな様子が互いにおかしく感じ俺たち三人は微笑を浮かべた。

「痛み分け、か」

「はい、そうですね」

俺は自身の珈琲を口に含み、ふと先程から無言のシロが気になった。

「そういえばシロ？　さつきから黙っ」

みると巨大なバナラアイス相手に孤軍奮闘の勇者がいた。

「ん？　どしたのおゝ雅いゝ」

「……いや、美味いか？　それ」

「んゝ、まあまあかなゝ。デコレーションでバナラ本来の味を引き立てようってのは好感だけど今ひとつ生かしきれてないよゝ」

「……そ、そうか……」

俺以外の三名もその光景には何も言わずにいた。

何せ、アイス本体の量が半端ではない。　例えるならラーメンどんぶりに一杯のアイス。

………シロ、お前その身体に何でその量が入る？　さつきスパゲティ喰って『はあゝ、お腹いっぱいゝ』って言ったの誰だよ！？　ってかどこのアイス評論家だお前は！？

「まあとりあえず、賭けは私たちたちの勝ちだし言うこと聞いて貰うわよ」

異次元じみた光景から俺の思考は現実に戻した。

そう、休戦協定は締結されたが先程も言ったとおり冷戦は続いた。つまり賭けは継続していたわけで勝敗はと言うと……男組の敗北。

実はこの食事もイルの希望。

『ご飯……奢ってください』なんて言われましたよ。そりゃもう哀惜感たっぷりと。

「わかってる。だけど頼むからなるべく金がかからないように頼むぞ」

「仕方ないわねえ」

負けたものは仕方がない。宏治の言葉に美咲は喜色満面でいる。

「……頼むぞ、ホントに」

伝票を確認に陰鬱な気持ちになった俺。

この時点でかなりの出費だな……。

「つてかさあ」

シロ、巨大アイス完食！

ちよい待てえ！ さっき見た時まだ半分近くあったろお！ 見ろ

よ！ 美咲も宏治もイルですら固まってんぞ！ お前一体何者だよ！？

「ん？ どしたのみんなあ？」

「あ、すすみますん。つい惚けてしまいました」

「シロちゃんて……」

「何者よ、あんた……」

シロ、『ほえ？』なんて首を傾げるな…、頼むから自分でいう存在を考察してくれ……。

「ああ、んでどうしたんだ？ 何か聴きたげだったが」

仕方なく俺が先を促す。こうでもしないとシロの奇天烈ワールドに俺まで引き込まれる。

「うん？ あ、そうそう」

傍らのホットココアをングングで喉を潤して一言。

「雅たちってなんか変だよねぇ」

変なのはお前だ。

「あゝ、変って何がだよ？」

「うんゝ、何て言うかなあゝ？ ちょっと常人離れしてない？」

っ！

投げやりな俺の言葉にシロは予想外の答えを返した。

「ほらあゝ、あんだけ美咲にボコボコにされたのに今は二人ともケロツとしてるしい、美咲は美咲で普通人が飛ぶほどの速さでボーリング球投げられる？」

俺たち三人を見渡し、シロ。

「それに、雅前に宏治たちと初めて会ったとき私を抱えて逃げたじゃん？ 美咲たちも凄い速さで追ってきてたしい。なんか変じゃない？」

シロの言葉には疑惑はない。あるのは純然たる疑問。

だからこそか。シロを除く俺たちは皆揃って口を閉ざしていた。

「……ちよつとあゝ、どしたのお？ みんな黙ってえ」

「あ、あのね。シ」

「おいおい、くだらないこと言うなよシロ」

美咲が言いかけた言葉を遮り、俺は声をあげた。

なにか言いたげな美咲に視線で“黙ってる”と合図を送る。

「んなどうでもいいことは置いて、これからどこ行くか決めないか？ 決定権はそっちにあるがな」

「そうそう、俺たちは所詮負け組だし。パパッと決めてくれ」「やれやれ」という風に宏治が続ける。

俺たちの意図を悟ったらしい美咲は殊更慌てたように首肯をする。
「そうねっ。えっと、じゃあどうする？ シロもイルさんも行きたいとことかない？」

美咲に振られたイルは柔和な微笑を浮かべ、シロは考え込むように視線を泳がせる。

「私は特にはありません。シロラディア様は如何ですか？」

「うーん、買い物したいけど、その前に遊びたいなあ。でも何がしたいって言われたら迷う」

「おいおい、これじゃ賭けの意味ないじゃないか。美咲は？」

俺の言葉に美咲は顎に手をあて、思案顔で口を開く。

「むう、なら室内にあるゲームセンターで時間でも潰してゆっくり考えない？ どうせ時間はあるしさ」

美咲の言葉に皆が曖昧に首肯した。

「さつてと、そうと決まれば行くわよ！ シロ、対戦でもする？」

「あ、いいよ。グチヨグチヨのベチヨベチヨしてやるう」

「……せめて“けちよんけちよん”にして」

二人並んで店外へと足を運ぶのを眺めつつ、隣を進むイルに耳打ちをする。

「気づいたか、イル？」

「……」

無言のまま進むイル。

会計に伝票を預け、イル、俺、宏治と並ぶ。

会計を手早く済ませ三人揃って店外に抜ける途中、俺は背後に一瞬視線を走らせ、先程自分たちがついていた席の窓を伺う。

そこから数十メートル先に位置する市民公園の片隅。

“人ならざるモノの気配が八体”。

「……まだわかりません。あのモノたちの目的がはたしてシロラディア様なのかどうかは」

もうすでにゲームコーナーで遊技に興じている二人の少女を瞳に移し、イル。

「まあ、警戒するに越したことはないだろ？ いざってときは俺たちが処理するさ」

「イルさんはシロちゃんを護るように、ね」

宣言するように語る俺たちにイルは心持ち顔を伏せる。

「……宏治様は雅様に聴かれたんですね」

身体の向きはそのままに、自問自答するようにイルが呟いた。
と、伏せた顔を起こし再び少女、シロに視線を向ける。

「断言は出来ませんが、雅様の言う通り油断はできません。しばらく様子見をしましょう。それで、もし狙いがシロラディア様である場合は」

「「排除する」」

俺と宏治が同時に呟いた。

その言葉にイルは嬉しいような申し訳ないような、どちらともつかない笑みを浮かべる。

「……………ありがとうございます」

逡巡した後の言葉は、謝罪でも遠慮でも躊躇でもない、純粋な感謝だった。

その14： 茜色のヒカリ

「ひっひ……」

樹木が乱立し、薄闇に木漏れ日が差す幻想的な空間を一人の中年男性が息も絶え絶えに駆けていた。

否、一概にその男性は“一人”とは括れない様相であつた。

血走つた瞳、鋭く鋭利な八重歯、隆起した筋肉に獣じみた体毛。そして直立姿勢でさえ地に届きそうな両腕。

“獣人”。そう呼んで差し支えないモノであつた。

「な、何だあアイツらあ……！？ ……ホ、ホントに……人間かあ……！？」

やがて彼は歩みを止めた。

辺りの気配を探るようにへい睨する男の身体は小刻みに恐怖に震える。

「何故だ……！？ 護衛はあの女一人だつた筈だ。奴らは何者だ……！？」

恨み言、答えるモノはない。

辺りには静寂のみ。昼間だというのに喧噪どころか鳥の鳴き声すらない。

彼には仲間がいた。同胞である七人の仲間が。だが、それも先程までの話。

「冗談じゃない……！？ 一瞬で、俺達が一瞬で……！？」

今回彼が負つた依頼。極めて単純な依頼。

ある少女の確保。

なんてことはない依頼の筈であつた。

ろくに護衛もない人間界、しかも対象はほぼ無力な幼子。数ある仕事の中でも容易に遂行可能な任務。

だが……。

「はじめの威勢はどうした？ わんころ」

「　　っがぁ！？」

唐突に背後からあがった声。

振り向きざまに獣じみた唸りをあげ、その言葉をあげた少年を睨み据える。

「おお、怖い怖い。そういえば始めてみるな獣人って」

「うゝむ、獣人は獣人でも俺的にはもっところ……、”にやつん！”

って感じの子が良かったが……」

「ぐうるう……」

手に特殊警棒のような物を携えた少し長めの髪の少年に、短髪に精悍な顔つきの少年。

それぞれのペースで二人の少年はその場に存在していた。

緊迫した場において二人はあまりに平常であつたが、獣の彼は気づいていた。

こいつら……、まるで隙がない……！？

はじめ自分たちの前に現れたときもそうだ。非力で無力な愚かな餌。全員がそう感じただろう。……彼以外は。

だからこそ彼はこうやって逃げおうせた。たとえそれが束の間の逃避であろうとも。

「ぐうるうう、貴様らぁ、何者だぁ……！？ 何故我らに敵対する
なにゆえ
……！？」

「そんなのはじめに言ったぞわんころ、もう忘れたのか？」
警棒の少年が言う。人の良さそうな笑みに殺気を込めて。

『おまえ達の狙いは、シロラディア ルシファーか？』
出会い頭に少年が彼らに問うた言葉。

獣の彼にも無論少年らが何故自分たちに敵対するのは承知している。だが、それでも納得出来ないのだ。

「な、何故ただの人間が我らと……、我ら魔界の住人と渡りあえ
」

そこまでだった。獣の彼はそれ以上言葉を紡ぐことは出来なかった。

短髪の少年。

無動作からの一足で獣の彼との間合いを詰め、彼の首を掴み宙吊りにしたためだ。

「ぐうおお……！？」

「くだらねえなお前、そんなの」

そのまま短髪の少年は宙吊りの彼を警棒の少年に向けて放り投げる。

ぞんざいに、至極どうでも良さそうに放られた彼はしかし数メートル離れた少年の元へと飛来し

「俺たちが“ただの”人間じゃないただだよ」

警棒の少年の言葉。

その言葉が彼に届いたのかは知り得ない。

言葉と同時、獣の彼は吹き飛ばされた。残像すら残さない、音すらも置き去りにする少年の警棒に。

樹齡が浅い木は薙ぎ倒され、木々の間を跳ね、木の葉や土をまき散らせながらやがて彼はその動きを停める。

朦朧とする思考、指一本動かせないほどの激痛のなか彼は一言、
「ば……け、もの……」

そう呟き、意識を失った。

「うゝ、美咲いゝちょっとくらい手加減してよあ」

「勝負とはいつの世も非情なものよゝ、悔しいなら実力で勝ちなさいゝ」

中世の婦人よろしく『おほほ』なんて笑いながら勝ち誇る美咲。
ううゝ、悔しいいゝ……。

「まあまあ、私はあの馬鹿達とよく来て慣れてるところもあるからね。まだあんたには負けないわよ」

フォローのつもりか、美咲はそう言いつつゲームの筐体から離れ、私のもとへとやってくる。

「ほら、こっちに来なさい。練習するなら対人よりCP戦の方がいいんだから」

「ううゝ」

美咲に席を譲ってもらいレクチャーを受けつつゲームを進める。

「いい？　そこで下段強切りで、そう！　そこでさっきの！」
「こつ？」

「そう、その後」

「うう、難しいよお」

次々と矢継ぎ早に繰り出される美咲の指示にあわせて操作するが、なにぶん上級者と初心者。操作がなかなか間に合わない。

「ああ！ ダメっ！？　そこでガードしたら」

ふとしたミスで私が操作していたキャラはガードを崩され、あっという間に画面には『YOU　LOSE』の文字。

「ああ、負けちゃった……。なんかこのキャラ強くない？」

「ここのは結構やり込まれててCPのレベルが高いのよ。でもいいとこまで行ったのにねえ。まあ初心者であそこまでやればたいしたものよ」

そう言いつつ美咲は私の頭を撫でる。

「まあ、子供扱いしないでよ美咲い。私だって一人の熟女なんだよ」

「……シロラディア様。そこは“レディ”と言うのが正しいですよ」

美咲の手を払い、イルに視線を移す。

「まあ、そうだけだねえ。っていうか雅たちまだ戻ってこないのイル？」

数十分前からであろうか。自分たちがゲームに興じ始めた後、イルがやって来た。雅たちの姿が見えず疑問をイルに語ると、『何か用事が出来たみたいですよ。すぐに戻ると仰ってました』との返事。
「さあ、そろそろ戻って来ると思いますが……」

イルが思案気に首を捻ると、美咲は再び私の頭に手を置く。

「まさかあいつら、逃亡したわけじゃないでしょうね。賭けを前倒しで」

「それはないと思いますよ。何分急いだ様子でしたし」
イルがはにかみつづ答える。

っていうか、美咲いゝ。

「だからあゝ、子供扱いしないでつてばあゝ！」

美咲の手を二度払いのけ、私は頬を膨らませる。

もあゝ、美咲の馬鹿あ。

「何よ？ 実際子供なんだからいいじゃない」

「ダメ！ まったくゝ」

ふてくされ気味の私に美咲は呆れたように嘆息する。

「そんなこと言っておきながらミヤにはしょっちゅう撫でられてるくせに」

っ！？

「な、なんで美咲がそんなこと知ってるのよあゝ！？」

「は？ え、軽くからかったつもりだけど ホントにやってもらってるの！？」

つい口をついた言葉だったが、美咲にも私の反応は予想外だったらしく、抗議にもとれる口調で返してきた。

「え？ あ……、いや違うよ？ 別に嬉しいとかはまったくないわけ……」

しどろもどろな私に美咲は、なんともいやらしい笑みを浮かべた。

「……ふうん、つまり私はダメでミヤならいいと？ そういうことかなあゝシロちゃんゝ」

「み、美咲いゝ？　ちょ、ちょっと怖いんだけどなあゝ？」

言葉に詰まる私に美咲は詰め寄りつつ、手を伸ばそうとする。

「ふふふ？　可愛い可愛いお嬢ちゃん？　その頭、毛が擦り落ちるまで撫でてあげるからこつちおいでえゝ？」

「によあゝ！？」

UFOキャッチャーの筐体に退路を断たれた私に悪鬼が手をかざし

「何をしとるかお前は？」

どすっ！

鈍い音とともに降り下ろされた雅のチョップが美咲の頭部に炸裂したのでした。

「むぎゅっ」

どこぞの珍獣のような呻きをあげうなだれる美咲。

「あ、雅い。ええゝん怖かったよおゝ」

雅に寄り添い腕にしがみつく。

「こらこら、しがみつくな」

「もうゝ、危うく尼みたいにさせる寸前だったよおゝ」

「尼？　何で？」

じゃれあいつつ雅は片手に持ったアイス二つのうち一つを私に差し出す。

「あ、ありがとう雅いゝ」

「ってか、私を無視していちゃつくなあゝ！」
美咲が吠えた。

「ちょっとミヤア！ いきなり背後からチョップ入れといてスルーって酷くない！？」

「安心しろ、今のはただの突っ込みだ」

「突っ込みしてスルーが酷いって言うてるのよ！」

論点があまりにおかしい会話だなあ。

「ほら美咲、あまり吠えるな。周りに迷惑だろうが」

そう言い、美咲にアイス差し出す宏治。いつの間にかイルの手にもアイスが握られていた。

「……ああ、もう！ どいつもこいつも！」

奪い取るように宏治の手からアイスを受け取る美咲。

私はいまだに雅の腕にしがみついている。

「ねえ雅い？ 宏治とどこ行つてたの？ 結構時間かかったけど」

「ん？ ああ、ちょっとな」

ん？ どうしたんだろ？ なんかいつもの雅らしくないような……

…。変な感じ……？

「大方、可愛い女の子でも見つけてナンパでもしてたんでしょ？ あんたら」

吐き捨てるように言う美咲。

うーん、流石にそれはないんじゃない？ 雅と宏治に限ってそんなことは

「おー、よく分かったな美咲。流石に付き合いが長いだけある。しかしそれにしてもあの子可愛かったなあ宏治」

「ああ、いやあ実に惜しい。後少しで連絡先聴けたのになあ。また会えんかなあ」

「あははは」

「あははは」

「
……」

……。

あつたみたいだね？。

美咲に視線を向け瞬時に意志の疎通をとり、間を置かず瞬時に行動。

美咲、宏治に全力の前蹴り。

クリーンヒット！！

私、目標雅の足の甲、跳躍&着地。

ダメージ大！！

「　　とうわあ！？」

「　　ぐうおおお……！！？」

愚か者二名の苦悶がもれた。

「　　ああゝ、今日は疲れた……。早く休みたい……」

「　　お疲れ様です。雅様」

時は夕刻。俺とイルは揃って家路に着いていた。

「　　すうゝ、すうゝ」

俺の背には既に熟睡済みのシロがいた。規則正しい寝息が首筋に

あたってどうにもむず痒い。

「ったく、コイツは。帰りくらい自分で歩けよ……」

「ふふ」

シロを起こさないよう位置を正しつつ、愚痴をこぼす俺だが内心はなぜか悪い気はしない。

安心しきったシロを背に背負い、家路をイルと共に進む。

宏治たちとは街中で別れ、茜の光が射す住宅街の細道は進むのは俺たちのみ。もう冬の気配が色濃い大気のなか、伸びた影がアスファルトに描き出される。

「……なあ、イル？ 昼間のことなんだが」

「……」

イルの瞳が俺を移す。無論その瞳が射す意味は心得ていた。

「シロのことなら心配いらない。ぐっすり眠ってるよ」

背中越に視線を向け、イルに答える。これだけ密着しているんだ。それくらいわかる。

イルは今日シロの所望したぬいぐるみ入りの紙袋を右手から左手に持ち替えつつ、平時と変わらぬ口調で語り出す。

「……雅に言われた場所には私の知人を向かわせました。言われた通り八名を確保、及び連行しました」

「そうか。じゃあ特に問題はなかったんだな」

イルの言葉に内心ほっとした。

シロを狙った輩を排除することに躊躇はない。だが、ただ一つあった懸念。

奴らがシロを“狙って”いたという事実が多少曖昧であったこと。無論、はじめに問いただしはした。問いただした瞬間、奴らは敵対行為にでた。それだけでも排除するには足りる。

だが

「無駄な争いにならなかったのは良かった」

心底そう思った。この力が、忌まわしい呪われた“力”が無益な

争いに使われずにすんだ……、そう思った。

「ええ、“特には”」

イルの言葉。

その歯切れの悪い物言いはなぜだか、俺の胸を締め付けた。

「“特には” って……、どういう意味だよ？」

イルは俺の一步後方を歩いていた。俺は脚止めずにそのまま、イルに問う。

「……今回シロラディア様を狙ったのは“刃狼族”と呼ばれる種族です。私やシロラディア様のような魔術を遣うような種族ではありませんが、その身体能力はずば抜けています」

イルが発する言葉の一つ一つに俺は耳を傾ける。イルの言わんとすること、大体知りえることが出来た。

でも、俺は知りえないように振る舞う。イルの言葉の居たところにある忌避にもにた感情にさえ気づかんとする。

「単純な徒手戦闘であれば、恐らく群を抜いて上位の種族です。今回の者たちはそれほどだいたいそれを使い手ではありませんでしたが、私でさえ八名を相手に絶対勝てるかと聴かれれば、言いきれません」
そこでイルは脚を止める。自然、俺も脚を止めイルの言葉を待つようになる。

互いに俺たちは見つめあう。

怒気も殺気も覇気も敵意もないイルの瞳に移るのは

一陣の風が俺たちの間を吹き抜け、ややしてイルは口を開く。

「今日はじめて、私はあなたたちを“怖い”と思いました」

.....。

静寂が場を支配した。

俺たちはいまだに見つめあっている。その視線の応酬に意味などないのだろう。

イルが見ているのは、俺という個人ではけしてないだろうから。互いに言葉を紡がぬまましばらくした後、ゆっくりとイルは歩きはじめる。

「怖い、そう思いました」

二度、イルは噛みしめるようにその言葉を紡ぐ。

その言葉にはやはり俺を締めつけるような痛みがあった。

イルと俺が逆向きに横に並ぶとき、ふとイルはなぜか俺の服の裾を握ってきた。

「え、イル？」

「勘違いなさらないでください」

横を見やるとイルは先程とはまるで相対的な微笑を浮かべていた。「私が言ったのはあくまでも“天位”という技自体です。少なくとも私は雅や宏治様たちのことは信頼しています」

「……イル」

彼女は握った裾から手を離し、俺の頬に手を添える。

「すいません。少々説明不足で話を進めすぎました。でもこれだけはわかってください」

そこで彼女は一旦言葉を切り、はにかみを浮かべつつ語りだした。

「私たち異界の住人にとって貴方たちの技術は確かに忌避の対象かもしれませんが。でも、そんなのはただの個性の一端です。私が“怖い”と言ったのは、雅に嘘はつきたくなかったからです。他意はありませんでした」

イルは相変わらず微笑を浮かべている。だが、その微笑はどこか物悲しく儚いような印象で……。

「だから、……そんな顔をしないでください」

「え？」

イルに指摘されて間抜けにもそんな言葉をあげてしまった。イルは俺の頬から手を離し、前を見据えて歩き出す。

「帰宅しましたらすぐに夕飯の支度に取り掛かりますね。簡単なものでよろしいでしょうか？」

「あ、ああ」

イルに続けて歩を進める俺。

イルは俺の前を歩いているため表情は読めない。そんな彼女の背を眺めながら俺は考えを巡らせる。

“そんな顔しないでください”か……。どんな顔してたんだろうな俺……。ああ、そういうえば前に“あいつ”にも言われたっけな……。

「雅」

「ん？」

自宅までもう少しというところでイルから声があがった。

歩を止め、イルは正面を向いたままで言葉を紡ぐ。

「変なことを言ってしまったいけません。でも、迷惑ついでにもう一つ言わせてください」

クルツと振り返りイルは照れたように頬を染めて笑みを浮かべた。
「私は雅のこと、信頼しています。シロラディア様を受け入れてくれた、私を受け入れてくれた貴方のこと、私は好きですよ」

「え？」

「では、私は先に帰宅させていただきましたね。雅はシロラディア様とゆっくりいらしてください。それでは」

言うや否やイルは脱兎の如く駆け出した。止めるいとまもありはしない。

「……………えつとお」

つてか、これはどういった状況だ？ あれは告白の類か？

「ふつ、そうかそうか。イルはいつの間にやら俺に惚れていた訳かあ。俺って罪な男だぜ」

……………。

教訓。ボケはつつこみ役がいなければただの妄言である。

「……………はあ、しかしあのメイドさんは。どうしてああも純情かね」
お陰で下手な期待をしてしまうではないか、まったく。
仕方ない、まあゆつくり帰ると致しますか。

辺りの光は失せかけ、冬の夜を迎えようとしている。

街頭のスポットライトが点々と灯りをともしていく光景はどこか演劇の舞台を思わせる。

この様子では今夜も冷えることだろう。

シロをもう一度背負いなおし、イルの後を追うように歩を進めた。

「ああ、しかしおんぶしてるのがこんなお子ちゃまじゃなくてイ

ルみたいな女性だったら家路もパラダイス路線なんだがなあ」

「……死にたい？」

あくまでも単なる独り言。脳内妄想が言葉について出ただけのこと。

ん、空耳かなあ？ 今どこからともなく天の声が聞こえたような？

「おお、神の声を聴けるようになるとは流石に俺。第三の目に目覚める日も近」

「トレパネーシオン手術してあげましょうかああ！？」

ぐうおお！ 拳を握ってこめかみを破壊せんとする悪魔光臨！

「お、おま！？ いつの間に起きたのじゃ！？」

「何故老人調お！？」

シロが拳をこめかみから解放し俺の首に腕を回して体制を整える。

「ふつ、そうかそうか。イルはいつの間にやら俺に惚れていた」

云々の辺りからだよう。雅一人でぶつぶつうるさいんだもん、お陰で怖い夢見たじゃない」

「ほお、ちなみにどんな夢だ？」

どうやらイルとの会話は聴いていないようだ。心中で安堵しつつ、興味本位で聴いてみた。

「……百人もの坊主がお経を唱えながら転がってくる夢」

こええええ！？

「しかも坊主の顔が全部宏治」

こええええ！？ 宏治坊主こええええ！！？

よし、あいつのことは明日から坊主と呼ぼう！

「押しつぶされる瞬間に目が覚めたよ。ぐすっ」

「ああ、そりゃ災難だったな」

苦笑を浮かべる俺にシロは意気消沈の様子。

「あれ、そういえばイルは？」

「ああ、なんでも先に帰って食事の支度をするってさ。ついさっき走っていったよ」

「ふん」

たわいのない会話を繰り返し、二人で進む。

「なあシロ、起きたんなら自分で歩くか？」

「ええ、このままでいいじゃん。家まで連れてってよ」

「他人任せの人生に意義などないわ！ 己の脚で歩けい」

「……根性なしの甲斐性なし」

「……ミニムサイズのヘビー級が」

チョークスリーパー発動！ 回避不可です！？

「このヘタレエー！」

「ぐるじい〜んじゃわれえ〜！」

やくたいたいじゃあい。すでに俺たちの日常とかした光景。いずれシロは知ることになる。俺がどんな存在であるかということ。

シロはその時、俺に対してどのような振る舞いを見せるだろう？

拒絶されるだろうか？ 嫌悪されるだろうか？ 恐怖されるだろうか？ それとも……受け入れて、くれるだろうか？

当然、その時が来るまで答えは知り得ない。今はまだその蓋は閉じられたまま。さながらシュレディンガーの猫のよう。

出来ることならその蓋は開かれることのないように祈る。信じもしない神という存在にではない、ただただ、祈る。

大切な日常、俺の守るべきモノ、平穏という儚い夢。
今という時間が一日、一時間、一分、一秒でも長く続くことを、俺は祈る。

「誰がヘビー級だああ!？」

「俺の背に乗る小泣き小娘じゃああ!」

「人を妖怪みたいに呼ぶなあああ!」

「悪魔も妖怪もたいして変わらんわああ!」

茜の光のように優しい現実が続くことを、ただ願う。

その15： 教えてイルさん！（前書き）

良かったら評価ください（＾－＾）／
まあ、良かったらですが（＾－＾）：

その15： 教えてイルさん！

「おい雅、今日暇か？ 帰りゲーセンでも回らねえ？」

放課後の教室。教科書やプリントを鞆に詰めていた俺に宏治は語りかけた。その隣には美咲もいる。

「あゝ、わりい。今日はちよつと無理だ。先約があつてな」

「先約？ いったいなによ？」

鞆を手に椅子から立ち上がる俺に美咲。少々不服そうな表情だ。

「実はイルと約束があつてな。今日はなるべく早く帰りたいんだ」

「イルさんと約束？ なんだよ雅、まさかデートなんてオチはないよな？」

なんだその“オチ”って？

「まあ、あり得ないわね。例えるなら暗殺部隊がガトリングガンを装備しているほどあり得ないわ」

黙ってるこのダルマ体型。

「はあゝ、たいしたことじゃない。いろいろ教えてもらっただけだ」

「何を？」

二人してハモリやがった。そんなに知りたいことかねえ？

「なにを？」 って男と女の間でそれは野暮

スネに食い込む美咲のローキック&腹に刺さる宏治のボディブロ

ー！

「……つてのは冗談でええ……」

片膝を付き、苦悶混じりの声で訂正する健気な俺。誰か僕に愛をください……。

「アホなこと宣う暇があるなら話は簡潔にしなさいよ」

「そっだぞ雅。第一それが本当なら俺も誘」

宏治の顔面を捉える美咲のハイキック&脇腹を捉えた俺のミドルキック！

ぐずれ落ちる親友。その姿はどこぞのボクシング漫画を連想させる哀愁を漂わせていた。

「……だ、誰か愛をください……」

おまえには“愛”より“哀”をくれてやるわ。

「で、ホントはなんなのよ？」

いつそ清々しいまでに宏治をスルーし、再び美咲。

ん、別に秘密にするようなことでもないがやけに聴きたがるな。

「ん？ まあ、実はイルにイルたちが暮らす異界のことを聴く予定だったんだ」

辺りのまだ教室に残るクラスメイトに注意を向け、宏治と美咲のみに聞こえるほどの声音で言う。

「異界について？ なんてまたそんなことを？」

「ホントに唐突だな。どうしてまた？」

俺の声にあわせるように美咲。宏治も哀愁を振り払い、立ち上がると俺たちのそばで声をあげる。

「いや、ホントにたいした意味はないんだよ。ただ自分たちの世界、“人間界”とシロたちの“異界”。その違いを知りたいってただの興味だよ」

俺の言葉に若干思考するように首を捻る宏治。ただ、美咲の顔色はなぜか良いものとは言えず、僅かに顔を伏せていた。

「ねえミヤ？ それは天位として」

「ただの興味だ。くだらない事を言うな」

美咲の言葉を間断する。多少言葉尻に語気が籠もってしまい。美咲は少し脅えたように肩を揺すった。

「あ、……そうだよ。ミヤがそんなことでイルさんにそんなこと聴かないもんね……。ごめん……」

「……」

美咲の声音は徐々に萎んでいくようにか弱いモノだった。俺はそんな美咲になにも言えず沈黙していたが、間を置かずその沈黙も宏治の声に破られた。

「なあ雅。それ俺も行っていいか？」

「は？ いや、別な問題はないだろうが、なんだお前も興味あるのか？」

「そりゃないとは言えないさ。自分たちの住む世界とは別の世界なんて現実じゃ普通ないだろ？ ……もしかしたら猫耳などもリアルで存在するかもしれん……」

言葉の終わりにぼそぼそと紡がれた言葉。俺は聴きのがさんぞ宏治よ。

お前ってやつぱりそういう奴だよな。 ……ぼく八きたいシテナイヨ？

「まあ、イルは嫌とは言わないだろうな。夕飯食べながらの会話になると思っから、とりあえず連絡しとくか」

上着のポケットから携帯を取り出し、自宅への番組を選び、通話ボタンに指を掛ける。

耳にコール音が響き、視線をさまよわせた時、ふと美咲と目があった。

「あ、あのミヤ？ 私も」

「お前も来るんだろ？ イルにはちゃんと伝えるさ」

美咲らしくない弱気な言葉に苦笑を浮かべ、言葉を先読みして伝える。

お前にそんな顔は似合わないんだよ。お前は笑ってるのが一番いい。

コール音に耳を傾け、言葉に表さず心で呟く。その言葉が届いたかどうかは知らないが俺の返事を聴いた美咲は、

「あ…… うんっ！」

笑顔でそう答えた。

「では、頂きます」

「」「」「頂きます！」「」「」

お馴染みの言葉で食事の開始を告げられた我が家のリビング。テレビ前に設置されたコタツにて皆で鍋を囲む。

「はあゝ、温まるなあゝ。やっぱりこの時期は鍋物が一番だな」

具の旨味が染み込んだだし汁を飲みつつ、嘆息が漏れる。やっぱり旨いよなイルの料理。今度少し教えて貰おうか。

「ありあわせで作ったものですみませんが、味の方は保証いたしますので。どんどん召し上がってくださいね」

「なんだかすいません。いきなり押しかけるかたちになってしまつて」

「ふふ、いいんですよ宏治様。食事は大勢で食べたほうが美味しいものですから」

イルと宏治の会話に耳を傾けつつ、肉の取り合いという極めて低レベルな争いに目を向ける。

「ああゝ！ ちょっと美咲いゝ！ そのお肉は私が目をつけてたのにい！」

「ふっふっふ、甘いわね！ 食事とは戦争そのもの！ 弱肉強食の世界なのよシロ！ まさしく“喰うか喰われるか”の世界、泣き言なんか言ってる暇はないわ！」

「ううゝ」

微妙に上手いことを言う美咲を後目に俺も肉をひとつまみ。

「」「ああゝ！」「」

ん？ なぜそんな親の敵を睨みつけるような目で見るのお二方？
……もしかこの豚肉？

「……私の獲物を横取りするとは、いい度胸ねミヤア？」

「雅い？ 宣戦布告と受け取ったよお。覚悟いい？」

いや、あの？ 横取りもなにもこんな直径せいぜいで三十センチ程の鍋のなかの一切れの肉を捕っただけでそんな事言われても……？ いやそれ以前に肉の一切れでそんな熱くなられても？

「いや、なあお前ら？ 何をそんな熱くなってるか知らんがちよつと落ち着く」

ジョボ。

何気ない動作で伸ばされた美沙の手に握られた醤油差しから大量の液体が俺の器を墨の如き黒に染める。

ザッザッザッ！

何気ない動作で伸ばされたシロの手に握られた一味入れの容器から、散り際最盛期の桜の如く赤い粉が墨の上に降り注ぐ。

……何この夜桜風味の芸術的激物？

「いえゝい」

「いえゝい」

少女二名、意気揚々とハイタッチ。

……。

「上等だつ、てめえらああ！」

俺の怒声がリビングに木霊した。

「お、おい！？ 落ち着け雅！？ どうどう！」

「俺はどこぞの闘牛かあつ！？ 俺はどこぞの暴れ馬かつ！？ そ

してこの汁を飲めって言うのかあつ!？」

「もお」

「ひひいゝん」

美咲、ならびにシロ。

「とにかく落ち着け!？ 汁一杯で切れるな!？ ってか美沙にシロちゃんも煽るなあつ!？」

「あ、あははは……」

「がああゝ! この小娘どもお! よくも俺の汁をおお!？」

必死の様子 of 宏治に、乾いた笑みのイル。“もお”に“ひひいゝん”などと挑発するアホ娘ども。

「食べ物 of 恨みいっ!？」

「落ち着けええっ!？」

地獄 in 妃家。和やかなムードでの食事など我が家にはないのでしょうか？

「ああゝ、楽しかったし美味しかったあ」

「あはは、それにしても雅っておかしいゝ、汁一杯であんなになるなんてえゝ」

肉一切れであそこまでの愚行にでるお前らほどじゃない!

「美咲にシロ……、お前ら覚えてろよ……」

「いい加減その話題は流せよ」

「ふふ」

場は流れ、今現在は食後の小休止中。コタツ上の鍋はすでにかたづけられ、揃って珈琲、シロはミルクを飲みつつアイスをはみつ座談を交わしてた我らである。

「ってかどこぞの誰かさんたちのせいで本題がまだじゃないか……」

「まったく、ミヤがあんなに暴れるから」

「ホントだよお。まったく」

「てめえらのせいだろうがあ！」

「きゃあああつ怖い！ 襲われる！？」

しなをつくつてわざとらしく怯えた風の美咲。なんというか、

「……キモ」

美咲、醤油差しの蓋を外し俺の口に押し込む！

「むぐうううっ！？」

貴様！ かたされたはずの醤油差しをどこから取り出したあ！？

「ああ、イルさん？ 場が少し乱れてますが本題 異界のこと
に入って大丈夫ですかね？」

スルーかつ！？ 俺の現状はスルーか友よ！？

「あ、はい。もともとそのつもりでしたからね」

お前もかイル！？

醤油をダツシュで流しに吐き出し、ゆらゆらもとの席に着く。

「雅い？ 大丈夫う？」

う……、シロ。お前だけだよ、俺の心配してくれるのは……。

「まあそれなりに……。心配してくれてありがとな……」

「……ちっ」

舌打ちしやがったああ!?

「ほら雅。イルさんに話きくんだろ? 脱線しすぎだ。もう少し落ち着け」

「……………もういいさ。誰も俺を分かってくれない…………。グスン。え? 可愛くない? むしろキモイ? ……………ほっといてくれ。」

「ああ、じゃあイル? よろしく頼むよ」

「あ、はい。えくと、まずどの辺りから話しましょうか?」

「そうだなあ。じゃあ、イルたちが住む世界情勢なんかから教えてもらいたいんだが?」

俺の意見にイルは得心したように頷いた。

「わかりました。ではご説明いたします」

そうしてイルの異界説明が始まった。

「まず、私たちの世界には大きく分けて二つの世界が存在します」

「“魔界”に“天界”か?」

「え?」

俺の言葉に声をあげたのは隣に座るシロ。

「雅い、知ってるのぉ?」

「あ、いや。漫画なんかだと定石だからさ。ただ言ってみただけだ。つてか当たりか?」

「はい、雅様のおっしゃる通り天界と魔界が隣あわせで存在する。それが私たちの世界です」

俺の取り繕いをイルは間髪入れず言葉を引き継ぐ。

「よくわからないんだが、“世界”ってのはこの今俺たちがいるこの世界で考えると“国”みたいなものですか?」

宏治が疑問を挟み、イルはその疑問に首を振り否定を表す。

「その意見は半分正解で半分はズレです」

イルはメイド服のポケットからメモ帳のようなものを取り出し、

その一枚を破りとる。

そこに何やら書き込むとそれをテーブルのうえに置き、皆から見えるようにする。

メモには三つの円、そしてそのうち二つは線で繋がっていた。

「この一つのみがこの世界、“人間界”とします」

指でさしつづイル。続いて線で繋がった二つの円に指を向ける。

「そして、こちらが“魔界”に“天界”です。こちらの世界は概念では繋がっていると考えてください」

「繋がってる？」

俺の言葉に相槌を打ちつつイルは話を続ける。

「はい。そうですね、連想するならトンネルを思い浮かべて貰えれば良いと思います。誰でも自由に行き来できる、次元という山を超えるトンネル。その名称を“多次元連結時空坑”、通称“ゲート”です」

イルが二つの円を繋ぐ線をペン先でなぞりつつ語る。

「そしてこの二つの世界はいわゆる表裏一体。存在する大陸や種族自体極めて類似しています」

「前にイルが言ってた悪魔と天使、それ自体ほとんど変わらないモノってことか？」

俺の言葉にイルは頷く。

「はい。今雅様があげた例で例えると悪魔も天使もほぼ同一の存在です。人と同じく私たちの世界ではもつともポピュラーな種族です。もつとも双方ならびに人にはない特殊なポテンシャルがあります。

例えば……」

一度イルは言葉を切り、腕を顔の正面まで持ち上げると、軽く指をならす。

“パン”と軽快な音と共にイルの人差し指の先に淡青色の光が現れる。

「一般に“魔術”と呼ばれるそれです。大気中の分子や原子、その

他の要因を制御し任意に加速、停止などさせることにより様々な事象を操る」

イルが軽く指を振ると揺らめいていた蒼光がしばみ、やがて消える。

「人の身でも修行次第では多少の魔術は扱えるでしょうが、私たちはそれを生まれつき使える種族」

イルの言葉に俺、宏治、美咲は思い思いに頷いたり首を傾げたりする中、シロは俺の隣でなせが俯き気味でいた。

「ん、シロ？ どうした、具合でも悪いのか？」

「あ、ううん、何でもないの。ちょっとお腹が冷えただけえ」

シロははにかみつっ言うが、どことなく表情に影が指しているように見えるのは俺の気のせいだろうか？

「この魔術といわれる術。この中には様々ジャンルがあるのですが、そこは説明なくてよろしいでしょうか？」

思考をシロに向けつつあった俺にイルの声が届く。

まあ、今はイルの話に集中することにしよう。

「ああ、そこはいいよ。それよりも住んでいる人たちの雰囲気とか習慣なんか聴けたらいいかな」

「そうだな。ぶっちゃけ猫耳」

言葉と同時に、煩悶の相を浮かべる宏治。恐らく対面の美咲に大事な部分を蹴られたな。

多少同情してやるよ、親友。

南〱無〱

「そうですね？ でも実際その辺りはこの世界と大差ありませんよ。まあ、小さいさかい等もありますが、双方とも平和な世界です」

「え、そうなの？ よく漫画とかだと魔界と天界っていえば敵同士つてのが相場じゃないんですか？」

美咲の発言にイルは微笑しつつ首を振る。

「そんなことはありませんよ美咲様。確かに双方の世界が敵対して

いた時代もありました。この世界でいう“世界大戦”のようなものですね。ですが、この世界同様に私たちの世界もいつでも争っているわけではありません。今は昔の話、そういう事です。出なければ私がシロラディア様に御遣えしているはずありませんから」

「なるほど」

ふむふむ頷く美咲に便乗するように俺も質問をする。

「ところでイルたちの世界ではどれだけの種族がいるんだ？　ちなみに俺が言ってるのは知的な種族。この世界でいう人種って意味合いでだ」

俺の言葉にイルは軽く首を傾げて顎先に指を添える。

「そうですね。大まかな種族では天使と悪魔だけになります」

「え？」

「正確に言えば天使と悪魔の中に様々なカテゴリがあるのです。

例えば“獣人”というカテゴリでもそれは天使か悪魔のどちらかの分類に分けられます」

「つまり、天界にも魔界にも同種族が存在しながらも天使と悪魔に分けられる？　つまり住んでいるところの違いによって分けられる？」

「いえ、正確には同種族ではありませんよ。そういえば初めに言ってますでしたね。私のような天使とシロラディア様のような悪魔とでは基本属性が違うんです」

「基本属性？」

イルは“はい”と頷きつつ説明を口にする。

「シロラディア様のような悪魔は基本属性が“陰”、私のような天使は基本属性が“陽”となります。この属性とはあくまでも悪魔と天使を分けるただの目安と考えてもらって大丈夫です。この世界でいう黒人と白人のような見た目でわかる違いが内面にある。多少誤差はありますがそういったところです」

俺は腕を組みイルの言葉を頭で反芻する。

世界の成り立ち、情勢、天使と悪魔。

イルの説明を反芻するうちに一つ気になることがあった。

「あの、イルさん？ 質問したいんだがいいかな？」

コタツに片腕を入れ何らかの痛みにいまだに耐えているのだろうか。弱々しい様子でもう片腕をあげつつ宏治が声をあげる。

「はい、何でしょうか？」

美咲に視線を移すといかにも“また妙なことを言い出しかけたらそのタマタマを粉碎してスクランブルエッグにするわよん”といった調子で宏治を睨みつけ

「ぐぷっ」

まさかの直角襲撃！ 九十度の鋭角でピンポイント攻撃！

股間に鈍痛を覚えコタツに突っ伏す俺。

うおゝ……、なぜ……。

「……アホなこと考えるからよ、この馬鹿」

突っ伏す俺に冷ややかな視線を投げかけ美咲。時々こいつはエスパ―ではないかと思うのは俺だけか？

「？ どうしたの雅い？」

「雅様？」

唐突にうなだれた俺にシロとイルは疑問を浮かべるがそこは美咲。

「なんでもないわよねゝミヤアゝ？」

「……はい、なんでもありません……」

眼孔に強要を滲ませた美咲にあらがえるわけなく、うなだれる。

「あの……、質問いいですか？」

ふと宏治。痛みも若干収まったのか、真顔でイルに声をかける。それに気づいたイルは宏治に意識を向けなおす。

……スルーされるって結構きついな……。

「はい、何でしょうか宏治様」

俺の思いも虚しく話題はイルと宏治に移っていった。

「すこし本題からずれますが、イルさんは魔界と天界は表裏一体の世界と言いました。そして双方の世界は常に繋がっているとも」

そこで宏治は先ほどイルが円を三つ描いたメモを手取る。

「じゃ、今俺たちがいるこの世界はいつたい何なんですか？」

「え？」

美咲がわずかに疑問の声をあげる。

俺は宏治の思考を読み取った。先ほど思った自身の疑問と宏治の質問はじかに直結する。

「それだ。俺もそれが聴きたかった」

「は？ 二人とも、何言ってるの？」

俺と宏治の言葉に美咲はいかにもチンプンカンプンな相を浮かべる。

イルが答える前に一度整理して見せた方がいいだろう。

「疑問点は二つだ。いいか美咲？ まず一つ、イルが言った…えつと多次元連結時空抗：ゲートだが、これは天界と魔界をじかに繋ぐいわゆるトンネル。そのトンネルという前提として“出口”と“入り口”が必ず必要になる」

「いや、それは当たり前でしょ」

何を当然のこと言ってるの？ 馬鹿にしてる？ ってな表情の美咲だが、俺は言葉を続ける。

「では、シロとイルはどうしてこの世界にいる？」

俺の言葉に数秒きよとした様子でいた美咲だが、ふと何かに気づいたように“あっ！”と声をあげた。

俺は宏治が皆に見せるように揺らすメモを見つつ、先を続けた。

「イルの言葉ではこの世界にはゲートは常時接続している訳ではない。つまり基本的にはこの世界には魔界並びに天界からの干渉はできない事になる」

「それからもう一つ」

宏治が俺の後を引き継ぐように発言する。

「普通世の中には常に二つの事象が存在するものだ。好きなモノと嫌いなモノ、暑さと寒さ、昼と夜、争いと平和。いついかなる時も対象のものがつきまとう。光と影がそうであるように。だけどイルさんの話を聴くかがり、まるでこの世界は」

「第三の世界、ですね」

宏治の言葉を途中で遮り、イルは呟いた。まるでそれ以上は世界そのものを否定し、壊すことになるとも言うように。

「申し訳ありません宏治様。その質問には私ではお答え出来ないのです」

有無を言わせぬイルの口調に俺たちは揃って口をつぐんだ。

「正確には私も知らないだけなのですがね」

イルは恥じるように目を伏せ、呟く。

「知らない、って？」

無意識のうちに紡がれた俺の台詞にイルは律儀にも応えてくれる。

「この世界、一般に人間界と言われますが、私たちの世界では“地界”と呼ばれてます」

“地界”？

「私たちの世界とは根底から成り立ちが違う世界なのです。その理由は今省かしてもらいますが、一つ私が言えることは」

皆一様にイルの言葉に耳を傾ける。

「この世界は存在そのものが“混沌”としている、ということでしょうか」

「……混沌、か」

「あるいは、“矛盾”……でしょうか。私たちの世界とは異質な世界。自然との協調をあえて拒みつつ、自然との協調を果たしている。個でありつつ全を有した不確定でありながら不確定のまま存在を保った世界。それがこの“地界”。私が知っているのはその程度。いえ、もしかしたらそれが全てなのかもしれません」

瞬間、場に沈黙の帳が降りる。得体の知れない重圧に思考が世界の成り立ちへと自然に移っていく。

混沌、矛盾、取り残された第三の世界……、そしてそれは俺たちにもあてはまる。

天位の、担い手

「次に、この世界と天界魔界の行き来についてですが」

イルの言葉に思考が浮上する。

続く疑問に間髪入れず移ってくれたおかげで思考の深みにはまることなく抜け出せたようだ。

気を取り直してイルの言葉に耳を傾ける。

「これについては至極簡単です。はじめに説明したゲートですが、これには二種類あるのです」

「ゲートに、二種類？」

「はい、美咲様。私たちの世界で天界と魔界を繋ぐゲート。仮に甲種ゲートとしますね」

宏治からメモを受け取り、イルは二つの円を繋ぐ線に“甲種”と付け加え、そしてその円二つから今度は細切れに点線を残った円。

イルの言うところの地界に結び、こちらには“乙種”と明記する。

「甲種ゲートが随時接続されているトンネル、陸続きの道だとするなら乙種ゲートは海や空を渡った離島へと続く船や飛行機のようなものです」

「なるほど。つまり、海外みたいなものか？」

「はい。もちろん常時接続している訳ではありませんので、移動にはそれ相応の制約はありますが。誰でも自由に渡れる訳ではありませんし、ゲートが抜ける場所、雅様の言葉を借りれば出口ですが、それもある程度限定しています。ちなみに行き来できる世界はこの地界だけでなく他にも様々あります、例えば次元の狭間に存在する亜空間、そのようなところには希少なレアメタルなどがあります。亜空間にも様々ありまして原始の自然が色濃く残った原生林の存在する」

「ああいいよ、その辺は。ってか情報が多くて頭がパンクしそうだ」

イルに応えながらも、俺は思考をとめてはいなかった。

魔界と天界の成り立ち。多次元連結時空抗、ゲート。基本属性。魔術。そしてこの世界、“地界”が抱える混沌。

せいぜいであらかじめ“知っている”情報に蛇足が加わったようなものではあったが、イルという“異種”からそれらの話を聴けたのは大きい。

まあ、こんなもんか。

「だいたいこんなところでしょうか？ 他に質問は」

「キイイイ〜！」

俺が脳内で思考に相槌を打ち、イルが話の締めとしたとき、その超音波のごとき金切り声と同時にシロはコタツの布団をバスバス叩きはじめた。「お、おいシロ。お前なにやって……」

我等四人、啞然。四対の視線に見守られていたシロだが、ひとしきり布団を殴りつけた後、ポツリと一言。

「……つまらない」

「は？」

「つゝまゝらゝなゝいいいいい！」

その後の大音声！ シロを覗く皆が耳を瞬時に塞ぐ。

「なによこの会話！ オチもなければ始終シリアス路線まっしぐら！ 難しい話のオンパレード！ 私はどこに絡めばいいのよお！」

「お、お前は何を言ってるんだ？」

しどろもどろに俺。はつきり言っただけ込み所がわからない。

「もうこんな会話いやああ！ 私の存在が雅の隣で座ってるだけのマスコットみたいになってるのなんていやああ！ ボケもなければ突っ込みもない放置プレイはいやあああああ！」

.....。

壊れたか？

「あ、あのシロラディア様？ 何も錯乱する事のことでは」

「イルっ！」

「は、はい！」

鋭いシロの一言にイルがビクツと背筋をただす。

「命令っ！ もう難しい話はなし！ 今日はこれから自由時間！」

「えっと、その」

「返事っ！？」

「は、はいっ！」

「よし、そうと決まればゲームしよ美咲い。この間ゲームセン
ターでやったコンボ教えてえ」

「え、ええ。……いいのかな？」

ニパツと笑みつつシロは困惑全開な美咲の手を引き、テレビの前
へ。宏治はと言えば、

「うう、猫耳……」

などと意味の分からない呟きを発しつつ机に突っ伏していた。

何この場の変換？

しかも、年下のシロ相手にイル微妙に涙目だし。

「うう、ホントもうそろそろシロラディア様は就寝時間なのに……
でも自由時間を許可した手前……どうしましょう？」

いや、そんな子犬のような眼差しで見られても困るんですが。
ってかめっちゃくちゃそそるんですが？ ってか誘ってます？

つてか誘ってますね？　よし！　俺の胸に飛び込んでおいでイル
「　ぐふっ」

「ああ、ごめん雅い。ついつい手が空中を滑っちゃったあゝ」
「もう、気をつけなくちゃ駄目よシロ？」

……めっちゃ棒読みだし。

額に激突したゲームソフトのケースを隅に置きつつ、嘆息する俺。

「あ、雅い？　私喉乾いたあ。ミルクちょうだいゝ」

「あ、ミヤア。私コーラね。お願い」

……コイツラ。

「……たくっ。わかったよ」

仕方なく席を立ち、コタツ上のカップをかたずける俺。

あの二人には『自分で持ってこい』などと言っても無駄なだけ。
そんなことは分かりきってるので、反論など口にしない。

「あ、雅様。そういうことは私が」

「いいって、それより。イルは珈琲でいいよな？　……一応宏治も
？」

「一応は余計だ……」

机に伏したまま片手を掲げる宏治。

そんなに知りたかったのか、猫耳？

取り直して台所に向かう俺だが、イルはすっかりあとをついて、
カップを俺の手から取ると流し場で軽く洗う。

「珈琲は私が入れますので雅様はシロラディア様と美咲様の分を御
用意して頂けますか？」

用意もなにもただコップに注ぐだけなのだが。

こういう些細な気遣いがイルらしい。

「わかった。珈琲頼むな」

軽くイルの肩に手を置き、俺は冷蔵庫へと。その瞬間、イルの頬
がうつすら紅に染まった気がしたが、そこは気のせいと割り切って

おこつ。

テレビからは某格闘ゲームのキャラが争う声が届く。この分では今日も遅くまで我が家の宴は終わらないだろう。

「まあ、話が途中で折れたのは心残りだが、みんなが楽しければそれも……いいこと、かな」

俺はグラスを二つ用意し氷を入れ、片側にカルピスの原液にガムシロップを三つほど加え、もう片方にソーダと醤油を一对一の割合で注ぐ。

「楽しく愉快に盛大に、宴を盛り上げることにしますかね」

俺は仲良くゲームに興じる少女二名に所望のモノを運びつつ笑む。若干の親切心と若干の悪意を胸に秘め。

数瞬後に黄色い悲鳴が我が家を震わせることを期待して

「によああああ!？」

「ぎゃああああ!？」

ちゅん 南無

その16： とある初冬のヒルサガリ ー前編ー

「お散歩、お散歩、らんらん」

「おいシロ、引つ張るなつて」

「ふふ、シロラディア様、そんなに急がなくても公園は逃げませんよ」

今日は日曜日。

連日冷え込んできた昨今、久方振りに陽気に恵まれた麗らかな午後。俺とシロ、そしてイルは近場にある自然公園へと時季外れのピクニックにやって来た。

シロは俺の手を引き、すこぶる機嫌がいい。

それというのもつい先日まで天候がかんばしくなく一日中家に籠もっていたからか。もしくは、この抜けるような秋晴れの空に心躍るからか。

「まあー二人とも。せつかくのピクニックなんだよ？ もっと元氣よくいこうよ」。それに公園は待つてくれても時間は待つてはくれないよ」

言葉は不満気味だが、その表情には喜色が窺えた。

自然俺もイルも笑む。

イルは昼食を詰めたバスケットを両手で支えつつ、シロに語りかけた。

「そうですね、シロラディア様。こんなにいい天気なんですもの、時間がもったいないですね」

「うんうん 流石イルはわかってるう。どこかの冴えない貧相男とは大違い」

「おいこら、誰が貧相じゃ、誰が？」

シロの頬を摘んで横に引く。心地よい弾力を伴ってシロの頬が餅

のように伸びる。

「いひあい、なにしゅんのよ」

「いやあ、伸びるねこの餅　ちよいと炙って食べたいな」

シロの頬から指を離すがなぜかその後シロは頬を朱に染める。

ありや？　もしかして少し痛かったか？

「おいシロ、大丈夫か？　軽く抓ったつもりだが」

俺の心配をよそにシロは顔を伏せ、見当違いな事をのたまいやがった。

「もう、雅つてばあ……。食べたいなんて、そういうのは二人っきりの時だけにしてよあ……。……。きゃ」

「おいこらまでアホ娘。お前何言つてんだ！」

俺の言葉を見殺して『きゃっ、雅の馬鹿あ』などとのたまうシロに微妙な敵意を感じつつ、俺は背に突き刺さる視線を感じていた。

「……雅様？」

「いや、イルさん。わかってると思いますが間違ひなく誤解ですよ。ええ、このアホ娘の悪戯です。だから耳朶を引っ張るのはやめち、ちぎれるからああ！」

俺の絶叫は木々に木霊し、やがて消えていった。

「ああ、いい風え　美咲と宏治も来れば良かったのに」

「仕方ないさ。美咲は補習。宏治は用事。皆が皆いつも暇なわけじゃない」

「雅は割と暇してるよねえ」

「ほっとけ」

昼食のサンドイッチを三人でとりつつ、まったりとした午後の時間を満喫していた。

芝生の上にひいたシートに寝そべりながら俺は心地よい日差しに目を細める。

「はい、雅様。珈琲をどうぞ」

「あ、サンキューイル」

上体を起こし、イルから手渡された珈琲を啜る。

何時もながら美味しい珈琲だ。

「ってか、何時も思うんだがブレンド少しずつ変えてあるよな？」

朝のとも味違うし」

「あ、わかりましたか。今回は少し酸味を控えめにしてみたんです。味の方は如何ですか？」

「うん、俺好みだよ。コクと苦味が丁度いい」

イルは“それは良かった”と言うように微笑み、自らも珈琲に口をつける。

俺は珈琲を啜りつつ、眼前の光景を見やる。

『久之森自然公園』

小高い山の中腹にある自然公園だがその敷地は広く、アスレチックなどの遊戯道具や簡易な野外ステージも存在する。

それから山の中腹に建てられたことから景色もよく、今日のような天候だと遠方の山の稜線もはっきり見渡せる。

初冬であるにも関わらず今日は他にもちらほら人を見かける。

この陽気に誘われたか、自然に誘われたか、あるいわ、

「いい景色だよねえ」

いつの間にか隣に寄り添うようにシロがいた。俺と同じように眼前にひろがる雄大な景色に目を向けていた。

そう、この景色だ。

『月森市』

山あい存在する発展途上都市ながら、都心にも比較的近く、今では様々な地域から越してくる者も珍しくない俺の故郷。

緑豊かな都会。そういつても過言ではないだろうか。

「ああ、ホントにな」

シロの言葉に応えながら俺は遠く山稜を眺めていた。

空と地の交わる線。その狭間に遠い世界を思い描く。

どこまでもひろがる空に消えていった過去を想う。

空と山の境界線。

それはまるで先の見えない現在のように不明確でありながらそこにあつて、その先にはさらに壮大な景色がひろがっていることだろう。

俺とシロは揃ってそんな無意義なものを有意義であるように、ただ眺めていた。

「あ、すいません。私どうやら財布を忘れてしまったようです。ちよつと取りに戻ってもよろしいでしょうか？」

俺とシロが揃って景色に埋没していたとき、ふとイルが呟いた。

この場から自宅までは徒歩で三十分前後。別に引き留める用もなく俺は再び寝そべりつつイルに片手を掲げ了解する。

「ああいいよ。あ、ついでになんか炭酸の飲み物も買ってきてもらえないかな？」

「はい、わかりました。シロラディア様はなにかいるものはありませんか？」

「ううん、特にないよあ。気をつけてねイルウ」

「はい、では行ってまいりますね」

言葉と共にイルは立ち上がり、公園を後にするように歩いていった。

隣に控えたシロはイルが用意した魔法瓶のうちの一つからミルクを紙コップに注ぎ込ん、 “んぐんぐ” 飲んでいる。

「しかし、ホントに牛乳好きなのお前。ってなんかポリシーでもあるのか？」

「別にいい。ただ好きなだけだよ。ってか雅炭酸なんかよく飲めるねえ。あんなの口がひりひりするだけじゃん」

「いや、確かにひりひりはするがそれがいいんだろ？」

「私は絶対無理だよ。大体あんなの飲んでると骨がスルスルになつて最後は蛸みたくなっちゃうよお？」

「……まて。確かに酸はカルシウム、つまり骨を溶かす作用があるが炭酸飲料を飲んくれただけではたいして骨には影響ないぞ」

「えっ！？ ホントに！？」

「ああ、虫歯になりやすいかもしれんがそれは歯を磨けば問題ない」

俺の言葉にシロは目を点にして驚いていた。リアクションも取れないほどの新事実ってこともないだろうに。

「う、嘘。私、炭酸を飲みすぎると身体の骨がボロボロになって動くだけで骨が折れるって……」

……イタイイタイ病か。あれは公害が原因だ。

「うわあゝ！？ なんか地味に騙された！ そりゃ子供の時は炭酸たくさん飲んでたし、だからってそれはないよあゝ！？」

あゝ、つまりあれか。炭酸ばっか飲んでたために大人に釘を刺されたシロは素直にも騙されたってわけか。

「ううゝ、骨を丈夫にするには牛乳がいいって言うからずっと飲んでたのにいゝ……」

……わあお。そんでもってミルク主食娘の出来上がりか。

「まあ、牛乳が骨、ってか身体にいいってのはホントだから安心しろ。しかし、昔は炭酸飲めたのに今は駄目なのか？」

「うん……。なんか口にあわなくなつた……」

うわあゝ、味覚まで変えちゃった。恐るべし扇動者！

「そうか。しかし誰だよそんなガセトリビアを教え込んだの？」

その言葉と同時に、場が凍ったような錯覚に陥った。

勿論そんなことはない。柔らかな日差しも、頬を撫でる風も、穏やかな時間も決して凍りはしない。

ただ、シロの行動が、止まった。

「シロ？ ……あ」

呼びかけてから気づいた。そんなことをシロに言う人物。そんな存在はシロに極めて親しい人物に限られ、尚且つそこまでシロが信じていた人物となると

「私の……お父様」

「……お父様が教えてくれたの」

私の言葉に雅は口をつぐんだ。

雅にはこの話題に繋げる気は毛頭なかったんだろう。でも、自然会話はそこで途切れた。

私のなかで過去の出来事が僅かに思い描かれる。

それはとても痛くて、辛くて、苦しくて、やせ我慢するように私は雅の服の袖をギュツと握りしめた。

「……」

決してお父様が悪い訳ではない。要因は別にある。

悪いのは私だ。

かつてに傷ついて、かつてに苦しんで、かつてに意地をはって、かつてに逃げだした。

「……なあ、シロ？」

助けを乞うことも出来たはずなのに、私はそれをしなかった。自分かつてに苦痛を押し込んで、つまらない意地で見栄をはって……、私は……、独りよがりで……、みんな私が悪いんだ……。

自責はとまらない。思考に悪質な嘲笑がこびりつく。

頭が痛み、嘲笑とともに悪辣な言葉が鎖のように私を縛りつける。

……やだよお……、助けて……

「え」

思考に引き込まれていた意識がふと感じた温もりによって浮上した。

すごく暖かくて、優しくて、とっても安らぐ。

そんな温もり。

「……雅い？」

気がつくのと隣にいた雅が私の肩に腕をまわして抱き締めていた。壊れモノを扱うように、それでいながら力強く。私を抱き締めていた。

「なにも、言わなくていいシロ。お前は悪くなんかないんだ」
そう言ってまわした腕に雅は少し力を加えた。

背中に雅の鼓動を感じ、雅の気配を身体で感じる。

そこで私はたと気づく。頬に流れる雫に。

私は今まで独りで泣いてきた。いつでも、どこでも、たった独りで泣いてきた。

誰にも甘えたくなくて。誰にも弱みを見せたくなくて。誰にも、自分を見せたくなくて……。

でも、今は

「雅っ！」

雅の腕をはがし、振り返って私は雅に抱きついていていた。

自分でも考えてした行動じゃない。

ただ、雅に甘えたかった。子供っぽいつて自分でも思っけど……、雅に甘えたかった。

「わ、私……、私……うう……」

「いいんだよシロ。俺がそばにいてやる。辛ければ泣いていいだ。

……そんなワガママもありだよ」

雅は穏やかな表情で私の頭を撫でてくれた。涙で歪んだ視界でも、この人はいつでも“私”を見てくれていた。

堰を切ったように溢れた涙は雅の服に染み込んでいった。

時々通りかかった人の話し声も耳に届いたがそれすらどうでもよかった。

雅がそばにいてくれる。私を無条件で受け入れてくれた人がこんなにも近くにいてくれる。

シロラディア ルシファーとしてじゃない、この人はありのまま

の“私”を受けとめてくれた。

私は泣きじゃくった。人目もはばからず、子供らしく、みっともなく、ありのままに泣きじゃくった。

雅に抱きすくめられながら

「落ち着いたか？」

「……うん、ごめんねいきなり」

その後、私はしばらく泣いた。自分では結構時間がたっちゃったと思ってたけど実際はさほどのことではなかった。

今私は雅に頭を預けるようにもたれて座っている。雅もそんな私を支えるように腕の位置を変えつつ隣で座っていた。

そんな些細な気遣いがたまらなく嬉しかったりする。

「……イルには黙っててね」

「わかってるって。それにしても少し驚いたぞ？ まさかいきなり泣きつかれるとは思わなかった。まるで俺が泣かせたみたいで周りの目がちよつと痛かったぞ」

「半分は雅のせいでしょう。おかげで嫌なこと思い出しちゃったじゃない」

「いやいや、骨の話を出したのはお前だろ？ 俺のせいにするなっ
て」

「うわあゝ、責任転嫁だあゝ。これだから雅は十円ハゲなんだよ」

「……さてこら、十代半ばの青少年にハゲは禁句だ。第一俺のどこ

が十円ハゲなんだよ？」

「あ、もしかして気づいてない？ 昨日の夜のうちに私が十円ハゲの呪いを」

「なんだその地味かつ最低な呪いはあ！？ おま、そんなのを！？」
頭をわしゃわしゃかきむしる雅を横目に私はひっそり笑み、目尻を拭う。

そんな呪いあるわけなのに。それに気づいているくせにこうやって私の軽口につき合ってくれる。

心の中で私は雅に最大の親愛を込めて感謝する。言葉も念話も使わない、伝わることのないコトバ。

ありがとう雅。

それでも、伝わって欲しいな。

それと同時に、別の思考も生まれた。

雅は“私”のこと見捨てたりしない。

私のことを大事に思ってくれているこの人はどこまでも優しくどこまでも強い人。

だったら全部話した方が雅にも、私にもいいんじゃないかな。
私を大切に思ってくれているこの人になら。

でも

それでも

私は怖い。

「……………」

雅に見捨てられること、雅に嫌われること、雅に役立たずだと思われること、雅に………拒絶されること。

それだけは嫌。

ないとわかりつつも、雅に拒絶されることを考えると震えがとまらなくなる。

もしかしたら私の独りよがりかもしれない。もしかしたら私の勝手な思い込みかもしれない。もしかしたら私の勝手な自惚れかもしれない。

……そう思うと、怖くて言えない。

やっと会えた。飾らない自分でも大切にしてくれる人。

私はこの人のそばにいられるだけでいい。たとえ雅のそばにいる私が仮初めの私でも

「それでいいの？」

ふいに頭に響いた声に私は身震いした。

「だ、誰え！？」

驚いてあたりを見渡すが、身近にいるのは雅のみ。その雅でさえ私以上に驚いた表情で目を点にしている。

「ちょ、いきなり大声だしてどうした？　びつくりしたぞ」

「え、あ、え？」

なんだろう今の？　念話みたいな感じで聞こえたけど、雅の声じやなかったし。でも、よく知ってるような……。

「おいシロ。ちょっと疲れてるんじゃないのか？　横になつたらどうだ？」

頭に添えていた手をシートの上に戻し、私を気遣ってくれる雅。

あの声がなんなのか、それはわからない。でも

それでいいの？

「……………いいわけ、ないよお」

「？ シロ？」

ホントはわかってる。私は体のいい詭弁で逃げているだけ。いつも親切にしてくれている雅に甘えきっているだけ。

でも、ホントにそれでいいの？

私のことを考えてくれる雅に、私はいつまで偽ったままの私でいるの？

私を助けてくれた雅にいつまで嘘の自分でいるの？

私はそんなの、

「……………イヤだよお」

雅に嫌われるより、雅に嘘を突き通すことの方がずっと辛い。

私を信じてくれる雅を信じないで自分を偽っていた方がずっと痛い。

そう、気づいた。

「…………馬鹿だなあ、ホント」

熱い雫がポタポタと再び頬を濡らす。

でも、こんどの涙はさっきとは別。これは覚悟の涙。

だから、私は

「お、おいシ」

「雅い、聴いて…………」

精一杯、笑顔を浮かべる。負けないように、雅に私を知ってもら

うように。

嘘をつくのはここまで。

その後は雅次第。

雅からは逃げたくないから。雅からだけは、絶対に、逃げたくないから。

だから、言うね？

ホントの“私”を。

「雅い、私は」

「っ、シロツ！」

私が言葉を発する寸前、雅は私の言葉を遮り突然私を突き飛ばした。

何が起きたのか理解できなかった。

力一杯突き飛ばされたはずなのに腹部に痛みも感じず、雅は私を突き飛ばした姿勢のまま私をおもんぱかのように見ている。

まるでスローモーションの世界のような光景、だが私が芝生のうえに着地するのを待ち受けたように時は劇的な変化をみせた。

刹那、耳をつんざく轟音とともに雅がいたシート下の地面が大爆発を起こした。

芝生も土も石もイルが用意したバスケットも、あたりにまき散らすように四散する。

隕石の落下に匹敵する轟音と土煙の中、その爆心地にいた雅もその例外ではなく

「つあ、がはっ」

衝撃によって吹き飛ばされた雅は、私の目前に飛来した。

衝撃の威力は凄まじく、叩きつけられた雅の着地点は芝生がめくれ、その下の土まで僅かに陥没していた。

「……み、みや……みや、び？」

意味がわからない。

混乱した頭のまま無意識のうちに私は雅の頭部に触れていた。

砂塵と芝生に汚れた衣服、肌。そのところどころが時間の経過とともに朱に染まりだす。

我知らず指先が震えだし、寒気を覚える。

雅は身動き一つしない。

やがて震えは指先から腕、腕から身体、全身へと行き渡る。

「 み みや 、 ねえ みや ? 」

うつ伏せに倒れた雅の頭に触れているうち、私は異変に気づく。手が妙に生ぬるい。

心地よく感じた雅の体温ではない。不快極まりなく、ぬめりのある液体状の十二力。

私は雅の頭から手を離し、おずおずと自らの掌を確認する。

「いっや」

私が見たもの、それは赤。掌全体を包むおびただし赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤。

雅の……血

「……いやあああああああああつ!!!?」

その17： とある初冬のヒルサガリ 中編

「み 雅いつ！ お願い起きてっ！ しっかりしてよ！ 雅ってば！？」

私は怒鳴るように雅の名を叫び、肩を揺する。両の掌にこびりついた血が雅の肩にしみ、染みをつくる。

迷走し、困惑した自我。

私は狂ったように雅を呼んだ。

頭に浮かぶ最悪の可能性。

雅の 死……

「 雅ってばあああっ！？」

「……っう、…あまり怒鳴るなよな……」

！

「み、雅い？」

私の声に反応するように雅はゆっくりと両腕をたて、身を起こした。

苦痛を滲ませ、額から血を流しながらも命の危機に瀕してるようにはまったく見えない。

「雅い、血が……」

「問題ないさ。出血の割には傷は浅い。それより……」

雅は服の袖で額を拭くと私を庇うように背をむけ、ある一点を凝視する。

「 え？ 」

雅が視線をむけた先。そこに女性が一人、こちらを窺うように見ていた。

マントのようないたるところにベルトを括りつけた黒いコートを肩に羽織るように掛け、髪をポニーテールのように結いあげた二十代半ばの女性。

いつからそこにいたのか。悠然と当然のようにその場に存在していた女性は無機質な視線ををこちらにむけている。

そこで私は妙なことに気づく。

初冬とはいえ、陽気に恵まれた今日。辺りにはちらほら人がいたはずだ。

それなのに、まったく人の気配がしない。

大人はもちろん、つい先ほどまで耳にしていた子どもたち歓声も。

いや、それどころか鳥の囀りさえも。

事ここに至って私は気づいた。

地面の爆発も、人が見あたらない意味も、この女性の目的も、そしてその正体も

「シロラディア ルシファーだな？」

女性が呟くように言う。

質問というより事実を事実のままに告げるような感情起伏のない平坦な声音に私は恐怖を隠すように雅の背にしがみつく。

「主の命^{めい}でな。悪いが消えてもらうぞ」

私を狙いにきた 刺客。

「ひっ」

これまで私はいくらかの理由で狙われることが多々あった。今度も多分おなじ。でも心にはびこる恐怖に慣れることはけしてない。

それに

「護衛役の女をわざわざ遠ざけるとは。こちらとしては極めてありがたい」

私が狙われる時、そばにはいつもイルがいた。そのたび、イルは身を挺して私を守ってくれた。

自分が傷つくことをいとわず。

そのイルが今は……いない。

油断しきっていた。狙われてるって自覚はあったけど、いつしかそれらは頭の隅に追いやられていた。

私は狙われてる。それはつまり、そばにいてくれていた雅にも危害が及ぶ可能性があることを知っていたはずなのに！？

そして雅は実際傷ついた。あの女性の“魔術”をともに受けて、どうして雅が女性の攻撃に気づいたのかはわからない。でも雅は私を庇い、イル同様に傷ついた。

ワタシノセイデ。

「……い、いや」

雅の身体に目がうつる。

埃と土と芝生の緑と滲む朱。

つい漏れた言葉につられるように私は雅の背から手を離し、一歩後ずさる。

私のせいで雅が傷ついた？ 私のせいで雅が傷ついた？ 私のせいで雅が傷ついた！？ ワタシノセイデミヤビガ

私の内情を知ってか知らずか、女性は悠然と一歩踏みだした。

だが、私の身体は動かない。自らの命の危機だというのに、まったく動けない。

私の心を縛る恐怖。命を狙う女性の存在、イルがない不安、そしてなにより……雅に嫌われること。

例えばような底冷えのする寒気を感じ、女性が二歩目を踏みしめたときだった。

「俺の存在を無視してくれるなよ」

雅は片膝をつき、右腕を翼のように広げ、私を女性から隠すように毅然と言葉を発した。

「み、やび？」

その態度に私は困惑する。

あきらかな危機的状況。重い空気がしめす緊迫した雰囲気。そんな気配が充満するこの場。

どんなに鈍感な生き物でも見過ごすこと叶わないそんな気配に雅が気づかないはずはない。

それなのにどうして？

女性が歩みを止め、まさに今雅に気づいたように彼に視線をむける。

「なんだ人間、まだ生きていたのか。まあいい、邪魔だ失せろ」

まるでどうでもいいモノを見るように　いや、実際どうでもいいのだろう。

彼女は間違いなく異種。私と同じ魔界か天界の住人、“使徒”だ。そして雅はこの世界の住人、“人間”。その頭脳を科学に特化した、非力で脆弱な人類。

いちどは事なきを得たとはいえ、彼女にとってはいつでも消すことが可能。

そんな人物相手に女性が感慨を浮かべることはないだろう、なにせ私の命を狙いにきた刺客だ。

なのに、雅は、まるで平時のように構えている。

「お前こそなんだ。いきなり前触れもなく襲ってきてあまつさえシ口を消す？　寝言は寝てから言え」

雅は再度額を拭い不遜な態度を崩さない。

私を守り、傷つきながらも私を背中に庇い、使徒を前に退かない。

「……貴様、現状を理解しているのか？　今すぐ消えるなら見逃してやる。早々に失せろ」

「理解しているさ。理由はわからないがあんたはシロを狙ってる。そしてシロはあんたを恐れてる。だったら俺の答えは一つ。シロはやらせない」

普通の人間なら間違いなくパニックに陥っているだろう事態。事実、こういったことに幾度か巻き込まれた私でも冷静な思考でなどいられない。なんとか取り乱さずにすんでいるのは、私の前に雅の背中があるからか。

どうしてこの人はこんなに優しいんだろう。どうしてこの人はこんなに強いんだろう。どうして……私の為にここまでしてくれるんだろう。

「……………最後の警告だ。今すぐ」
「いやだね」

女性の言葉を皆まで聴かずに雅は意見を通す。

その言葉が引き金となったのか、瞬間場の雰囲気急変する。

得体の知れない重圧。肌が粟立ち、呼吸が苦しくなる。

大気中の元素が女性のもとに集積していくのを感じる。

集積、改変、発現。魔術の基本三大要素。

女性は魔術を遣う気だ。それもこれほどまであきらかな元素の集積。先ほどまでの魔術とは規模が違う。

「大地の楔、その縛鎖を荒ぶる怒りにて絶ち、猛りの爪牙でもって汝が贅を食らいつくせ……！」

女性の周囲に満ちる元素が詠唱によって改変されていく。

雅は相変わず私に背を向けたまま動く素振りをみせない。

女性がどういった魔術を遣うかは予想出来ないが、恐らくは地精^{ノーム}の呪文^{スペル}。

正面からその一撃を受けては雅が無事にすむはずがない。

女性が右手を天に振りかざし、それを地面に叩きつけると同時に黄色の魔術陣が展開した。

「消え失せる……ノームスペル、ガイアクラッシュ！」

女性が叩きつけた地面が扇状型に爆発をおこしながらもの凄いスピードで向かってくる。

源泉が地面から湧き出るように迫る地の暴動に私は無我夢中で雅の隣に飛び出し、意識を集中して雷を創りだすと感情のまま叫びながらそれを解放する。

「ダメエエエツ！？」

私の叫びに呼応したように解放された黒雷は女性が発現した魔術とぶつかりあい、更なる大爆発を引きおこす。

だが、私が放った黒雷でも女性の魔術を完全に相殺することはかなわず、地の衝撃波は多少勢いを衰えつつも私と雅のもとに襲いくる。

それをどこか冷静な目で私は眺めていた。

何も考えられずに舞いあがる砂塵や石やいくらかの人工物を見やる。

いつしか、私の手は雅の手に添えられていた。私がそうしたのか、あるいは雅がそうしたのか、それすら考えられず、私はただ漠然と呆然と放心していた。

ああ、私こんなところで死んじゃうんだ。せめて、雅には全部知ってもらいたかったな。

ホント、私のバカ。

雅い、ごめんね。そしてありがとう。私を最後までそばにおいてくれ

「アホなこと言っな。この猫娘が」

！

頭の中によく知った声が響く。

不遜ながら信頼に満ちた、雅の声。

雅の顔を覗くと彼はうつすらとはにかんだ。少し悲しそうで、それでいて私を気遣うように。

「みや」

声をかけようとした私を雅は握った片手を引き寄せて私の頭を撫でる。

衝撃はもう目前。それなのに雅は私を視線から外さずに念話を続けた。

「はじめに謝っておくよシロ。お前が今まで一緒にいた雅は俺であって俺じゃない。騙すつもりなんかなかったが、それでもお前には“人間”としての“雅”を見ていてほしかった」

「なにを、言ってる、の……？」

「だけどそれもここまでだ。ったく、ホントにイルの言ってた通りだなあ」

私の疑問の声に反応せず雅は言葉を続けた。

それでも私はどこことなく嫌な予感がした。まるで雅がどこか遠くに行っちゃうような、まるで雅が“雅”でなくなっちゃうような。

あまりにも時がゆっくりと進んでいくように感じる。

そんな中、雅は私の頭から掌を引き私身体を後ろに数歩離れさせると、至極ゆったりとした動作で正面、地の暴動に向かいあう。

「雅っ！？」

我にかえった私は雅の名を呼んだ。まるでそこに彼がいることを

自らに確認するように、“雅”という存在を繋ぎ止めるように。

「……シロ」

雅が呟く。轟音のためうまく聞き取れないが間違いなく私の名を呼んだ。

「俺はお前を守る。　　例えばお前が俺を嫌っても」

そう言っただけ雅は鉄製の短い棒のようなモノをとりだし、それを勢いよく振り抜いた。

俺は手に握った鉄製の特殊警棒“飛牙”を抜き放つ。

後戻りは出来ない道。イルにシロが狙われていることを聞いた時から覚悟は決めていた。

だが、覚悟を決めていたことと、それに対して後悔しないかは別物。

「……くだらない、か」

自分の内心に心底嫌気がさす。

もう、飽きるほど後悔はしてきた。後悔に悔やむことすら幾度となくしてきた。

だったら、今更一つ増えるのなんてわけではない。

まして、シロを救えるのなら。

でも、もし、一つ願えるなら

「嫌われたくは、ないな……」

ここからは俺の見せ場、“雅”としてではなく“妃雅”としての
人外の技、天位の使い手、“妃雅”としての。

穏やかな水面みなものような静寂を胸中に抱き、俺は襲いくる暴状に横
一文字に飛牙をふる。

「 “天位、天詠流、風絶ち” 」

守るべきを守る為、俺は剣を抜いた。

その17： とある初冬のヒルサガリ 〵中編〵（後書き）

こんにちは、朔夜 楓です（＾－＾；

はじめに言っておきたいことが……、『これのどこがコメディやねん！？』的な突っ込みはノーサンキュなので無しにしてください、ええ。

いえ、自分でも感じてますよ（＾－＾；だからこそ自分に『これのどこがコメディやねん！？』って呆れるほど突っ込んでるんです、はい。

まあ、何はともあれ次回ついに雅の力がお目にかかれます。一体天位とは何なのか？ 雅は何を恐れているのか？ そしてシロはどうなるのか？

若干シリアスマっしぐらな近頃ですが、決してネタ切れではアリマセンヨ？ ただ今はこういったジョウキョウなダゲですカラ。A H A H A H A。

.....。

それは置いといて

（＊。。ノノ）

次号、その18： とある初冬のヒルサガリ 〵後編〵

雅の思い、シロの願いが交錯する緊迫の十八話。どうぞお見逃しく！

b コメディ×ダークな『我が家のアクマ！？』。よろしく（＊＾－＾）

「うわあゝ、ごまかしたあゝ。ホントはネタ切れ近いくせにいゝ」
「ったく、そんなだからいつまでたっても三流なんだよ」
「よっ！ この駄目作者あゝ」

その18： とある初冬のヒルサガリ ー後編ー

女性の魔術が破砕音を撒き散らして襲いくる刹那、私は反射的に目を閉じた。

地の濁流というような衝撃に身構える。無論、そのような行動などまったくの無意味だろう。

一瞬後には雅も私も、その濁流に呑み込まれ、きっと助からない。雅は私を守るって言うてくれたけど、それは無理な話。

ただの人間でしかない雅には為すすべはない。

私をつんざく爆音に耳を押さえ、座り込む。来たるべき死を確信しながら。

そして、爆音は雅を突き抜け私のもとへと

「……………え？」

不思議なことが起こった。紛れもなくこちらに接近していた地の波動が…………私を通り過ぎた。

爆音は依然として響いていたが、それはもう私の後方。

いくら待っても私の座り込む地面に異変は起こらず、ありのままの大地のまま、芝生の感触がスカート越しに伝わってくるのみ。

恐る恐る目をあげた私の瞳に飛び込んだモノ、それは雅の背中。

鉄製の棒のようなモノを握り、正面を見据えたまま微動だにしない。

私の瞳は自然に雅の足元に移る。

そこで私は声にならない驚愕を感じた。

雅がたつ大地。まるで雅そのものが道を分ける岩ともいうように、女性が放った魔術はその一点、雅の目下を避けるように左右に分か

たれていた。

いや、正確には少し違う。本来こちらに向かうはずであった暴状が雅の目下で……消されていた。

私はその光景に戸惑うことはおろか、声をだすこともままならずに雅の背を見つめていた。

「な、なんだと？」

風にのって眩きが耳につく。雅の背中の中へ刺さる微分子や元素を集積じられないといった表情を浮かべて佇んでいた。

「地精呪文、ノームスペルか。大気に存在する微分子や元素を集積し、それを詠唱で改変し振動を加えて地に叩きつけることにより、大地と共鳴させ爆発的な振動で地面を隆起させて相手を攻撃する。そんなところか？」

雅の言葉に女性も、私でさえ驚きを浮かべる。

雅は間違いなくただの人だ。その雅が魔術の基本三大要素を交えながら冷静に女性の魔術原理を説く。

相次ぐ不可思議な状況に私の頭はすでに思慮の余地はなかった。

「……貴様、何者だ。術師の類、ではないな。一切の詠唱もなく私の術を破った。いったい何をした？」

女性の言うとおりだ。雅が何らかの術師であるなら女性の魔術をある程度防ぐことは可能だろう。

だが、それはありえない。使徒のなかには詠唱を行わずに元素を改変できるほどの術者も多々いるが、人の身でそれほど高度な術を扱える者は稀と聴く。

それ以前に雅は元素を集積させてすらいない。その状態では魔術など発動できない。

私の知らない、“雅”。

雅と暮らして二カ月ほどたつが、こんな一面を見ることになる

は思いも寄らなかった。

「風絶ち」

ぼつりと呟いた雅の言葉に女性は警戒を孕んだ戸惑いを浮かべた。

「風……絶ち？」

「……簡単な理屈だ。お前たちが扱う魔術とは主に大気中を漂う元素を遣う。水分、熱量、微分子、気圧、要因は様々だが総てに共通することがある」

雅は一旦言葉をきり、手に持った鉄棒をクルクルと器用に掌で回しはじめる。

「お前たちはそれらを、詠唱によって任意に加速、振動、停止、加圧、減圧させ様々な奇跡を起こす。そこで問題だ」

雅は鉄棒の回転をとめ、自らの肩を叩くようにトントンとならしっている。

「……もし、その改変された元素をもとの無害な大気に還すことが可能なら？」

「なっ!？」

女性の幾分上擦ったような驚きが漏れる。

ここまで寡黙であった女性はまるで雅が積年の敵と言わんとする鋭さで叱責を飛ばす。

「ふざけるな貴様っ！ 我々使徒ならともかく、そんな真似元素を操ることの叶わないただの人間である貴様に出来るはずが」

「ただ”の人間ならな」

そう、囁かれたような雅の声には私は不安に似たナニ力を感じた。

雅は肩をリズミカルに叩いていた鉄棒を、急に止めると流れるよ

うな動作で坂手に持ち換え、腰を捻って女性目掛けて振りきった。

「天詠流、奥伝、月下風鳥っ！」

鉄棒が振り切られた瞬間に私は風を感じた。柔らかく暖かい、まだ秋を感じさせる風。だが、それを感じたのおそらく私だけ。

雅が振り抜いた先の芝生が猛烈な勢いで空を舞いながら女性へと迫るのが見えた。

不可視の幻獣が女性へと食らいつこうとした矢先。

「っ！」

とつさに横に飛ぶ女性。不可視の幻獣はその勢いを留めることなく女性の身体を掠めるように突き進み、その後方にあった大木に直撃する。

耳障りな音響を轟かせ、大木はその中程から弾け飛ぶように折れた。

衝撃と大木が倒れ伏した余韻が辺りの木々の梢を揺らし、柔らかな風が私の髪を撫でる。

「……風の、刃だと？ 馬鹿な……、貴様はいつたい……」

女性が今度こそ驚きに目を剥く。

はつきりとわかるほど雅は風の刃を放った。ただし魔術のような要素を一切必要とせずに。

「シルフスペル、ではない。詠唱以前に元素を不要とする魔術などありえん。いったい貴様……まさか っ!？」

「シロラディア様っ!？」

女性が今度は後方に飛び退く。

それと同時に、彼女の足元を追うようにクレーター状の弾痕が複数生まれた。

「イルッ!？」

どこから飛んできたのかイルはメイド服の裾を翻し、私のそばに降りたつ。銃口を女性に向けたまま私に声をかける。

「申し訳ありません。結界の穴を見つけるのに時間が掛かりました。お怪我はありませんか？」

「わ、私は大丈夫、けど……、雅、が……」

イルは銃口はそのままに一度私に視線だけむけると、今度は雅を窺うように視線を前に戻す。

「……………遣ったんですね、雅。“天位”を」

「……………」

「すみません。私がもう少し辺りに気を張っていれば」

「……………お互い様だよ。俺も直前に気づいたくらいだ。それにどうせいつかはバレることだっただろうさ」

イルは雅の言葉にこたえず、しばらくした後、

「……………すみません」

そう言い、銃口を下げて後ずさるように私の隣に控えた。

「イ、イル、ちよつ、と？ 何か知ってるの？ ねえイルッ!？」

私は理解しがたい感情のままイルに掴みかかっていた。イルのメイド服を引き寄せ怒鳴り散らすように言葉を紡ぐ。

「ねえってば!？ いったい何なのお!？ 何よこれ! 教えてよおっ!？」

自分でも何が知りたいのかよくわからないまま、私はイルに食ってかかっていた。

立て続けに起きた事象に頭がついていかない。そんなパニック状態の私を嘲笑うように女性が呟いた一言が、私の動きをとめた。

「天……………位、だと？」

女性の呟き。そのうちの僅かな単語が場に閑寂を呼んだ。

天位。そういえば先ほどイルも雅に言った。

『遣ったんですね、雅。天位を』、と。

雅に対してその言葉を、言った。

私たち異界の住人である使徒なら誰でも知っているであろうその単語。

それを、雅を指して、イルは紡いだ。

「う、嘘……」

その単語は非現実的な響きをもって私のなかを反芻していく。

嘘だ、雅が天位の？　だって天位って

「天位。正式名称を“天上位系列対異種繊維特化武術”。人にありながら人ならざるモノと戦うために生まれたとされる禁伎。お前たち異種を消すために特化した外法。俺はその遣い手だ」

内心の動揺を置き去りに、雅は再び手の内の鉄棒を回転させながら語る。

他ならぬ雅の口から、天位という言葉が発せられたことに、私も女性も驚きを隠せない。

「馬鹿、な。天位の遣い手など今の世にいるなど」

「勝手な思いこみだな。時代が巡ろうと、どれだけ月日が流れようと、俺たちはただ在るように在る。呪われた血は途切れることなく」

鉄棒の回転をとめ、左半身を前にだし鉄棒の切っ先を後方にむけて両手で柄を握る雅。

その動きは素人目に見ても洗練された一切の隙のない振る舞いだった。

これがあの雅？　いつもおちゃらけた雰囲気で、宏治と馬鹿やったり、美咲に蹴られたり、イルとお茶飲んだり、私を受け入れてくれた、あの“雅”？

「イル、ここは俺がやるからシロは頼む。こいつ、少なくとも雑魚じゃない……」

「ええ、承知してます。こちらはお任せください」

イルが応え、左の銃をエプロンの内にしまうと、その手で私を制するように数歩後ろにさがる。

それに伴い、私の脚も自然にさがる

「そうか、だから護衛の女はあれほど安易に場を離れたのか。不可解だったが、これが答えか」

いつの間にか女性は初めに聴いた平坦な声音を取り戻していた。だが、その顔は警戒を色濃く示している。

つい先ほどまでの無関心な顔色では決してない。

「天位、か。いいだろう。当初の予定とは変わってしまったが、私は私の目的を果たすのみ」

女性が元素の集積をはじめめる。掲げた掌から既に黄色の粒子を浮かべ、詠唱を紡いで発現へと移行する。

「迷える原初の意志よ、我が意に従い、仮初めの肉を纏て具現せよ！ ノームスperl、クレイドール！」

女性の詠唱に導かれ、地に突かれた女性の地面に魔法陣が展開するや、あちこちの地面が隆起し人型の土人形が無数に姿をあらわす。土偶のような簡略された目と口をもった不出来な木偶人形のような姿。

異音のような呻きを漏らしながら雅を幣睨するように身体を震わせる様子はいつか見たホラー映画のゾンビを思わせる。

「かつての世界を跨ぐ大戦。貧弱な人間たちのなかで唯一我々使徒と拮抗し異界の軍勢から地界を守護したモノの末裔。伝説とまで呼ばれる天位。その実力、見せてもらおうぞっ！」

女性の言葉と同時に、ドールが行動をおこす。

その鈍重な見掛けとは裏腹に実に身軽な動きで雅へと襲い掛かる。

「なめるなよっ」

素早い身のこなしで雅もまた、行動を開始した。

左右前方から襲いくる四体のドール。皆一様に体当たり気味に突進してくる。

その腕が振り上げられ俺にむけて叩きつけようとする。

石などが付加された腕はそれ自体が凶器だ。

天位の遣い手とはいえ、肉体は生身。そんなものをマトモに受けるわけにはいかない。

数本の腕が叩きつけられる寸前、俺はそのうちの一本を踏み台に宙を舞う。

「ふっ！」

不出来な数体のゴーレムが前のめりになり、その腕が地に食い込むのを中空から眺めつつ、飛牙を掌で縦横無尽に回転させ付近に真空の“線”を形成し、その真空に対して飛牙を振る。

「月下風鳥式、嵐華っ！」

それにより、疾く無数の風の刃にゴーレムは切り刻まれ、文字通り砂の山と化す。

俺は中空で身を捻り着地するが、それを待っていたように目前の地面が隆起し地から新たなゴーレムが姿をあらわした。

不格好な長腕をデタラメに振り回すゴーレム。その背後には二体

のゴーレムが迫り来るのが窺える。

二、三その腕をかわした後、両腕を垂直に掲げる目前のゴーレム。

恐らくそれを叩きつけようとするつもりだろう。

だが、その隙は見逃せない。

「はっ！」

がら空きになった懷に横蹴りを叩き込む。全体重を乗せた天位の遣い手である俺の蹴りを最大効果で受けたゴーレムは腹部を瓦解させながら後方に迫っていたうちの一体を巻き込んで崩れ倒れ伏した。

「オオオオオッ」

無事な一体は相も変わらずこちらに向かってくる。

「やれやれ、だな」

残るはその一体のみ。俺は襲いくるその哀れなマリオネットを見据え、腰溜めに飛牙を構える。まるで居合い抜きのように。

「オオオオオオオオオッ」

自らの凶器である腕を間合いに入るやいなや、俺に向けて横一閃に振るうゴーレム。

俺はその腕を相手の懷に踏み込んでかわすと同時、踏み込みの勢いもそのままに腰を捻り、逆袈裟気味にゴーレムを切り裂く。

「武伝、弧月っ！」

小爆発のような音響を響かせながらゴーレムは真つ二つに避ける。神速に迫る残像すら残さない飛牙の一撃。その体軀が崩れるまえに俺はその上半身を蹴り込み、女にむけて飛ばす。

「ちっ！？」

迫りくるそのつぶてに女は手をかざす。その腕がゴーレムの半身に触れる寸前、その体軀は砂の塵と化し女の身体を傷つける事なく通り過ぎた。

「っ、貴様っ！？」

「こんな木偶人形で俺を潰す気か？ 笑わせるなっ！」

自然体で女に向き合い語る俺に忌々しげな声音で女は呟く。

「その腕に持った鉄棍を高速ではしらせ、真空を生み出してるのか。それを再び振り抜く事により風の刃を飛ばす。剣の天上武術、風の天位の担い手かつ」

ゴーレムは既に全排除した。女は魔術を発現せんと今一度元素を集積しようとする。

「させるかあつ！」

俺は瞬時に掌で飛牙を一回転させ、女へと目掛けて飛びかかる。

足元の地と風を蹴り込み、人間の跳躍を明らかに越える飛翔で女との距離を一息に詰める。

「なっ！？」

「はっ！」

着地せずに飛びかかったままに女に跳び蹴りを放つ。

女はいつの間に仕掛けたのか不可視のシールドを張っていたのだろつ。

俺の蹴りは女の体躯の寸先で発現した白銀の魔法陣にふせがれていた。

「戯けがっ！」

女が黄色の魔法陣を展開しようと詠唱を継続する。

あたりの地面がその詠唱に呼応するように鳴動しはじめた。

だが

「お前がなっ」

「っ！？」

地に降りたつ俺はその場で左足を軸に旋回し、白銀の魔法陣にむけて飛牙を鋭く振るう。

「月下風鳥参式っ、裂牙っ！」

飛牙が纏った風圧を刃とせず零距离で叩きつける、参式裂牙。

その衝撃で白銀の魔法陣は吹き飛び、その背後に控えていた女も風圧を受けて後方に倒れ伏す。

「うつ……」

「動くなよ。女を痛めつけるのはこれでも趣味じゃないんだ」

俺は二転三転して俺と同様に芝生と土に汚れた女に飛牙を突きつけた。

女は屈辱に顔を歪め、俺を睨みつける。

裂牙の衝撃は並ではない。防御陣を張ったところでもうマトモに戦闘などできないだろう。

自分でもわかるほど冷めた瞳を女にむけ、俺は最後通帳とばかりに宣告する。

「チェックメイトだ」

雅が女性に鉄棒を突きつけ、幕を引く。

実に呆気なく、そして完璧な決着。ものの数分で雅は女性を地に伏した。

「流石、ですね」

傍らのイルが呟く。

女性に魔術を発現させず、洗練された動きで勝利を収めた雅の姿を私は呆然と眺めていた。

「……くっ」

「妙な真似はするなよ。お前には然るべき贖いをしてもらう」

そう言う雅の声は酷く冷めていた。暖かさに満ちた普段の雅とは異質な、声。

私はイルの腕にすがるようにしがみつく。

「シロラディア様？」

「イル……、ホントにアレは雅なの……？」

私の呟きにイルは声を詰まらせるように顔をしかめた。
私は言葉を続ける。

「今の雅、なんか怖い……」

暖かき瞳も、優しい声も、今の雅にはない。

私を受け入れてくれた雅の面影が、この場には存在しなかった。
私はそれが、怖かった。

「……私の知らない雅が、怖かった。」

そんな私の手をそのままに、イルは正面を見据えたまま呟く。

「もうお気づきかと思いますが、私は雅の正体に気づいていました」
「……」

天位、それは私たち使徒にとっては禁忌そのもの。

なぜなら、その存在そのモノが私たち異界の民にとっては抜き身の刃にひとしいから。

息を吸うように使徒を、異分子を排除、抹殺、抹消する存在。そう教わった。

イルは無言の私をよそに言葉を続ける。

「シロラディア様は今雅の事を“怖い”、そう仰いましたね。無理ありません。私たち使徒には存在そのモノが凶器である天位。恥ずかしながら私もはじめは雅に対して嫌悪感を抱いてました。でも

……」

一呼吸沈黙をおき、イルは言葉を紡いでいく。

「……雅は、決して凶器の塊なんかではありませんよ、シロラディア様。あの人は、決して私たちに害を与えたりしません。あの人は優しい人です」

「イル？」

そう言い、視線を私に向けるイルはどこか悲しそうで、それでいて慈愛を讃えた瞳をしていた。

その瞳に触発されるように私の頭に雅の笑みがよぎる。不器用な
はにかみを浮かべた曖昧な笑み。

私を守ると言ってくれた、雅の淋しそうな微笑。
そんな彼を私は一時的とはいえ、怖いなんて

「雅い……」

私を庇った際の傷と土に汚れた彼の背中を見つめる。

そこに立つのは紛れもなく私を受け入れてくれた彼の背中。私に
どう思われようと私を守ろうとしてくれる優しい人。

そんな彼の背中を見つめていた私の視界はいつしか滲んでいた。
暖かい滴が頬を濡らす。

「雅っ！？」

ふと感慨に耽っていた私の意識がイルの鋭い声で現実に引き戻さ
れた。

同時にイルは私の正面に踏み出し障壁を張り、雅は後方に跳び退
く。

瞬後、どこからともなく飛来した無数の氷の槍が無節操に辺りの
地面に突き刺さる。

その数など把握すらできない氷槍が横殴りの豪雨のようにイルが
展開した障壁に叩きつけられた。

「っ！？」

大気の僅かな鳴動を感じ、すんでの所で女から飛牙をひき、後方
に跳ぶ。

前方、女の背後に位置する鬱蒼と茂った林の中から高速で飛来す
る氷槍があるものは避け、あるものは飛牙で叩き落とし距離をおく。
着地と同時に、飛牙を縦横に走らせ、真空を形成してそれを飛ばす。

「っ、嵐華っ！」

風の刃に破碎された氷の刃がガラスのように舞い散る。
暴威は数刻で過ぎ去った。

そしてその暴威と立ち替わるようにひとりの男がいつのまにか女の傍らに控えていた。

シャツからスーツまで漆黒のタキシードに身を包み、そのうえに女と同じようなコートを羽織っている若齡の紳士。

その彼は人差し指で眼鏡の位置を正しつつ、隙を伺わせない立ち振る舞いで女へと声を掛けた。

「してやられたなシルビィナ。よもやあの人間が天位の使い方とは、な」

「くっ」

しゃがみこみ、女の肩に腕を回して男は女を支え立たせた。

「一時撤退だ。これでは分が悪い」

「っ！ 何を言っている！？ 対象を目前にしておめおめ逃げられるか！？」

「少し落ち着け。こちらは二人、相手も二人。しかしその怪我では君は満足に戦えまい。しかも敵には天位がいる。不確定要素が未知数の敵に策なしでこれ以上の戦闘は不利でしかない」

「しかしっ！？」

「しかし？ なんだい？」

「……くっ」

男の言葉に女はうなだられ唇を噛み締める。男の正論に沈黙する女をよそに男はこちらに瞳を移す。

「さて、お聴きした通りです。我々は失礼させて頂きます」

「……突然現れておいて勝手な言いぐさだな。俺がはいそうですかだとも言うと思うか？」

「もちろん思いません。ですが、互いに無為無策で争っても無意味ではありませんか？」

不適な微笑と同時、男は指を鳴らす。

すると男の周囲に固体化したテニスボールほどの空気結晶が複数浮かびあがる。

それらは意志を宿したように男たちを軸に不規則に公転運動を行う。

ふとそれらすべてが空中で静止し、瞬間、すべての氷塊が高速で撃ちだされた。

俺ではなく　イル、ひいてはシロのもとへと。

「っ、イルっ!？」

迫る氷のつぶてを正面にイルは障壁を展開し微動だにしない。

だが、駄目だ!　あの氷塊はやばい!

直感でそう悟った俺は声を張りあげる。

「駄目だっ!　避けるイルっ!」

「っ!？」

イルも気づいたのだろう。そのつぶてが纏う凶悪な雰囲気。イルはシロを抱え、横に飛ぶ。だが氷塊は目前に迫っていた。

障壁に触れた氷塊はそれら一つ一つが爆薬であるように炸裂する。その質量に似合わせ爆発をおこし、連鎖的に炸裂しては青白い煙を漂わせる。

いや、違う。煙ではなく水蒸気か!?

イルのもとへと駆け寄ろうとした俺は背後に迫る気配を感じ、イル同様横に飛ぶ。

俺がいた位置に撃ち込まれた氷塊が爆発する。舞い上がる芝生や土から目を守りつつ、男のもとへと視線をむける。

「そう慌てなくていい。あの侍従はあの程度で死ぬようなやわじゃないよ。それより、自分の事を考えた方がいい」

男の周囲には先ほどと同じような氷塊が舞う。それも、先ほどの数を凌駕するほどの数多の氷塊が。

「……氷のつぶてが着弾すると同時に熱量を急速に戻して氷塊を水

蒸気爆発させる魔術か」

「御名答、クリスタルエクスプロード。それがこの術法」

男が再び指を鳴らす。それに反応し、氷塊は空中で静止する。
レベルキャンセル

無詠唱、何らかの動作をよういて元素を使役する高位術法。
ハイスベル

それでいながらあれだけの威力を秘めた魔術を扱う使徒。

先ほどの女とはレベルが違う。

「もしまだやりあうというならお相手します。私たちが不利であることはわかりありませんが。しかし、貴方たちもけして優位であるとは限りませんよ。戦いとは常に攻める側にイニシアチブがあります。私たちの目的はあの少女の抹殺。そのためには多少の犠牲など些細なことです」

淡々と、それこそ己自身さえ捨て駒のように扱う様子に俺は舌を打つ。

この男は本気だろう。

もし俺が戦闘を続けようものなら間違いなく防御をかなぐり捨ててシロを狙う。そんな確信があった。

行動を起こせない俺に男は優雅に一礼し、語る。

「申し遅れました。僕はエディル、それから彼女はシルビナ。貴方の守護する少女の抹殺を請負し者」

「……名を明かすか、随分余裕なんだな」

「名を明かしたところで我々の身元が漏洩する心配はありませんので問題ありません」

男が三度指を鳴らすと男たちの周囲を浮遊する氷塊が再度螺旋運動を開始する。その余波で冷えた風が芝生を揺らす。

「貴方の名、教えて貰えませんか？」

「……雅」

吹き荒れる嵐の中心からの声に端的に俺は答える。

徐々に希薄になりゆく男たちの気配。

「雅、ですか。いい名ですね。いずれまたお会いすることになるでしょう。では、その時まで」

その気配が急速に遠のき、

「失礼」

氷の嵐もろとも消失した。

時は宵闇の頃。俺はイルと二人並び茜色の残照の余韻が残る住宅街の一角をシロを背負い、進んでいた。

敵が立ち去ったたその後、男が作成したであろう結界が消滅した公園は戦闘の跡形もなく日ごろの日常的な様相であった。

結界とはすなわち事象を限定した次元の異なる異空間を生成する術。

その内部での戦闘による痕跡も結界が開放されれば現実にはあまり影響しない。

無論、戦闘そのものをおこなった当事者は除外されるが。

俺はイルとシロのもとに駆け寄った。

男の言の通りイルは多少の負傷に目を瞑ればまったく問題なかった。ところどころに朱色を滲ませたメイド服が痛ましくはあったが。

シロはというとイルの腕の中で気を失っていた。

イルの話では爆発の衝撃で軽い脳震盪におこしたそうだ。

実際そのようで、健やかな寝顔のまま規則正しい呼吸を繰り返していた。

俺はそんなシロを背負い、戦闘の余韻のない戦場からイルと帰路に就いた。

余談だが今イルは私服姿である。なんでもメイド服は戦闘服も兼ねているらしく、魔術で着脱が自在なモノらしい。

俺はといえば負傷はイルに治してもらったが失った服の繊維は再生されていないため、あちこちすす汚れた衣服のままイルを斜め後ろに従え、互いに無言のまま歩を進める。

自宅まで半分をきった頃か、ふと俺は重い口を開いた。

「なあイル」

「……はい」

間をあけて呟かれたイルの言にはいささか悲痛を感じた。

俺は言葉を紡ぐ。

「俺、やっぱりシロを怖がらせちゃったかな」

わざわざ聴くまでもないことだ。シロが異界の者である以上、間違はなく俺を嫌悪するだろう。それになんにせよ俺は天位の力を振るった。シロの目前で異界の者を痛めつけた。

天位は使徒をほふるために特化した武術。いや、正確に言えばその本質は“術”と言っべきだろう。

分子や原子を操るのではなく、自然現象を任意で科学的に具現する。

魔術にくらべて応用範囲は狭いが、決して非力ではない魔性の技。人にして人にあらず者。

そんな俺を、シロは

「……もし、シロが俺を嫌ったら、イルはシロを連れ帰るのか？」
イルを振り返り、俺は歩をとめる。

イルは俺の瞳を正面から見据えていた。彼女の瞳には猜疑や嫌悪は見えない。その瞳に写るもの、その感情は俺には伺い知ることはできなかった。

ややしてイルは言葉を選ぶように呟く。

「正直、それはわかりません。確かにシロラディア様が貴方を嫌ってしまつたら私はシロラディア様を連れ帰ります。ですが、今のシロラディア様が御自宅に帰りたい状態ではないこともわかります。この地界に留まるにはそれ相応の条件が必要です。ですので……それはシロラディア様次第です」

俺はイルから視線を外し、空を仰ぐ。

ちらほらと星が瞬き始めた東の空に真円の満月が浮かんでいた。

でも、とイルは囁く。

「私はシロラディア様が貴方を嫌うとは思いません。シロラディア様を守るために傷つき、自己を捨ててまで守ろうとする貴方の事を私はそう思います」

「それは、希望的観測だろ」

「はい、ですが私はそう信じますよ。貴方は違つんですか？」

「……………」

イルは俺の横を通り過ぎ、家路への道を進みだす。

「先に帰宅してますね。夕飯の支度をしておきます」

そう言い残し、イルは立ち去る。その気配を背後に感じながら俺は硬直したように微動だにしなかった。

やがてイルの気配が曲がり角を過ぎ、消えた頃を見計らつて俺は“彼女”に声を掛けた。

「……………いつまで狸寝入りしてるつもりだ猫娘」

「……………」

わずかな呻きが漏れる。

そうと知らなければ単なる寝言のたぐいだとおもわれるが俺はそうとは思わない。

「イルだって気づいていたぞ。わざわざさきに行ってくれたんだ。いい加減起きろ」

「……………」

俺の言葉を完全に聞き流す猫娘。どうやら狸寝入りを決め込むらしい。

……………。

「……………」

「……………」

「……………」チビ、ミニmam、ヘビー級、背後霊、妖怪、腐女子
「……………」

「ふざけんな馬鹿ああっ！」

俺の言葉に激昂し、こめかみを両の拳で圧壊せんとする小娘。

こ、こいつ！ どこにこんなパワーがああ！？

「まっ！？ チョークチョーク！？ 頭蓋がミシミシってますよ小娘さんっ！」

「空気よめこのアホオオツ！」

「お前が寝たふりしてるからだろうがっ！」

しばらくしてシロの攻撃はおさまった。

その後には気まずい沈黙。シロも俺も何も語らず時間だけが静かに過ぎていく。

いつまでもこうしているわけにもいかず、俺は歩きだそうと一歩踏み出した時、それを待ったようにシロがぼつりと呟いた。

「……どうして、教えてくれなかったの？」

私は知らず知らずのうちに呟いていた。

「……天位、の事か？」

「……うん」

雅は踏み出した脚をとめ、私にこたえる。

聴くべきことでもないことだ。それはわかってる。

だれしも隠していたことの一つや二つはある。そういう私だって雅に話してないことなんて山のようにある。

それなのに 私は身勝手な質問を雅にした。

「……すまない」

雅の表情は見えないけど多分辛そうな顔をしている。

私に隠していたことにたいしてほんとうに申し訳ないと思っている。

私は、雅を苦しめてるのかな……。

「……」

下手な言い訳なんて一切しない雅。それなのに私はどうだろう。

一時、私は彼に嫌悪を抱いた。

天位は悪逆非道な人外。使徒とみるや無差別無情に排除すると教わった人間。

それなのにこの人は私を……。

雅の首に回した腕には彼の体温が宿る。

それは暖かく、その温もりにいつまでも触れていたいと願ってしまふ。

私の視界はまた知らず知らずのうちに滲んでいた。
こんな私を、天位という“だけ”で彼を少しでも軽蔑した私を、

いまだに背負ってくれる。

それが、申し訳なくて……私は泣いた。

「シロ？」

漏れた嗚咽を不審に思ったのか、肩越しに雅は振りかえる。

私は雅の首筋に顔を押しつけた。雅の顔が見れない。

「……私、天位って……う、聴いたとき雅のこと……ぐすっ……怖いって思った……」

「……」

雅は何も言わず私の言葉に耳を傾けていた。

「雅は私を助けてくれてるのに……ぐすっ、なのに……」

「シロ……」

気を使うような雅の声。雅を信じようって決めたはずなのにホントに私の馬鹿……。

雅とイルの会話、全部聴いてた。雅が私が嫌ってるんじゃないかって聴いたこと、私が連れ戻されるかもしれないこと、イルが雅のこと信頼してること。

なのに……、私は

「離れたく……ないよお……」

言葉は自然に漏れた。

妥協も打算も作為もない言葉。私はそう願った。

その言葉を境に会話は途切れた。雅は何も言わず、私の嗚咽が漏れる以外は遠くを走り去る車の音だけ。

沈痛な沈黙がしばらく続いていたが、やがて雅は歩を進みだした。そして

「……泣くなよ、馬鹿」

「……ぐすっ」

「……黙ってて悪かったな」

「う……ぐすっ、謝らないでよお……。私が……悪いんだから……」

嘆息し、雅は空に視線を向ける。

「お前だって別に悪いわけじゃないだろ。なるようになったただだよ。……だから、泣くな」

「だって……」

肩越しに雅がまた振りかえる。こんどは私も視線を背けることなく彼の瞳に相對した。

「ようするにどっちもどっちだったって事だ。だから、変な負い目を感じるなって。ってか、これじゃまた俺が泣かせたみたいじゃないか……」

やれやれ、というように雅は首をふる。

その様子がなんでかおかしくて私は少し笑った。

「……何だよ？ 笑うようなことしてないぞ」

「だって、今度も半分以上は雅のせいじゃない。女の子を泣かせるなんて最低え」

「……安心しろ。俺はお前を“奇怪な”娘としてみてるから最低ではな」

「だから空気よめええっ！」

「うおおおお！？ や、やめりよおお！？」

雅の首を絞める絞める。

不可解な言語で抗議している雅の首を締めつけているうち、私は笑みを浮かべる。

他愛のない悪戯の応酬、私たちの日常。

いつしかそれが私にとってかけがえのないものとなっていた。

雅が何者だろうと関係ない。

この人は私をホントの意味で護ってくれる、大切な人。そのどこに不都合があるというのだろうか。

「ちよつ、いいはげんやめれえつ!？」

「馬鹿ドジカスの鈍感朴念仁っ! 下僕に分際でええっ!」

「まだ、続くによおお!？」

雅が私の足から腕を外し首もとの私の腕を緩めにかかる。

必然、私は雅の首にぶらさがるかたちになった。

「ちよつ、いきなり離さないでよお!」

「どの口がのたまう! いつまで絞める気だこら!」

宙ぶらりんで雅に密着するような体制が辛く、更に雅の首を絞める絞める。

「ぐうおおお!」

「落ちるう! 早く支えなさい!」

「お、俺も……落ちそう……」

すったもんだの騒ぎを過ぎ、やっとこさ落ち着きを取り戻していった私は、また雅の背に揺られ雅の家に向かっていった。

「……ってか、雅って天位なのになんでそんなに打たれ弱いのよ」

「アホ、天位つたって身体は人間だぞ。生物的な急所を狙われたら辛いものは辛い」

「ふゝん、イジルぶんには申し分ないわけかあ」

「……勘弁してください」

すっかりペースを取り戻した私たちは、いつもと変わらず我が家へと向かっている。

そう、“我が家”なのだ。私にとってもうあの場所は。

雅がいて、私がいて、イルがいて、時々美咲や宏治がやってくる“我が家”。

それはちよつぱり気恥ずかしくて、でもすごく嬉しくて、暖かい気持ちになる。

私は雅の首に少し力を込めてしがみついた。

「なあ、シロ？」

「　　な、なにっ？」

しがみついた拍子に雅が声をかけてきたので私は少しのけぞってしまった。

な、なんだろう？　もしかしてしがみついたのいけなかった？

……　　もしや胸ネタを私にだす気？　“お前身体を押しつけるなよ、堅いぞこの洗濯板”とか？

……。

「　　ぐっえ！？」

「この唐変木がああ！？」

「ちよっ！？　何すんだ馬鹿！？」

首筋を全力でつねりこんだ私に雅が声を荒げてこたえる。

「誰が洗濯板だあっ！？」

「はあ？」

肩越しに振りむいた雅は当惑したような表情をみせた。

「何言ってるんだよ？　俺はちよつと聴きたいことがあったただけぞ。いつ俺がそんなこと言ったよ？」

「……え？」

至極もつともな雅の言葉。

そもそもさっきのは私の勝手な想像であるが、雅なら言いかねない　　もとい、間違いなく言うだろうという確信にちかいほどリアルに想像出来てしまったための行動であったのだが……………。

「……………で、何かな雅い？」

「……お前、あきらかに誤魔化そうとしてるだろお？」

「何を言ってるかわからないにゃ」

猜疑心満載の雅に私は意図して笑みをむけ、話題を必死に流そうとする。

やがて盛大な溜め息を吐き、雅は呟いた。

「お前さあ、あの女に俺が吹き飛ばされる寸前なんか言おうとしてたけど、あれ何だったんだ？」

「え？」

雅に聴かれ私は思いだした。刺客の襲来で記憶が混乱してたため今まで忘れていた事。

すべてを私は雅に打ち明けるつもりでいた。自分の“すべて”を。

それが思わぬかたちで雅の秘密を知ってしまうことになり、動転してしまつたままうやむやになってしまうところであつた。

「……うん、あのね雅い……」

「ん？」

雅の首筋に顔を埋め私は言葉を紡ぐ。

「……私、ね。雅に全部……家出した理由^{わけ}、話そうと思つたんだ……」

「……そっか」

自分でも声に抑揚がないのがわかる。それに雅も気づいたのだろう。いくらか声のトーンを落とし、相槌をうつ。

「それだけじゃないの。……私自身のことも、言つつもりだったの……。雅には知って欲しかったから……。私が……どんな存在なのか……」

「え、それってどういう」

「でもさあっ！」

私は意識して声を明る気に張りあげる。

いつまでもこんな暗い雰囲気やだもん。雅は不思議がるだろうけど、でも今は

「なんかさあ、タイミング逃しちゃった気がするから今はやめとくことにしたあ」

「……はあ！？」

素っ頓狂な声をあげる雅。私は異にかえさず続ける。

「だってさあ、考えてみたら雅も私に天位のこと秘密にしてたわけでしょ。その秘密がバレたあとに私のこと話したってインパクトにかけるじゃん？ 私はそんなのやだもん」

「そ、そんな理由かよ……」

あきれたように首を振る雅。歩をとめず、振り返りもせずには彼は進む。

「私の秘密はねえそんじょそこらの秘密とは格が違うのよ格があ！
？ だからこそこう場面と演出には凝らないといけないわけなのよ
お」

「はいはいはいわかりました、よ。わあ、そりやあすごいなあ」
「何よその気のない返事はあ！？ いつとくけどねえ、雅がおもわず『どひやあああつ！』って言うっちゃうほど凄いんだからねえっ！
？」

「どひやああ、そりや驚いた」

「今言うなああつ！」

拳で雅の肩をポカポカ叩く私。

雅は笑い声を漏らし、私は不満を口にする。

やがて雅の背に揺られているうち眠気に襲われ、肩たたきをやめた私は雅の首に再び腕をまわす。

「……ねえ、雅い？」

「ん？ どうした？」

心地よいまどろみのなかで私は雅を呼ぶ。

虚勢を常に張ってきた私。でも雅にはそんな私を見て欲しくなかった。

意地はもう張りたくない。このまどろみに身を任せて、私は雅に言った。

「……いつか、言うから……」

「……」

「今は……言えないけど……逃避だって、わかってるけど……近いうちに絶対言うから……私自身のこと……」

「シロ……」

柔らかな風が私の髪を撫でていく。雅がおこしたような秋の名残を残した暖かくも切ない風が。

「勝手な言いぐさだけど、さあ……。それまで、待ってくれないかなあ……？」

まどろみに揺られている私に、雅は声を陽気にしてこたえる。

「……わかったよ。その時はせいぜい『どひゃあああ』って驚いてやる。……焦らないで話せるときに話してくれればいい」

何の建前もない、雅の言葉。

その言葉と態度に私がどれだけ救われたか。彼は多分気づいていない。

雅は待ってくれている。私が、私自身の問題とたちあえるまで、焦らないで待ってくれている。

なんのつてもない地界で最初に知りあえた人が、雅でほんとに良かった。

今はこの幸せに身を委ね、彼の背に揺られていることの奇跡を噛み締めよう。

「……うん、ありがとう雅い……」

私は雅にしがみつき瞳を閉じる。

いよいよ眠気に屈しそうな私の頭に今日の出来事が思い浮かぶ。

雅とイル、二人と出掛けた公園。そこでの雅とのやりとり。刺客に襲われ、雅が傷つき、彼が天位の遣い手だと知ったときのこと、そして
ん？

そこで私は、はたと妙なことに気づく。無意識に今日の出来事が頭に再生されていくうち、なぜか引かかる部分があったのだ。それを意識した私の頭からは眠気が消え、変わりに疑惑やら疑念やら不信やらそういった感情で満たされていた。

「あのださあ？　ちょっと気になることがあるんだけどいいかな」
「まだなんかあるのか？　なんだよ」

「……イルが助けに来たときのことだけださあ、なんで雅のこと“呼び捨て”にしていたの？」
「……え」

雅の歩みがとまる。
私は内心の心情を隠して続ける。

「しかもなんか二人ともそれが当たり前みたいにしてるし、ちょっとおかしくない？」

停止したままの雅。正面をむいたままの彼の表情は知れないが、振れている彼の身体は小刻みに震えていた。

「……な、なあシロ？　なにを言ってるかよくわからない」
「あんた、イルになんかなんかやましいことしたんじゃない」

雅の言葉を遮り、語気を強め私は言う。

私の言葉に雅はあたふたしながら『あ、いや、その……』などとのたまう。

その動揺した態度に、私に知れては不利なことを隠していると確信した。

肌が泡立ち、雅の髪がパチパチと静電気で浮きあがる。その気配を察したのか、雅がビクツと硬直した。

「……あ、あのさ。別にやましいことなんかないぞ？ 第一イルが俺を呼び捨てにしたっていいだろ？ だから」

「零距离の攻撃はいくら天位でもかわせないよねえ」
「ひっ！？」

上擦った声を漏らす雅。

なんかわからないけどすぐム力つく！

私の知らないところで雅とイルは名前で呼びあっていた、たったそれだけなのに無性に腹がたっていた。

「ちよつ、まてまてシロ！？ お前怒ってるのかっ！？ いったいなんでっ」

「余計なことのたまうと今すぐウェルダン風にこんがりと焼きあげるよあ？ ……その件については家についてからイルもあわせてじいじいっくり聴かせて貰うからあ」

「……………うわあ、帰りたくねえ……………」
うなだれつつ、歩みを再開する雅。

そんな様子の雅を後ろから眺めつつ不満を抱えながらも私は小さく笑む。

雅に出会い一変した私の世界。

笑い、泣き、怒り、迷い、戸惑い、嘆き、そしてともに享受できる喜びの満ちた世界。

やっと見つけた自分の在処^{あじか}。

私は……、いま“ここ”にいる私は

「……………大好きだよ、雅い……………」

きつと世界一幸せ。

すでに闇夜が栄えた家路。私たちは真円の月の放つ燐光に照らされた道をひた進む。

風に乗ることのない私の心中の呟きは、いつまでも私の心のうちで響いていた。

その19：学園テンゴク

「そっか、バレたかあ。んじゃ、俺のことも話したんだな？」

「ああ、一応な。じゃないとフェアじゃないし」

俺は休日明けの通学路を宏治と並び、歩いていた。

先日起きた件の襲撃騒くだんぎを話終えた俺は欠伸をかみ殺し、目を擦りながら傍らの宏治の言葉にこたえた。

「しかし、よく受け入れてくれたなシロちゃん。俺たちがどんな存在か知って側にいるやつなんてよほどの物好きか、危機感の足りてない愚か者か、あるいは……かなり信頼されてない限り無理だろ。同じ人間でも、な」

「……ああ。でも、あいつは“天位”ってモノをまだあまり知らないでいる。全部知ったとき……それでもそばにいるとは、限らないさ」

「それは……そうだな……」

中空に栄える太陽に目を細め、見慣れた通学路はいつもと変わらず簡素な佇まいであった。

「なあ雅。こんなこと言うのもどうかとは思っけど、さ」

「ん？」

流れる雲を視線で追っていた俺に宏治。

「……美咲には言わなくていいのかよ、ホントに……」

「……」

ここまで話せばわかるように宏治もまた天位の使い手だ。

俺とは系統の異なる天位の使い手にして、知る限り俺と同等の力を有する魔性の人外。

そして、美咲もまた……天位の担い手。
だが

「……シロとイルには美咲のことは話してない。あくまでも一般人で通してある。俺達が簡単に天位の手解きをした、その程度に話した。……アイツは、関係ない……」

「だけどっ
」

「宏治」

瞳を宏治にむける。真剣に、睨みをきかせるように眼光を強めて。

「……アイツは巻き込むべきじゃない。……お前だって、わかってるんだろ？」

「……ああ、でも
」

「恨まれるかもしれない、妬まれるかもしれない、もしかしたら一生嫌われるかもしれない。けど……」

俺は一拍置き、呼吸を落ち着け、続ける。

「……それでも、けして許されなくても、俺たちはアイツを守り通さなければいけないんだ。……アイツを……」

「……そう、だな」

若干の不服を飲み込み、肯定をかえす宏治。

無論、俺だってできるなら美咲にも、勿論シロにも事実を話して

やりたい。

でも……、駄目なんだ……。

胸中の苛立ちを抑え、俺たちはひた進む。

しばらくそんな状態であった俺たちだが、学舎を視界にとらえた頃か、そんな沈痛な雰囲気を払拭するように宏治がことさら明るい調子で声をかけてきた。

「まあ、そういった話はさておき。ここだけの話だけどさ
「ん？」

口元を“ニヒヒ”というように歪め、宏治。

「ぶっちゃけ、シロちゃんとはどこまでいったん」

みなまで言わず、宏治の後頭部を全力で蹴りつける俺。

「うおっ！？ てめえいきなりなにしゃがるっ！？」

俺の蹴りを紙一重でかわし、不服を漏らす宏治は勢いのままに声を荒げた。

「こっちの台詞だこの野郎。あ？ なにかてめえ、俺をなんだと思
つてるんだ？」

「ん？ なにを隠す必要があるんだよ、このペド野郎？」

ニツコリ悪意満天の表情で語る宏治に、心で荒れ狂う冬の日本海のような怒りの荒波を必死に抑え、努めて冷静にさを促す。

「……ずいぶん毒舌だな。なんか俺に怨みでもあるのかお前？」

「ねえ訳ねえだろおっ！」

俺の言葉に吼える宏治。

野獣は猛るままに続ける。

「突如押しかけてきた美少女は悪魔っこのお嬢様。しかも同棲することとなり、ひかれるように美人で清楚なメイドさんもお前ん家に在中。容姿は学内トップクラスの美咲とは友人関係。そして俺とい

う二枚目で二ヒルな男友達だ！？　ありえねええっ！　どこのギヤルゲーの主人公だ貴様あぁっ！？　俺にその幸運をよこせええっ！」

シャウトする宏治。辺りの同校らしい学生がチラチラこちらを怪訝な瞳で伺っているのだが、それすら今の宏治には関係ないらしい。傍目から見て俺も同類に見られてるんだらうか？

.....。

宏治の現状に冷静さを取り戻した俺はこれ以上不審者の仲間入りは勘弁と思い、足早にその場をはなれようとしたが
「どこに行く気だ、このペド野郎……？」

暗い瞳で呪いの言葉のように呟き、俺の肩を掴む宏治。

「……離せ悪鬼。俺まで変な目で見られる」

お前は“奇異”というより“不審者”を見るような眼差しに気づかんのか！？

「離すかぁゝ、この果報モノめえゝ、憎いゝ……、お前が憎いゝゝ！」

つかみかかるところか腕を首にまわし、すりよるように囁く宏治はまさにホラー映画の亡霊のようだ。

こんな朝からホラーはいらん！　ってか

「男にひつつかれても嬉しくない！　離れるこの馬鹿！　それに俺はお前みたいに口リじゃない！」

言い放ち、若干影を差した宏治を強引に振りほどくと、瞬時に宏治はいつもの調子にもどる。

「なんだよ、あんな美少女と一緒にいてなにもないのかよホントに

？ あ、もしかしてイルさんのほうか？ そういえばお前メイド好きだったもんなあ。んで、どこまで
「黙れ色魔っ！」

俺の蹴りをまたしてもひらりと交わし、軽薄な笑顔を浮かべる宏治。

「ケチケチすんなよ。教えてくれてもいいいだろ？ 俺とお前の仲じやないかあ。ん、それともなにか？ 俺にも言えんほどコトが進んで……」

「んな訳あるかああ！ 第一シロもイルもただの同居人だ。だいたイルはともかくシロなんてお子ちゃまだろ！？ 手なんかだせるか馬鹿っ！」

「ほうほう、イルさんはチエツク済みつと」

懐からメモ帳を取りだし、なにやら書き込む宏治。その態度と対応に憎しみにいた憤慨を抱き、俺はおもむろに携帯を取りだし操作する。

「ん、なにしてんだ雅？」

「ああいや、お前昨日隣街の女の子と遊んでたよな？ 散歩に誘ったときそんなこと言ってたし」

「ああ？ まあそうだけど。それがどうしたよ」

前日の襲撃前、宏治や美咲も公園に誘った際の宏治の言葉を思い、問いかける俺に宏治は返答する。

ほどなく携帯の操作を終えた俺は作為的に笑顔をかたち造り、宏治に言い放つ。

「いやなに、お前の可愛い可愛い少夜ちゃんに報告するのを忘れててな。思いだしたついでに報告を」

「ふざけんな馬鹿あああつ！？」

途端、掴みかかり怒鳴るように叫ぶ宏治。

先ほどまでの余裕に満ちた態度はどこへやら、狼狽をあらわに詰め寄る。

「お、おおお前え！ 冗談だよなあっ！？ たんなる冗句だよなあっ！？」

「はっはっは。どうした宏治？ そんなに慌ててらしくないぞ」

「てめえ……、マジか。マジで言いやがったのかああっ！？」

宏治と打って変わり余裕満載の俺に恐慌状態の宏治。

立場が逆転したところでほそく笑み、俺は呟く。

「おいおい、宏治。何を慌ててるんだ？ 別に慌てる必要なんかないだろ。別に“やましい”ところなんかあるわけないだろうし、第一“相思相愛”の“恋人”がいながら別の女の子と遊んでも問題ないじゃないか？ 俺はあくまであの子の友人として言っただけ」

「黙れっ！ 頼むから黙れっ！？」

依然として狼狽もあらわな宏治。

ちなみに少夜ちゃんとは前述の通り宏治の恋人である少女の名だ。清楚で純真、可憐で清廉。そんな言葉がぴったりあてはまる少女である。

宏治の家に同居しており、俺や美咲とも友人でもある生粋の大和撫子。

どうしてそんな少女がこんなどうしようもない鬼畜 げふげふっ、失礼。“悪友”を一途に思っているのかは……まあ、おいおい話すこととなるだろう。

まあ、宏治に言わせるなら独占欲が強く嫉妬深いのがたまに傷らしいが、俺からすればそんなのは可愛いうちだと思う。

……………所詮他人事ですから

ややして一人唸っている宏治をよそに軽快なポップ調のメロディ
ーが鳴る。

宏治の携帯の着信音だ。

「っ!？」

ビクツと身体を硬直させる宏治。俺は笑みを張りつかせたままに
断罪人の如く囁く。

「でないのか？」

「……う、うるせえ……、でるさ、ああでるさっ!」

そうは言ったものの、取りだした携帯の液晶を睨んだままかな
か通話ボタンに指をかけない宏治。

そんな様子をしばらく続けているが、電話が鳴りやむ気配は一切
ない。

………うん、ここはひとつ

「もしもし？」

「てめええええっ! なにしてくれやがりますかあああっ!？」

宏治の手から携帯をひったくり通話状態にして耳に押しあてる俺
にけたたましい声で宏治は怒鳴り散らす。

必死で携帯を取りあげようとする宏治の腕をかいくぐる俺に、電
話のむこうから声がかかる。

「『あら? その声は雅さんですか?』」

「ああ、久し ぶり、少 夜ちゃん。ごめんねえ、宏治
のやつなかなかなくて さっ、すぐ変わるから」

「『そうでしたか。すみません、お願いいたします。あ、また今度
遊びにいらしてくださいね。いい茶葉を頂いたのでご馳走いたしま
す』」

「あはは、ありがとう。是非と もいかせてもらっよ。そのとき
は美味しいお菓子も持って くよ」

「『ふふ、お待ちしてますわ』」

宏治の追撃　文字通り蹴り、貫手、肘鉄、掌打などの攻撃をかわしながら、なんとも日常的な会話を楽しむ。

「返せつ、返しやがれえっ！」

なんとも雰囲気ぶち壊しな宏治の言動に辟易しつつも、いつまでもこんな調子が続けて少夜ちゃんに迷惑かけては失礼と考える俺はなんて紳士なんだろうか

「んじゃ、少夜　ちゃん。またねえ」

「こんにゃ　え？」

すれちがい気味に放たれた宏治の肘鉄をかわし、宏治の耳に携帯を押しつけ、手を離す。

反射的に宏治は落下しようとする携帯を掴み取り、図らずもして自分の耳に押しあてることとなった。

「あ、えつと……、少……夜？」

「『……………お兄様ですか』」

押しあてた携帯から微かにどことなく棘のある少夜ちゃんの声が漏れる。

それと同時に、宏治は反転して俺に背を向けて縮こんだ。

「あ、あのな少夜？　雅のヤツになに言われたか知らんが……………いやっ！　誤解だっ！　いや、だから雅のヤツの悪ふざ　え？　ちよつ、ちよつとまで！　だからっ　お、おい少夜！　少夜あああ　あっ！？」

悲痛を感じさせる宏治の叫びが付近の塀に反響し、残響を残して消えゆく。

あたりの同校らしい生徒たちが何事かと視線を投げかけるが、それもすぐになくなり我関せずといった調子で歩き去る。

残されたのは微笑を浮かべつつ佇む俺と、打ちのめされた格闘家のように手と膝をコンクリートつき、身体を支える心を碎かれた満身創痍の宏治のみであった。

朝日に照らされた通学路だというのに宏治が俯く場のみ影が差しているように見えるのは　まあ、気のせいってことにしておこう
いやしかし、こんな時間から叫び声をあげるとはなんとも常識のないやつめ。

同類と見られるのはいささか不愉快だな。

思いたった俺は一人通学路を進みさる。

若干凍えた大気を心地よく感じ、白い吐息が虚空に溶けていく。
朝日に反射するいたるところの雫が幻想的な様相を醸しだしていた。

うむ、実に清々しい朝だ。

久々のHEIWAを噛み締めながら、一人闊歩していく俺。

うむうむ、今日はいいことがあるいそ

学校の校門を通り過ぎようとしたその時、

「　くたばれっ！　雅いいいっ！」

頭上から轟く気合いに満ちた声に反射的に前方へと側転するように飛ぶ俺。

すると一瞬前まで俺がいた位置に宏治の踵落としがめり込んでいた。

「っ、いきなり何の真似だ宏治！？　血迷ったか！？」

「どの口がぬかしやがる！　何てことしてくれやがった！？」

俺の言葉にこたえた宏治は勢いもそのままに続ける。

「あいつマジで怒ってたぞ！　どうしてくれんだよあつ！？　下手すりゃ俺はあ！　……俺はあああつ！？」

過去の自らに起きた醜態が頭をよぎったのか、宏治は頭をかきむしり、天を仰いで呻く。

うゝむ、ああ見えて少夜ちゃんは宏治の女がらみのこととなると見境ないからなあ。

そういえば、弁当にいろとりどりのドッグフードが満遍なく押し込まれていたこともあったつけ。

しかもメッセージカードに『畜生』との達筆な筆書き添えの。

.....。

うわゝ、改めて考えるとスゲゝむごいことするよなあ。.....俺と

美咲は爆笑してたけど

だがまあ、多少哀れだな。

再び地に両膝をつけ、燃え尽きたようにうなだれる宏治に近寄り肩に手を置く。

「.....なんだよ、裏切り者おゝ.....?」

虚脱感満載の間延びした宏治は焦点の定まらない瞳で俺をみるが、俺はそんな宏治に微笑みかけてやる。

「ああいや、少しやりすぎたと思ってな。悪かったよ。俺がなんとかしてやるよ」

「ホントかあ!？」

途端に色めきたつ宏治。懇願の視線で救いを求めるその姿は、正直ウザい。

俺が少夜ちゃんをそそのかしたせいで窮地にたたされたようなものののに、その張本人に希望を見いだすとは。

.....よほど余裕がないらしいな。

まあ、仕方ない。ここはご要望通り

「ほおゝら飴ちゃんだよ。これで機嫌をなお」

「俺は幼児かコラアアッ!」

憤然と言い放つ宏治。うむうむ、ナイス突っ込み！やはり期待を裏切らない男だ。

「何を言う。これはただのキャンディではないぞ。ミックスメロン

ミルク、通称MMえ」

「知るかあつ！ 俺の平穩を返せええつ！」
なんとも賑やかな朝の始まり。

その後、昇降口で美咲と遭遇した俺は愚痴をこぼしつつトボトボ歩く宏治を引き連れ、教室へとむかった。

そう、この時俺は予想だになかった。

鞆の重量がいつもより軽いこと、宏治を敵にまわしてしまった愚かさ。

そして……俺にはもうHEIWAなどありはしないという事実。

今日という、“天獄”の始まりを……予想していなかった……。

「では、今日の授業はここまでです。期末試験も近いことですし、皆さんしっかり勉強してくださいね」

毎度おなじみの気の抜けるチャイムが鳴り響き、現国の教師の言葉に委員長が号令をかけ、午前の授業が終わりを迎える。

その後、購買へと駆けだしていく者や、おもしろい自席で弁当をひろげるものを後目に現国の女教師は微笑を浮かべて退室していく。

何事もなく授業を終えた余韻を噛み締め、俺は教材を机にしまい込み身体を軽くほぐす。

現在は昼休み、授業という強制労働の合間にある束の間の休息。倦怠感に身を委ねていた俺のもとに美咲がやってきた。

「うゝす、ひとりでなにボーっとしてんのよミヤ。お昼なんだから早くお弁当たべよ」

「ああ、そうだな。ってか、宏治は？」

「あそこで死んでるよ」

美咲が指差した先では宏治が力無く机に平伏していた。

まあ、言つに及ばず朝の出来事の影響である。

「しかし、コウも懲りないよねえ。少夜ちゃんっていういい子がいながら平然と浮気みたいな真似続けてるし」

「アイツからしたら友人感覚で遊んでるんだろ。もっとも、遊ぶ相手もそう思つてるとは限らないけどな。少夜ちゃんにしたら面白くないのは当然だ」

「ふっかけた張本人がなに言ってるんだか」

「はて？ 何のことやら」

手近な椅子を引き寄せて俺の席で弁当を開く美咲。

俺は朝から机に突っ伏し、授業をボイコットしていた愚か者から視線を外し自らの鞆を探る。

そんな時ふと視線を感じ、何気なくそちらを見ると……。

「……………」

「……………」

愚か者がこちらを窺っていた。

死んだ魚のような精気の失せた瞳でただこちらに視線をむけている姿は、屍以外のなにモノでもない。

なにを思つたのか視線はそのままに身体を左右に揺らしつつ、宏治はこちらに近づいてきた。その腕には弁当の包みらしいものを持っている。

……………これで腕を前に伸ばしていたらゾンビ顔負けのホラーだな。

「……よるな屍。死臭がうつる」

「……ひでえ言いようだなあ……。誰のせいだよ……。……」

のらりくらりと近場の机を引き寄せ、屍　もとい宏治は椅子に腰をおろして弁当の包みをおざなりに机に置く。

「恨み言か宏治？　自業自得って言葉知ってるよな？」

「……………いつか覚えてろよテメエ……………」

ありきたりな恨み言を吐きつつ、弁当の包みをといて食事をはじめめる宏治を横目に内心嘆息する。

「少しやりすぎたかな。まあしかたない、後で小夜ちゃんにフォロ―しといてやるか。」

そう思い、自分も弁当にありつこうと鞆をまさぐる。

イルが来てからというものの毎朝の食事の支度から掃除などの家事全般はほぼ彼女に任せきりになっている。無論、弁当の仕込みも。

イルに負担を強いるのは心苦しいが、本人は至って楽しげに家事をこなしているため基本的にあまり口だしはしていない。

なにより彼女の料理は自分とはくらべるまでもなく美味しい。それを彼女に伝えるとこれまた嬉しそうに笑ってくれるのだから無下には出来ず、やはり任せきりになってしまっわけだ。

でもまあ、やっぱりたまには自分でやらないとなあ。

そんなことを思いながら弁当を手探りするが一向に目当てのものに行き当たらない。

不信に感じ、鞆を机上にのせてなかを覗く。

教科書とノート類が乱雑に詰まれた鞆内には目当てのものがなかった。

「ん？　どしたのミヤ」

「なにしてんだお前」

二者二様の言葉を流し、教科書を引つ張りだして奥を探るがやはない。

この頃になって気づく。今朝から鞆の重さが幾らか軽かったことを。

これはつまり

「やべ、弁当忘れたみたいだ」

思い返してみれば確かに朝食の席でイルから弁当の包みを手渡されたことまでは覚えているが、その包みを鞆につめた記憶はなかった。

「うわ、馬鹿だね。午後の授業体育あるよ。辛いよそれ」

「家に忘れたのか？」

「そうみたいだ。仕方ないから購買でも行ってくる」
「そう言つて俺は席をたつ。」

「今からじゃろくなのないんじゃない？　ほとんど売り切れでしょ」
教室の掛け時計を窺いながら美咲。

「うゝむ、確かにそうだが背に腹は変えられんし。」

「言つとくが俺の弁当はやらんぞ」

弁当を両腕で庇いながらジト目の宏治。

「なんにも言つてねえよ。安心しろ、今日限りの平穩を奪つたりはせん。そのかわり明日からはキャットフードでも食つてろ。」

「とりあえず行つてみる。なかつたらなかつたでなんとかするさ」

「ふゝん、でもさあなんかこれつてお約束みたいだよねえ」

タコさんウインナーを咀嚼しながら美咲はケラケラと笑っている。

「あゝ、わかるわかる。ゲームとか漫画とかだと王道パターンだよなあ。主人公の男がなんか忘れ物して幼馴染みやら同居している女の子やらが届けに来るつてあれだろ？」

「そうそう、んでもつて学内は騒然。教室のなかは修羅場。ミヤはめでたく変態の仲間入り」

「スパパーンッ！」

話題に花を咲かそうとする二名に秘密兵器、ハリセンをお見舞い。ちなみに厚紙をグレードアップした強化型だ。

「誰が変態だ誰が？ 不用意な発言は慎め」

「ミヤ……そのハリセンどっから取りだしたの？」

「細かいことは気にするな」

「つてか俺はなんで打たれたんだ？」

「細かいことは気にするなと言っている」

頭を押さえて呻く二人を余所に俺はハリセンを適当に放ると、なぜか今しがたの不吉な会話が頭を掠めた。

王道パターン？ 忘れ物を届けに来る同居人？

……いや、ありえんでしょ？ そんなあからさまなイベントはほんのり桃色なラブコメで使われてなんぼ。

実際にそんなイベントあったとしても待ち受ける顛末はコメディではない。

バイオレンスだ。

女子生徒による蔑みと陰口、憶測という事実の捏造。

同居人の容姿に比例するかのように暴徒とかす男子生徒。

真実を掴むために躍起になって俺を捕らえようとする教員。

……地獄の釜が開くことうけあいだ。

「まあ、冗談はさておき早く行かないとコッペパンもなくなるよ。あたしだって弁当はあげないからね」

つかの間、惨劇的な空想を浮かべていた俺に無情な言葉が投げられる。

「たく、友達甲斐のない奴らめ」

俺は彼らに背をむけて教室後方のドアへとむかう。

購買行つて食い物なかったらどうしよう。いっそコンビニまで行つてくるか？ ああ、でもちよつと遠いし教師に見つかつたらなに言われるか

そんな思考で三步目を踏みだしたとき、世界は狂いだした。

「号外だあつ！ 号外だぞあつ！」

忘れかけていた駒瀬高名物、新聞部号外配りリターンズ。

名も知らぬ新聞部生徒Aが突如教室に乱入し、威勢のよい声と共にビラが撒かれる。

「号外だあ！ 我が校に正体不明の美少女が再来！ しかもメイドさんの付き添いつきだああつ！」

ガツチャアアンツ！

手短な机や椅子を巻き込み、俺は盛大に倒れ込んだ。

……ちよつとまで、前にも似たようなことがあつたよな。

既視感を感じて脱力しながら起きあがろうとする俺のまえにビラが一枚舞い降りた。

「ミ、ミヤ……」

「まさか、マジでお約束でくるとはな」

背後から美咲と宏治の声が届くが、俺は手元のビラを注視したまま動けなかった。

はは、良く撮れてるじゃん。前は逃げまわるのに精一杯だった小娘が“イエーイ”ってな風にVサインだしてやがる。ってかなんでゴシツクのなロリータ服を着てやがるんですか？ しかも隣のメイドさん？ あんた外出時は普段着で生活してませんでした？ 恥ずかしげな顔しても駄目ですよ？ 確信犯ですか？ 俺を地獄に落とす策略ですか？……………？

ビラにプリントされた写真に怒りと悲哀を足して二で割ったような不思議な感情が芽生え、俺はユラリと立ちあがり、今だにビラを撒き散らす写真部Aに詰め寄る。

「ゴスロリ少女とメイドさんっ！ 彼女達の目的はいかに　て、うええ！？」

胸ぐらを掴み、少年Aの言葉を中断させる。

「おい新聞部A、この娘どもは何処にいた？」

「え？ あの？ ちよつ　」

「何処にいたあつ!？」

自分でもびつくりな黒い声音に少年はびくびく身をすくませるが、俺はそんなの知ったことではない。何せ命の危機に匹敵する大惨事になりかねない現状なのだ。ここは火急的速やかに対象を抑え、弁当を受けとり、ハリセンによる制裁を

「ミ、ヤ、ビィ!」

猪突猛進の勢いで俺に体当たりしてきたその声の主は人目をはばからず俺におぶさるようにしがみついていた。

その瞬間俺は確かに聴いた、世界が凍りつく耳障りな不協和音を。

「……………シ……………」

「えへへ、ミヤビィ」

頬擦りするように首筋でじゃれるシロ。俺の手は少年Aの胸ぐらから力なく離れた。

「お…………お前」

「もう、探したんだよ。まったく御主人様を放っていなくなるなんて。駄目なゲ、ボ、ク」

「…………御主人様あああつ!？」

「…………下僕うううつ!？」

俺は再び耳にした、世界の歯車が瓦解していく破滅の音を。

女子はヒソヒソと何かを囁きあい、男子は目に見えるほどの悪意的な闘気を漂わせている。

「ヤバいつ！」

「シロツ！ 頼む離れ」

「あつ!？ やつと見つけましたシロラディア様 あ、雅様もここでしたか」

開け放たれた教室前方の扉から顔を覗かせた人物が声をあげた。勿論、登場人物はイルである。

その時気がついたが、どうやらこの教室は既に結構な人だからが包んでいるようだった。

「メイドさんに……」

「お嬢様のな女の子……」

「いや、それより……雅」

「……様あああああつ!?」「……」

俺は三度聴いた、聴いてしまった。世界が硝子のように砕け散る終焉の音を。

「あの、これお弁当です。お届けにあがりました」

「あ、ありがとうございます」

首もとにまだしがみつくシロをそのままにイルから弁当を受けとる。

「ところでイル、なんで今日はメイド服なんだ？」

「え、なにか変でしょうか？ シロラディア様から今のこの国では侍従の服は一般的なものと伺いましたので」

その言葉を聴くやいなやシロを肩から降ろし、脳天にハリセンをお見舞い。

スパーンツ！

「ムギユ、いたい。何すんのよぉ」

「随分と極端な一般的知識だなシロ。現代日本においてメイドが普通に町を歩くかっ！そしてナイスグッジョブッ！」

「怒ってるのか嬉しいのかどっちだあああつ!?」

うがぁ、と唸るシロ。

そんなやり取りをしていると、ふと俺の肩に手が置かれた。なんだと思つて振り返ると

「おい妃、詳しく事情を説明してもらおうか？」

筋骨隆々な体格の男がいた。体育教師にして生活指導を受け持つ通称ゴリ。

自慢の竹刀をたずさえて凄む様はヤクザ顔負けだろ。その背後

に瞳をギラつかせた男子生徒の集団がいれば尚更である。

「あ、その」

「その娘子たちとの関係洗いざらい吐いてもらっぞ」

肩に置かれた手に力が籠り、万力のような圧力で絞めてきた。

シロは俺の右隣でニヤニヤと気味が悪く笑み、イルは左隣できよとんとしている。

「ってか小娘、やっぱり確信犯かつ!?　なんて真似しやがる悪魔っ！」

心中で悪態をつくが勿論それで現状が変わるわけもなく、俺は売られていく子牛のように引き摺られ

「　ちよつと待ったあああっ！」

その時、一人の漢おにいが声をあげ、椅子を弾き飛ばす勢いで立ちあがった。

「こ、宏治っ？」

その漢おにい、宏治は推理ドラマの探偵さながら不適な笑みを浮かべ、いやに大仰な仕草で腕を振るった。

「なんだ霜塚？　お前いきなり」

「先生、それに生徒諸君っ！　君達は大きな勘違いをしている！」

宏治が探偵なら群衆はさながら容疑者の集団のようにどよめく。

ゴリも例外ではないらしく、肩に掛かる圧力がいくらか和らぐ。

「勘違いだど？　お前、この娘子達のこと何か知ってるのか」

「当然です。俺は雅の友人ですよ？　雅の口からは言いづらいでしょうから俺から説明しますよ」

ニヒルに笑む宏治の気圧されるように教師が渋面をつくる。

「宏治いっ！　頼むっ！　このままじゃ俺はあの世を垣間見る！

助けてくれっ!?」

「ふっ、大丈夫だ雅。お前の心中は理解してる。俺に任せろっ！」

おお、宏治がいつにもまして格好よく見えるっ！　悪かった親友、

少夜ちゃんとの間は俺が必ず取り持つてやるっ！　だからこの場を

アイコンタクトによるやり取りで手応えを感じた俺は、希望をもつてしまった。だがいつの世も、希望と絶望は紙一重。宏治の継ぎの言葉に、世界は沈黙した。

「いいかよく聞けっ！　その女性と少女は雅の……“フィアンセ”だあっ……！」

背後で波しぶきが唸るような気合いの声音で俺を指差しながら宏治が叫んだ。

真犯人はお前だあっ！　的な動作で。ただ、その言葉にその場にいたイルとシロ、美咲以外の人間が皆固まった。無論、俺も。

………は？　今何ほざいたこの男？

「驚くのも無理はない。たがこれは事実だ。雅はその二人のどちらかを妻として迎える。それというのも雅に責任があるからだ。詳しくはプライバシーに関わるから語れないが、率直に言っと」

皆、口をあんぐりと半開きにして静止している。教師に至っては瞳の焦点さえさだかではない。

………おい、宏治………何を
「ぶつちやけ“シチャッタ”」

「ふざけんな馬鹿ああああああああっ……！」

距離を一瞬で摘め、宏治の腹部めがけて全力で蹴りかかった。それをひらりとかわす宏治だが衝撃で宏治の背後の机が数席薙ぎ倒される。

…グフッ!?」

宏治の壊れた哄笑が鈍い音と共に鳴りやんだ。恐らく死んではいないだろう。アイツの生命力は雑草並みだ。踏まれてもむしられてもしつこく復活する。

でも良い子のみんなはクラスメイトを二階の窓から突き落としちや駄目だぞ。お兄さんとの約束だ

などと脳内妄言で現実逃避している場合ではない。

荒い息をつき、この絶望的な現状を打破するため策を巡らせようとした矢先、何か固いもの、例えるなら竹のようなものを叩き割ったような音が教室に響いた。

恐る恐る背後をうかがうと……………そこに“鬼”がいた。

「きいさあきい……………」

竹刀を両手で粉碎したゴリが目に見えるほど憤怒のオーラをたぎらせていた。その背後には同じようにオーラを滲ませる小鬼、もとい男子生徒の群衆も控えている。

「あ、あの先生？ それ学校の備品じゃないんですか？ 私物だとしてもそんな簡単にモノを壊すのはどうかと……………」

圧迫感に圧され、一步下がる俺。とりあえずソフトな一般常識で場を和ませようとするが、いかんせん暴走間近の人間とは自分の都合のいい言葉しか耳に入らないもので……………。

「……………俺なんて…………教師生活十年間…………、そういう出会いのひとつもなくいまだに独り身で……………！なのにキサマア……………」

いや、そんな物悲しい独白を鬼神の形相で語られると、恐ろしいのか憐れなのかわかりませんよ？ あれ？ ボロきれになった竹刀を放ってなんで拳こぶしをボキボキ鳴らすんです？ それに何故にじり寄ってくるんです？ ちょちよつとっ！？

「貴様には竹刀より拳が必要だな。調子にのつた罪は重いぞ……………」

洗いざらい、吐いてもらっからな」

「えっと……先生？今の時代体罰はヤバイですよ？それにあきらかな誤か」

極めて一般的な常識で諫めようとする俺の言葉。それを遮り野太い怒声があがった。

「野郎共っ！妃を捕らえろおおおっ！」

「「「「「おおおおおおっ！」「」「」「」

「ぎゃああああっ！？」

暴徒と化した男子生徒の群衆が津波のように押し寄せてきた。クラスメイトのみならず他クラスの面々、上級生下級生含めた怒濤の人間津波に、飲み込まれかけた俺はすんでのところまで後退し、宏治をぶん投げた窓から外に飛びだした。

「グケツ！？」

着地と同時に、潰された蛙のような断末魔とゴムタイヤを踏みつけたような感触がしたが、いかんせん今はそんな些事に構っているほど余裕がない。

「外に逃げたぞおおっ！追えっ！放送部は今すぐ全校放送を流せっ！総力をあげてアイツを捕らえろっ！」

「「「「「おおおおおおっ！」「」「」「」

「誤解だあああ ああっ！」

黒い衝動全開の雄叫びを背に俺は全力で駆けだした。

勿論、駆けだす前に足元の衝撃吸収マット（宏治）をもう一度踏みつけてから。

かくして第二回リアル鬼ごっこ、妃 雅捕縛杯は強制開催された。

「……………マジ死ぬ……………」

自宅のドアを開け、その体制のまま俺は突つぶした。

「冗談だろ……………あいつらホントに一般人かよ……………」

想像を絶する地獄の逃走劇に歯噛みし、惨劇に身震いする。

あの後俺は校内からの即時脱出を試みたが、ゴリ直属の風紀委員精鋭部隊に驚異的な速さで先回りされ、足止めされている間にどこから生えてきたのかと思うほどの男子生徒に囲まれた。

致し方なく近場の樹によじ登ったがそこで林業研究会とかいう愉快な同好会がチェーンソーを持ちだし、その樹を切り倒したので校舎に飛び移るとそこには女子生徒の軍団が『女の敵いいっ！』とか言って襲いかかってくるし……………。椅子とか机とかハサミとか投げってくるのは流石に危ないだろ……………。

ゴリはゴリで某生物汚染ゲームのボスキャラのように俺を追跡してくるし……………。

それも驚異的なスピードで。理科室に隠れていたときなんて扉をぶち破って侵入してきたからねあの独り身男。

「あああ……………」

「あ、雅が死んでるう……………」

突っ伏して呻く俺の頭上から陽気な声音が届く。頭だけ声の方にむけると案の定、そこにいたのはシロだった。

「どしたの雅い……………？ 何だか浜に打ちあげられた海牛みたいになってるよ…………… あははあ……………」

いつ帰ってきたのか。座り込んで俺の頬をツンツンしているシロ。その愛らしい仕草に俺は憎悪に似た感情を抱いたが、いかんせん身体を動かす気力すらない。

「つつん……。って、雅い？ 何のリアクションも無しは流石に寂しいんだけどなあ？」

「あ？ ああ、そうだな……。もうどうでもいい」

.....
疲れた
.....
L

「うわっ！？」 何か雅が廃人以上死になっ
てるう！？」

「……あはは、シロオ」
「お前はホントに可愛いなあ」

あはは、あは、A H A H A H A H A H A H A
.....」

「目が虚ろだしいい！？」 やり過ぎた？ ねえ私やり過ぎたああ

! ?

「ばぶう」

「遂に幼児退行までええっ!？」

「だあ……ばぶう」

「イルウツ！？ 雅が壊れたあああ！？ ああゝ！ ハイハイして進むなああ！？」

「あれ？ じいじは……」

「お目覚めですか？ 雅」

声に横を振り向くと困ったような笑みを浮かべたイルがいた。

「何でイルが……って」

そこはリビングのソファアのうえ。どうやら俺はここで寝ていたらしい。そしてその俺に寄り添うように静かな寝息をたてるシロが隣にいた。

「えっと……、これはどういう状況？」

「ふふっ、見たまんまの状況じゃないですか？」

「いや、何か家についてからの記憶が曖昧でさ。説明してくれると助かる。ってか後頭部がヤケに痛むんだけどなんで？」

「え………？　いいえっ、わたくしは存じませんっ。きつと何処

かの誰かがヤンチャな幼児を強引に寝かせただけですつ。そうです、何処かの誰かが……あはは………はあ」

「……何で目をそらす？　ってか何でため息？」

「き、気にしないでください……」

何故か頬を染め、手を降って視線を明後日に向けているイル。

………深追いはやめておこう。

何か知らんが追求するほどに自分の首を絞めることになりそうな気がする。

ってか、俺なにした？

「………ったく、何でこいつは添い寝してんだよ。

誰のおかげで大変な目にあったと思ってるんだ、問題の張本人が」
シロの頬を軽く突つついてやる。心地良さそうに柔らかく表情を綻ばせるシロ。

どうやら楽しい夢を見ているようだ。

「自分ばかりいい夢見やがって。このこのお」

「ううう、にやめえ……くう………すう」

むずがるシロ。それでもはにかんだ笑みはそのまま、心地良さそうに身をよじる。

「しかし、宏治さまの言葉には多少驚きました」

と、イル。

「いきなり婚約者って言うものですから、わたくしてつきり雅は宏治さまに仮契約の意味を伝えていてもうすっかりその気なのかと」

「んなわけないだろ。伝えていたらこんなもんじゃすんでない。第一イルも勘定にはいつてたじゃないか」

「あら、雅はわたくしとも仮契約を結びたいのですか？　浮気はダメですよ」

「………もうこのネタは勘弁してくれえ」

「ふふっ」

悪戯氣に微笑を浮かべるイルを視線から外し、ソファから身を起こして背もたれに身体を預ける。その傍ら、俺の腕にしがみついたシロを起こさないように彼女の繊細な銀髪を手櫛ですく。
「寝てればただの可愛い子供なのにな。まったく、この悪戯小娘が」
そういいながらも、自分の表情が綻ぶのがわかる。なんだかんだいいながらも、俺はこの少女のことが好きなんだろう。

勿論男女としての感情とは別にである。

「なあイル、聴きたいことがある」

「なんでしよう。承ります」

視線はシロにむけたまま、唐突に投げ掛けた言葉にイルはすぐさま応じた。

「シロの黒い雷、あれは魔術じゃないな？」

「……………」

息を飲みこそしないもの、気負いなく放たれた俺の言葉にイルは動揺したようだ。

俺は言葉を続ける。

「魔術っていうのは言わば自然界の現象や事象を故意に創り出す術だ。分子を加速、高振動させれば熱が生じ、そこに酸素や水素などの可燃性気体をくれば炎が生まれる。逆に分子や原子の動きを停止させれば急速に低温になり、水や氷を創りだせる。でも、シロの雷は」「雅、それは」

俺の言葉を遮ったイルの言葉を遮り、俺は言葉を紡ぐ。

「あれは“魔法”、“ダークネス・ヴォルト”だな」

「っ！？」

今度こそはつきりとした態度でイルは絶句した。驚きに目を剥き、愕然とした様子でこちらを見ているのが見なくてもわかる。

その驚きが鎮まるのを見計らって俺は更に続ける。

「詠唱による集積改変発現の段階を踏まないどころか元素すら必要とせずに具現される世界の“法”。^{スペルキャンセル}無詠唱なんてどうってことない

最上位の術法だ。まさか俺が気づいていないと思ってたのか？」
「……………それをわたくしに聴いて、雅はどうするんですか？」

若干強張った声音で言うイルは、俺の真意を計りかねているようだ。なぜそのような事をいま聴いているのか、その理由がわからないだろう。

俺はシロの髪を鋤いたまま、イルに瞳をむける。

「別にたいした理由で聴いたんじゃない。ただ、この間の刺客の事を考えててな」

「刺客？ 例のエディルとシルビナという二人組のことですか？」

「ああ」

首肯する俺にイルはいぶかしむように首をかしげた。俺は気負いなくその疑問に応える。

「俺が考えていたのはあいつらの目的だよ」

「目的？」

「あいつら、こう言ってたよな。シロを“消す”って」

シロの頭から手を離し、上体をイルに向ける。

「先に襲ってきた、えっと……………たしか刃狼族だったか。あいつらの目的はわかる。シロをさらい、何らかの交渉の人質にしようとしてもしてたんだろう。だが、あの二人はあきらかにそれとは違う。シロを……………殺そうとして襲ってきた」

「それは……………」

「二人とも相当な位の術師^{じゆし}だった。そいつらが二人がかりでシロを襲ったんだ。いくら魔界の重要人物であつてもやり過ぎだ。そこまですてシロを消すメリットが俺には思いつかない。加えてシロの“不完全”なダークネス・ヴォルトだ」

「っ！？ み、雅……………貴方どこまで……………」

表情を硬直させて絞りだすように呟くイル。わずかに顔色が青ざめているようにみえる。

「その雷、万物灰塵とかす魔神の鉾なり。天を焼き、地を薙ぎ、世界を崩壊せしめる闇の閃光”。天位のダークネス・ヴォルトに関する古い伝承の一節だ。この伝承を信じる限りシロの遣うダークネス・ヴォルトは」

「もう、やめてください……」

独り言のように漏れでたイルの言葉に俺の言葉は途切れた。イルは顔をうつむけたまま肩を僅かに震わせ、絞りだすように言葉を発する。

「わたくしには貴方が何を言いたいのか、よく分かりません。でも……、もうやめてください」

「……悪い」

イルの泣いているような声音に自然罪悪感を覚えた。

イルの様子から、恐らくこの話題はシロが魔界を逃げだした事情に直接関係する話であること悟り自分の浅はかなさを悔いる。

「言い訳がましいが、俺はただシロを狙う奴等の規模と勢力がどの程度あるのか知りたかっただけだ。それ以上でも以下でもない。でも……すまなかった」

「いえ、雅に悪気がないのは知ってますから……」

自然、俺たちは言葉をつぐむ。イルは俯けた顔をそのままに、俺はそんなイルから視線をはずして中空を意味もなく眺める。

と、膝のうえでシロが身じろいだ。微笑みを浮かべ、すやすやと寝息をたてるシロが転げ落ちないように支えてやる。

子猫のように丸まり、幸せに夢に身を委ねているだろうシロを眺めていると懐かしい感傷のようなものが胸を掠めた。

そんな折り、唐突にリビングにクラシック調のメロディが流れた。リビングの壁に掛けられた時計を見ると、その針は二時をしめしていた。

「……って、もうこんな時間なんだな。そろそろイルも休んだほう

「がいいんじゃないか？」

「あ、はい。……………そうですね」

重苦しい沈黙を払拭するように努めて軽く言った俺の言葉にイルはそう返した。あげられた顔は晴れてはいないものの、悲痛な感情はないようにみえる。

イルはそつと立ちあがり、シロに視線をやる。

「では御言葉に甘えてシロラディア様を寝室にお連れして今日は休むことに致します。それでは失礼します」

膝に頭を預けたシロを優しく起こさないようにイルは抱きあげた。そのまま背を向けドアへと向かうイル。

「……………雅」

「ん？」

リビングから退室するかと思いきや、イルの脚はドアの手前で止まった。

「シロラディア様とわたくしは、貴方に申し訳ないほど隠し事をしています。でもそれは決して貴方を信用していないからではありません」

「今更、そんなこと」

「そして“それ”は、貴方もおなじなのですか？」

イルの言葉の意味が、一瞬わからなかった。

その一瞬の空白を空白とさせずにイルの言葉は続いた。

「この家、妃家は風为天位の中でも分家の分家。全体から見れば最下の家柄にあたります。ですがそれにしても貴方は強すぎます。あれほど見事に風を操る事が出来る貴方が一介の、分家の天位遣いとは思えないのです」 それに、と背を向けたままイルは何かを堪えるように紡いだ。

「貴方が、宏治様と友人であることの意外性。地の天位の頂点である霜塚家の次期当主、“地王”の称号をもつ彼と対等な関係であること」

「……………」

俺はイルの言葉に応えることをせず、ただ瞳を閉じる。

「シロラディア様の魔法についてもそうです。ダークネス・ヴォルトに関する記述なんて魔界でもそうありません。貴方は一体何者なんでしょうか？」

「……………」それは、質問か？」

「いえ、ただの、独り言。世迷い言、です」

瞳を閉じたまま言う俺の言葉にイルは端的にそう応えると、脚を踏みだして扉を開けた。

「つまらない事を言いました。忘れてください。では、お先に失礼します」

それだけ言い残すと一拍の間を置いてシロを抱えたイルはリビングを後にした。

残された俺は電灯のした、しばらく瞑想するように黙してたたずんでいた。

頭のなかにイルの言葉が反芻される。

『貴方もおなじなのですか？』

それはつまり互いに秘密を持ち合い、互いに仮面を被り喜劇ながら今の暮らしを続けているのかと聴いているのに等しい。

秘密をもちながらそれを明かすでもなく身勝手な言葉に聴こえるが恐らくそれは違う。

シロもイルも絶えず思い悩んでいるのだろう。秘めた事実を俺に打ち明けていいものか。その真実に俺がどう応えるか。俺が現実を知り、豹変しないか。

彼女達は苦しみ、答えをだそうとしてるのだろう。

そして、いつかきつと秘密を明かしてくれる。

でも、俺は……………。

俺の、秘密は

「……………言えねえよ」

一人呟く。

決して明かすことの出来ない秘め事。

誰であれ何であれ、俺はきつと語らない。語るわけにはいかない。
この秘密を共有するのは宏治だけ。

天位という呪いを背負い、この地獄のような世界を突き進む相棒
はアイツだけで十分だ。

「最低だな……………俺は……………」

俺は瞼の裏に写る光を仰ぎ見、ソファのうえに再び横になる。

そこに写るのは過去の憧憬。光と闇と朱色に染まった過去の道程。
容易く瓦解した、幸福な情景。

意識が徐々に沈んでいくなか、どこか遠くで誰かが俺を呼ぶ声が
聴こえた気がした。

その19： 学園テングク （後書き）

こんにちは、朔夜 楓です（ ; ええ、かなり遅れまして大

変申し訳ありません。伏線だらけで休載して読者の皆さんにはご迷惑をお掛けしましたm（| | m

次話からは徐々に伏線の回収に向かいます。シロと雅の日々はまだ続きますので、飽きずに読んで頂ければ幸いです。

もしよかつたら評価もしていただければ嬉しいです。皆さんの意見待ってます。

ではまた（ ;

その20： 教えてミヤビくん！

「ぶつちやけさあ、天位ってなんなの？」

それは休日の昼時。俺イルシロと揃ってイルが用意したカルボナーラを食べていた昼食の席でシロが突然口にした。

「私って天位の事ってよく知らないんだよねえ。なんか物騒な話ばかりは聴いてたけど、雅って割りと普通だし。それに前のアレ。魔術でもないのに雅って風を刃にして飛ばしたじゃん。どうやったの？」

パスタをフォークで巻きながら片肘をテーブルにつき、頭のうえに疑問符を浮かべるように首を傾げる。

「唐突だなお前は。んなの聴いてどうするんだ」

「それよりシロラディア様。肘についての食事は行儀が悪いです。口許にソースもついてますよ」

イルが取り出したナプキンで口許を拭うのを傍目に、俺はマイペースでパスタにありつく。

こうしてみると世話のかかる妹に手を焼くお姉さんみたいな構図だな。

あ、ちなみにイルも勿論食事中だ。最初は侍従だから後で採ると渋っていたが、俺とシロが食事はみんなで食べたほうがいと説得した。

「ううゝ、子供扱いしないでよゝゝ。自分で拭けるよゝゝ」

「ってか子供だろ。むしろ悪ガキ」

フォークが飛んできました。

パスタを巻いたフォークが机のうえに刺さり、“びょゝん”と効果音が聴こえそうに揺れている情景はかなりシュールだ。

「……………お前、日々凶暴性があがってないか？」

「ってか教えてよお。気になって仕方ないんだよゝゝ」

はい、俺の言葉完全無視です。

イルは律儀にも替えのフォークをシロに手渡し、自らも席について食事を再開する。

イルさん？ 俺の目の前にあるこのオブジェの出来損ないのような揺れている物体はスルーですか？ 肘は許さなくてこれは許すんですか？

「その話題にはわたくしも興味ありますね。天位の文献は読みましたが、いまいち容量を得ない部分が多数ありますし。この際ですから雅にいろいろ聴かせてもらうのもいいですね」

もうイルはシロや宏治達という極一部の前では俺に“様”付けはしてはいない。それというのもシロの要望 もとい命令で。俺達二人だけの間で呼び捨ての呼びあいがあるのが気に入らなかつたらしいのだ。

いまいち要領の得ない理由だ。

「あのさイル。そんなことよりシロの凶暴性について今後の打開策を練ったほうが」

フォーク IN BACK!?

なんと顔めがけて飛んできました。すんでのところで空中キャッチするが、異様に大量に巻かれたパスタが顔面を直撃。

ホットなソース滴るホットなスパの熱いベージュがヒートな世界の扉を開く。

「ぎゃああっ!？ 熱いのおっ! 痛いのおっ! 目がっ目があああっ!？」

「何で微妙にオネエ言葉なのお？ ってか勿体ぶらないで教えてよお」

「シロラディア様、出来たてのパスタはかなり熱いんですよ？ まあ、雅なら大丈夫だと思いますが。今、濡れたタオルを」

「なにこれっ!？ 話題の中心は俺なのにこの冷めた対応はなにっ? 現状見てるっ? なんか熱くて痛くて大火傷してそんな気配な

んですけどっ!？」

「だって雅だし。殺しても死にそうにないじゃん。火傷くらい平気平気いゝ」

「確かに日頃雅が乗り越えてる苦難に比べたらこれくらいは些事に思えますね。はい、タオルです」

イルは俺にタオルを手渡すと席に戻る。

軽い。軽すぎる。人の不幸を笑い物にするならともかく、関心なくなってきたよこの人たちっ!

扱い酷すぎねえ? 一応この家の主人俺ですよ。はっ! これあれかつ!? 世の中のお父さん方の心境かつ? 職場で疲れはて家族に冷たくされてるこの局地的な家庭事情はまさにそれっ!

ああゝお父さん方っ! あなたたちはこの寒さに耐えているんですね。僕は挫けそうです。

ああゝ。世界の淘汰されているお父さん。俺に元気をわけてくれゝ。

「お父さん……………」

「うわあ。雅がまたトリップしてるうゝ。フライパンで叩けば戻るかなあイルウ?」

「流石に凶器は……、ハリセンくらいで妥協してはどうでしょう?」どこからともなく俺手製のハリセンを取りだしてシロに手渡しイル。シロは御満悦気味にそのハリセンを俺に叩きつける。

スパーンスパーンスパパーン、スパーンスパーンスパパーン

ポップなビートを刻むハリセン。この場合音楽を奏するのはハリセンか? はたまた俺の頭か?

「あははあ、スパーン」

「なかなか戻りませんね。まだ雅惚けてます」

「まだまだあゝ。スパーンスパーンスパパーン」

スパパパン。

「……………ちくしょおおっ！？ 何の平穩もねええっ！ こんな家出てってやるううっ！」

俺は椅子を弾き飛ばす勢いで立ち上がり、そのまま駆けだした。頬を流れるのはきつと青春の汗。突き進むのは夕陽の海岸。

あはは、お父さ〜ん。僕はもう耐えられませ〜ん。夕陽の向こうに行つてよかですかあ〜？

「あ、雅っ！ ご飯残つてますよ！ 出掛けるならきちんと食事してから」

「まてえ〜 もつと叩かせろお〜」

「誰か僕に思い遣りをくださあぁい！？」

「んで、何を聴きたいんだよ？」

俺は珈琲を啜りながらぶっきらぼうに呟いた。

「あ、あの雅？ あんまり怒らないでください。別にわたくしたちは貴方をないがしろにしたわけでは」

「そうだなあ〜、きつとそうだろうなあ〜」

明後日を見ながら呟く俺にイルは苦笑する。

「まあ〜、いつまでイジケテルのお？ 女々しい男はカッコ悪いよお〜」

「どうせ俺は格好悪いさ」

「むう〜」

アイスをパクつきながらのシロも若干渋面だ。

どうやら思つた以上に二人とも申し訳なくは思つてくれているらしい。

俺も実際はそれほど不機嫌な訳ではない。いつまでもこんな調子では話が進まないの、自ら話題を彼女達の興味にあわせることにした。

「まあ、終わったことは置いてだ。天位について聴きたいらしいが、どういうことを知りたいんだ？」

シロとイルに向けて言い放つと彼女達は若干戸惑いを浮かべたようだ。

「どういうことって言われても……、私にも知らないからなあ」

「雅の話しやすいように概要の説明を聴かせてくれますか？ わたくしも詳しく理解しているわけではないので」

「ふむ。なら、そうだなあ」

口内に満ちる苦味と酸味を味わいながら思考をまとめる。

「……………俺達、人間が扱う天位は大きくわけて四種類ある」

珈琲カップをテーブルに戻し両腕を組む。

「それぞれに万物の四つの属性があつて戦闘手段もまったく違う。

風の天位は剣術“天詠流”、地の天位は格闘術“荒神流”、水の天位は槍術“翼震流”、火の天位は忍術“戒耀流”。俺は知つての通り風の天位の属する」

「そんなにあるんだあ。宏治は地の天位なのお？」

「そうだよ。そして天位の四つの属性それぞれの頂点にはその分家を束ねる宗家がある。風の宗家“森羅”^{しんら}、地の宗家“霜塚”^{しもづか}、水の宗家“碧月”^{あおつき}、火の宗家“鷹旗”^{おづき}。宏治はそのうちの地の宗家、霜塚の人間だ」

「へえ、もしかして宏治ってかなり凄い人なのお？」

「まあな。俺は分家の中でも下の下。本来ならまともに口なんか訊けないような人間なんだよ」

「あの、質問です」

イルがカップをソーサーにもどし、声をあげた。

「察するに天位はそれらの属性にみあった技を扱うようですが、魔術としての要素を必要とせずはどうやって自然現象を操作しているのですか？」

「ああ、それか。説明は難しいんだが、わかりやすいように解説するよ」

俺は腕をあげ右手の人差しをたてる。

「この間見せた月下風鳥を例にあげると、あれは真空の刃を飛ばすカマイタチだ。ではカマイタチはどうやったら生まれると思う？シロ」

いきなり振られてきよんとするシロは若干考え込むように目を泳がせた。

「ううーんと、イタチの手に農業用鎌を取りつける？」

「妖怪をでっちあげるな。それと動物愛護団体を敵にまわす発言は控えてくれ」

冷静に突っ込む俺。

「通常の自然現象では気圧差の関係で生まれる空氣の断層が真空になり、それが刃のように人や物を傷つける現象をいいますね」

イルが解説してくれたので、それに便乗して言葉を継ぐ。

「そう。だけど俺たちは気圧を操れるわけではない。そこで」

俺は立てた人差し指を軽く目の前で降る。

「この指を剣とするなら、俺の技はこの指を高速で振ることによって大氣に断層を無理矢理作り出すものだ」

「待ってください。確かに事実上それで真空を生み出すことは可能です。ですがそれは剣が通った軌道上の話。その風刃を飛ばせはしないはずですよ」

「……………約十倍だ」

「え？」

「ん？ 何があ？」

呟いた言葉に二方揃っていぶかしむように声を揃えた。

俺は事も無げに先を続ける。

「一般に達人といわれる人間を基準にして、風の天位の剣速。およそ十倍だ」

「……………」
「ふえ？」

イルは絶句するしかない様子、シロはそんなイルと俺を見比べて何のことかまるでわかっていない様子だ。

「ねえイルウー？ 私よくわからないんだけど、その“十倍”って凄いのぉ？」

「ハ、ハッキリ言って埒外の数値です。達人の剣速を一八〇km/hとしても単純計算で一八〇km/h。これはマッハー・五に相当します。ということはあの風刃はソニックブーム？」

「簡単に言うとそうなるが月下風鳥の剣捌きは特殊で、カマイタチをソニックブームに乗せて撃つ技だ。ちなみに式式“嵐華”は剣を回転させ、縦横に真空の線を創ってソニックブームを叩きつけることにより無数のカマイタチを撃つ月下風鳥の応用だ」

俺の説明にイルは戸惑いつつも感慨深げに頷き、シロは何を言われているのか全くわかっていない様子で目を白黒させている。

「しかしソニックブームを発生させるほどの剣速は人間の肉体では負担が並みではないはず。常識で考えれば肉体が筋肉の収縮に耐えきれず、細胞が壊死するか腕がちぎれます」

「そこは鍛練の成果と遺伝だな。普段人間の肉体は三割程度の筋力しか使われていないってのはよく知られているが、俺達天位の使い手は鍛練にもよるがおよそ九割の力をだすことができる。それに加え天位の家系は通常の人間より身体能力、身体強度が高い」

「なるほど。雅の異常なタフさはそれ故ですか」

「……………」一般人だったら何度死んでるかわからないがな」

ちよっとロンリーブルーな俺です。

「もぉー！ よくわからないよぉっ！ つまり雅はキチガイってことでオツケー？」

「シロオ？　あまり舐めたこと言うと風刃で丸坊主にするぞお」
「す、すみません……」

ガクガクブルブルとシロは縮こまる。目尻を潤ませて本気で嫌な様子だ。

「冗談はさておき、天位のメカニズムはいろいろあるが、大抵は人間の限界を超えた動きで擬似的に自然現象を生み出す」

「ほとんど反則に近い技術ですね。確かにそれなら使徒と対等以上に渡りあえるのも頷けます」

「天位について簡単に説明するとこんなところか。歴史なんて別にいいだろ？　解説するのは少し億劫だし」

天位の歴史は戦いの歴史だ。度重なる異界の強襲者や軍勢との一般に語られることのない戦闘の記録。

シロやイルに語るに及ばない裏の歴史だ。

「ぶう」。なんかイルと雅ばっかり難しい話しててつまらなあい。つまり雅の技は金髪ホウキ頭のアメリカ人が使う遠距離攻撃ってことお？」

「ネタが古すぎるぞ、お前は何歳だ？　そして米国人を敵にまわすような発言もやめてくれ。ってか説明はこんなところでいいか？」

冷めてしまった珈琲の残りを煽り、シロとイルに問う。

「もおいいよー。なんかよくわからないし」

シロは思ったより話がつまらなかつたようで、ふて腐れ気味に牛乳を一気に飲み干し、テーブルにもたれ掛かっている。イルはというと、なにやら思案にくれるように口許に手を添えていた。

物憂げな様子で考え込んでいたので何か疑問があるのかと思い、声を掛けようとした矢先にイルは口を開いた。

「あの、これは聴いていいものか悩んだのですが」

「ん？　なんだ、俺で答えられることなら答えるけど？」

言い淀み逡巡するイル。やがてその口を開いた。

「……………天位の、その、“呪い”のことなんですが」

その言葉が俺の内面に僅かな波紋をたてた。

「わっ、何々い？ 呪いってなんか面白そうおゝ 心霊系？ 私
そういうの好きい」

シロが興味津々といった調子で話に割り込む。

「いえ、そういった話ではありません。ただシロラディア様の同居
人としての雅を調べて天位の文献に目を通したときに気になる一節
があつたのです」

期待するシロとは対照的にイルはシロと俺を見渡し、言葉を選ぶ
ように続ける。

「その文献にはこうあります。 “天位の技、魔性の技にて呪われし
業”。天位の使い手はすべからく“欠落”を背負うというものでし
た」

「欠落う？ なになにどういうこと？」

「詳しくは知り得ませんが、天位はその能力が強大であればあるほ
ど自身の大切なモノを喪失するらしいのです。まるで力を得たこと
の代償とでもいうように」

イルはそこで言葉を切り、俺を瞳に映す。

「何の確証もない伝記です。実際に外的な要因で呪詛の類いがある
わけではありません。ですが、これは事実なのですか？」

イルの瞳が俺の内面を射抜くように細められる。

「もしこれが事実なら、貴方は」

「ただの伝記だよ」

イルにみなまで言わせずに俺は言葉を発する。

「確かにそんな話はある。だがそれは昔の、天位と使徒との戦いが
頻発していた時代の話だ。今の世の天位遣いで欠落を背負う者なん
てそういない。あつたとしてもどこかで千円落としたとかそんなも
んだ」

平時通りの声音、仕草で語る俺をイルは無言で見つめ、シロはど

こか不安そうにそんな俺とイルを交互に見比べている。

「では、宏治様はどうなんですか？」

尚、話題を継続させるイル。俺はそれを断ち切るように椅子から腰を浮かし窓際に歩み寄る。

「さあな。あまり欠落がどうかは話さんし、それでも五千円なくしたとかそんなところだろ」

昼前は晴れていた空はいつの間にか雲が覆い、外は薄暗くなっており、そのなかにちらほら白い粒が舞っていた。

「お、雪が降ってるぞ」

「え、ホントオ」

シロが椅子から離れ、トテトテと側にやって来る。

窓を開けると凍えた大気が肌を撫で、灰色の世界に白い雪が深々と降っていた。

「初雪だな。通りで寒いわけだ」

「わあゝ 綺麗」

シロは俺の隣で感嘆の声をあげ、自然と俺の手に自らの手を添える。

シロの体温を左手に感じながら、俺は冬の情景を眺める。

イルは言った。天位とはその能力が強大であればあるほど大切なモノを喪失する。力の代償に犠牲を必要とする技だと。

それは 真実だ。

他者犠牲自己犠牲。能力に応じてあらゆるモノを喪失する呪われた技。

それが天位だ。

喪失する。言葉で言うのは容易い、だがそれは言葉で言い表せるほど生易しいものではない。

自身の存在する意義、目的、概念の一部を失うというのは精神が崩壊しかねない苦痛を当人に与える。

無論イルに嘘を聴かせたわけではない。実際現在の天位は弱体し、当人でさえ気づかずに欠落を負っていることも少なくない。

でも、俺は

「シロラディア様、上着を着ないと風邪をひきますよ」

イルがシロの背後から上着を掛ける。シロはそんなことにも気にかけず眼前に広がる冬の情景に夢中らしい。

ふとイルと視線があう。いつか見た悲哀とも哀惜とも疑惑ともつかない瞳で見つめるイルに俺は悟る。

イルは気づいているのだろう。天位の呪いは決して絵空事ではなく実在することを。

そして、俺が欠落を背負っていることも。

「ホントに寒くなってきたな。俺もちよつと部屋行って上着とってくるわ」

俺は踵をかえして部屋に向かおうとする。シロの手を離して。

「あつ、ねえ雅いつ？」

何故か心臓が一際大きく脈動したように感じ、俺は振り返る。

「ん？」

「あのさあ雪が積もったら雪合戦しよお。いいでしょお？」

満面の笑みでそう言うシロ。そんなシロの天真爛漫な態度に俺は笑みを浮かべて応える。

「ああ、勿論。雪玉ぶつかっても泣くなよ」

「雅こそおー 這いつくばって謝っても許さないよおー」

「……………石とかは入れるなよ？」

「……………えへ」

「やつぱやる気だったかあつ！ むしろ“殺る気”かあつ！？」

「大丈夫大丈夫う だって雅だし」

「俺の存在価値お前の中でどの程度だあああつ！？」

「ええー？ 天位だから避けられるって意味で言ったのにいー」

「あ、そういう意味だったの」

「……………まあ、イルに比べたら雅の価値は路肩の雑草並」

「尼決定え 天詠流、月下風」

「わああ〜！？ たんまたんまああ〜！ 冗談だつてばああ！」

飛牙を回転させて構える俺にシロは全力で腕を振っている。まあ、当たり前だけど月下風鳥を撃つ気など毛頭ありはしない。

「ったく」

飛牙を手早く腰の後ろのホルスターに收容し、俺は二階に向かう。薄暗い階段を登り、自室のドアを開けると上着には目もくれず窓際に進み、冷えた外気を部屋に取り込む。

白く染まりつつある町並みを眺めながら俺はおのずと左手を握り締める。

「シロ……」

握られた手の暖かさはまだ左手に残っているように思えた。

シロは良くも悪くも純心だ。おそらくイルが言っていた代償についていまいち理解しているとは思えない。

だからこそ、俺はシロを騙していることになる。

イルは俺が言葉を濁して事実を曲解させていることに気づいている分まだいい。けどシロは何も知らないのだ。

天位の呪いは周囲を、親しいものを巻き込むことを。

もしかしたらシロやイルが天位の呪いの犠牲となることもないとは言えないのだ。無論そんなことは俺が絶対にさせない。

だが、自分の力だけでは抗うことの出来ない宿命さだめという虫酸が走る事象があることも俺は知っている。

知って……………いるのだ。

俺は窓枠に寄りかかり、握り締めた左手を眼前で開く。

『雅い〜』

シロの明るく天真爛漫な声が脳裏を掠める。無邪気に無垢に、俺を呼ぶ声。

それは過去の記憶と混じりあい、もう一人の“少女”の声が呼び起こされる。

『ミヤビ』

「っ!？」

頭部に疼痛を覚え、視界がボヤけるのを意識を総動員して堪える。容姿も口調もまるで似ていないのに、どこかシロと似通った少女の姿が頭に浮かぶ。

俺が護ると誓い、救うと嘯き、喪ってしまった最愛の少女の姿が。俺は、どうすればいい……」

応えのない言葉は冬の大気の消えていく。

俺は同情や憐れみでシロを助けているわけではない。最愛の少女の代替として護っている訳でもない。

ただの自己満足だ。護りたいから護る。救いたいから救う。そんな身勝手な独りよがりだ。

それはシロが好きだからではないか。それもあるだろう。過去の少女の面影をもつシロを護りたいと思うのは当然だ。

けど、これは好意ではあっても愛ではない。

俺はもう、誰かを好きになることはあっても誰かを愛することはきつとない。愛すれば自身も、相手も痛み^ミに身を引き裂かれることになることを、俺は痛いほど経験しているから。

「琴葉。俺は……」

今は亡き少女の名を呼ぶ。

優しく脆く、誰よりも強かった想い人の名を。手のひらに舞い落ちる雪のように、その残滓の余韻を残して消えた唯一愛した女^{ひと}を。

外は白に染まっていく。なにもかも埋め尽くすように、総てを凍てつかせるように。

あらゆるものを偽りの純白で飾りたてていく。

その世界はまるで今の俺の心を現しているようだった。

私は雅が出ていったドアを見つめたまま佇んでいた。冷えた風が僅かに私の髪を揺らす。

「さあシロラディア様。いつまでも窓際においては本当に風邪をひいてしまいます」

イルが窓を締め、ファンヒーターの電源をいれる。

「なにかお飲み物を御用意いたしますか？」

ヒーターの内部に火が灯り、熱風が部屋に吹きだされる。

イルはいつもの様子で柔和に私に語りかけてくる。でも私にはそんなイルの表情にいつもはない翳りがあることがわかる。

私はイルが閉じた窓を再び開き、ぼんやりと外の景色を眺める。

「……………シロラディア様？」

「ねえ、イルは雅のことどこまで知ってるの？」

凍えた吐息が空に昇っていくのを見つめながら私は独り言のように呟く。

「欠落ってなに？ 犠牲ってなに？ 呪いってなに？ 私はイルと雅が話してたことの意味を半分も理解出来てはいないけど、雅がとっても辛そうにしていたのだけはわかるのお」

「……………」

私にはわかる。仕草や態度は普段と変わらなくても、雅がを堪えるように言葉を紡いでいたことに。

「雅も、まだ私達に言ってくれないことがあるんだね。それも、きつと簡単に言えないような辛い何かを」

「シロラディア様、それは」

「大丈夫だよお」

私はイルを振り返り仰ぎ見る。

「誰にだって秘密にしたいことってあるし、私だって言っていない事、いつか言わなきゃならないことがあるもん。だから」

私は窓ガラスに額を押しつけ目を閉じる。

闇の中、雅と繋いでいた右手だけが温もりを残し、温かかった。

「いつか話してくれるまで私は待つよ。雅が私に言ってくれたように。雅を信じる」

「……………」

イルが後ろから私を包むように抱き締めてくれた。

胸のなかにポツカリと空洞が生まれたような錯覚を感じ、なんでこんなに頭がぼやけるのかまるでわからない。

雅が言葉で本心を誤魔化したのが許せない？　ちがう。

雅が隠し事をしていることが気に入らない？　ちがう。

じゃあ、雅が苦しい想いを抱えて笑っていることが……辛い？

……………。

多分、これが一番近い。

私は雅と繋いだ手の温もりを留めるために右手を胸に抱く。

「大丈夫です。きつといつか話してくれます」

「……………うん。信じてる」

今の私達はきつと舞台さながら、“家族”を演じているピエロのようなものだろう。

互いに本心を見せず、本音を吐かず、本性をあらわさない道化の喜劇。

でもいつかきつと、互いに本心を打ち明けて、本音で語り、本性で向かいあえるときが来る。

本当の、“家族”になれるときが。

だから私は雅に打ち明ける、自分の事を。必ず。

そして、雅が自分の事を打ち明けてくれるのを待つ。いつまでも今年はじめの雪は、そんな私の決意を祝福するようにいつまでも舞っていた。

その21： 冬のケッセン 〵前編〵（前書き）

感想意見、どしどし応募中（〵〵〵）

その21：冬のケッセン　～前編～

「わあゝ　すごい綺麗え」

シロが感嘆の声をあげ、純白に輝く新雪のうえを駆けていく。

小気味いい音を鳴らし、一面の雪景色の中を爛漫な笑みを浮かべて駆ける様はシロの神秘的な銀髪とあいまって妖精のように可愛らしかった。

「たく、雪くらいであんなにハシヤグなんて子供だよなあ」

「とかいいながら内心では“シロオゝ、何て可愛らしいんだあつ！　今すぐ俺の胸にフォーリンラブッ”とか」

隣で妙なことをほざく愚か者の後頭部を鷲掴み、純白の絨毯に接吻させてやった。

するとあら不思議、戯け者が雪に逆さまに刺さったよ。顔を埋めて倒立するその姿はまさに芸術っ！　ミケランジェロも真つ青だね！

「……お前、天位のことばれてから突っ込みに容赦ないな……」

「まあ、今のはアンタが悪いけど。一般人なら間違いないく首の骨が折れて即死ね」

白い大地から頭を引き抜き、渋面の宏治に美咲は手を揉んで息を吹き掛けつつ呟いた。

「シロラディア様あゝ！　あまりはしゃぐと転びますよおゝ！？」

「大丈夫だよゝ。あはは　きゃっ」

駆けていくシロは呼び掛けるイルに気を捕られたのか。振り向いた拍子に脚をつまずかせ、仰向けに転んでしまった。

「シロラディア様あ！？」

「おいおい、大丈夫かシロ？」

「ううゝ、冷たい」

小走りで駆け寄った俺とイルに助け起こされたシロは、それでも楽しげな笑みを浮かべていた。

「大丈夫ですかシロラディア様？　どこかお怪我は」

「平気ヘーキ、雪のうえに倒れたくらいで大袈裟だよお」

シロは首に巻いたマフラーの雪をパタパタと払い落とす。

「雪のうえだからってあんまり油断していると大怪我するぞ？　ちゃんとまわりは見ような」

そう言い、シロの頭を軽く撫でてやる。

「雅までえー、ちゃんとまわりくらい見てるもん」

頬を膨らませて拗ねたような声音で呟くシロ。

「ぼやくなつて、これでも心配してるんだよ」

「……………それくらいわかってるもん」

「え？」

シロが指をいじくって顔を逸らす。その頬が僅かに上気したように紅い。

なんだろう？　はしやぎすぎて暑くなっただろうか。

だが、そんなシロの恥じ入るような態度には子供の無邪気さのようなものはなく、どこことなく大人びた奇妙な色気を俺は感じてしまった。

一昨日の夜、天位について語ってから時折シロは今までの子供じみた言動とは似つかない態度を示すことがあった。

どんな心境の変化があったのか知らないが、その度俺は対応に困ったものだ。

例えば

朝起きて最初に見たものは、

『あ、おはよう雅い』

幼女の顔。しかも同じ布団のなか……………。

激烈な抗議の末、最後のシロの言葉は。

『……………嫌だった？』

首を傾げ、心底不安そうに。

俺、撃沈。叫びに駆けつけたイルにフルボッコ。

例えばパート二

学校からの帰り道、宏治たちと帰宅途中にポツンと待つ猫娘。

俺をみるや駆けて腕にしがみついていたシロに俺は一人で出歩いた事を叱りつける。

危険を理解していないと言う俺にシロは語った。

『だって雅にすぐ逢いたくて……………ごめんなさい』

顔をうつむかせ、しよげたように。

俺、玉砕。両脇に控えた友人二名にコンクリート塀が陥没するほど叩きつけられた。

と、いうようなことがエトセトラエトセトラ。ただのこれまでとおなじ悪ふざけならハリセンクラッシュで締めれるのだが、どうにもシロの態度にそのような所作が見当たらないのだ。

そんなわけで、俺はいまだにシロの変化した言動に対応できずにいたわけだ。

「えっと、どうしたシ　ぶふおっ!？」

内心の動揺をひた隠してシロに語りかけた俺の顔面に冷たい塊が炸裂した。

「雅い!？」

「わっ、大丈夫ミヤア？　今なんか凄いい勢いで雪が空から降ってきたね〜」

仰向けに倒れ込んだ俺は、倒れた勢いそのままにバウンドして上半身をたて起こす。

「白々しいんだよっ！　どこの世界に雪ダルマの頭ほどの雪が降る地域があるかあっ!？　しかも真横からあっ!？」

「きつと神様からのプレゼントね！　ミヤ、超ラッキー」

「“超ラッキー”　っじゃねえっ!？　何の恨みがあるんだこの邪神　って、シロ？」

天を仰いで“アーメン”とかほざくエセ信者に抗弁していた俺の頬を傍らに座り込んだシロがいたわるように撫でた。

「大丈夫雅い？　痛くなかった？」

顔面に張り付いた雪を払い落として、俺を慮るようなシロの仕草に思わず心臓が高鳴った。

「あ……………ああ、大丈夫……………だよ」

「そっか。ふふ、わたしに注意しろなんて言っておきながら、雅こそ注意してないじゃん。あはは」

な、なんだよホントに。こいついつからこんなに淑やかな雰囲気

に。上品そうに笑むシロの様子に困惑していたのもつかの間。俺は背後から並みならぬ無言の圧力を感じ、反射的に振り返った。

そこには美咲が一人佇んでいた。顔に満面の笑みを讃え、天に両腕を掲げて。

そして、その両腕が支えているものを見たとき、俺は自らの血の気が引く音が聴こえた気がした。

「……………美咲？ それなんだ」

美咲が掲げているもの、例えるなら雪ダルマの胴体ほどの雪球。

穏やかな笑みとは裏腹に美咲の背後では漆黒のオーラが渦巻き、地底から響くような鈍い効果音が聴こえた気がした。

「ミヤア〜？ 何幼女とイチャツイテンのかなあ〜？」

「……………美咲。早まるな？ 俺はイチャツイテなんか」

「黙れこのペド二号おおっ!？」

「っ!?! やめ」

巨大な雪球が天上より俺の頭上に振り落とされた。

天候に恵まれた本日。連日降り注いだ雪ですっかり雪原と化した公園で一昨日の夜シロが提案した雪合戦を決行しようとおつまった我ら五名。

和気あいあいと太陽のもと仲間たちはじゃんけんでチーム分けを

行っている。

俺は離れたところでそんな少年少女を微笑ましく見守っていた。

……雪の塊から頭だけ突き出したリアル雪ダルマよろしく。

.....。

「こらあああつ!? いつまで放置するつもりだお前らあああつ!?」

「なによお? ダルマはダルマらしく黙ってそこでボケェ〜としてなさいよ」

「凍傷になるだろうがっ! お前ホント俺になんの恨みがあるんだよお!？」

「ご丁寧に頭にも置かれたバケツをふるい落とし、半眼でジト目の美咲にさらに文句を言おうとした矢先、シロが傍らにやって来た。

「やったよ雅い。私と雅がチームで、向こうは宏治と美咲だよお」

「……あ、ああ、そうか」

嬉しそうにしているシロの姿に抗議の出鼻をくじかれ、俺はため息ともつかない言葉でシロに応えた。

「ん? でも俺はチームわけに参加してないぞ」

「イルは審判だから私たち三人でじゃんけんして、同じ手をだした二人がチーム、残りが雅と組むことにしたんだあ」

「俺はあまりモノかよ」

どこまでミソツカス扱いなんだよ。

冷えた　むしろ凍えた身体とともに心も冷えきっていく気がした。

ああ、いつそ本物の雪ダルマのようにこの陽気で溶けてしまいたい。

「頑張ろうねっ！ 雅い」

「いや、それ以前にまず俺を発掘」

「よし、ならルール説明するぞ」

あくまでもリアル雪ダルマは捨て置くつもりらしい。

宏治が声高にルールを告げる。

「エリアはこの広場一帯、雪球に三回当たったらアウト。先に相手二人を潰したチームの勝ち。負けたチームは飯を奢ること。これでいいな？」

「え、なんか普通すぎ。もっとこう色々賭けようよ。一番雪玉あてられた人は一番あてた人の一日下僕とか」

「却下っ！」

俺と宏治の叫びが木霊した。

「お前はボーリング場の悲劇を再現したいのか美咲っ！？」

「俺も同意見だ。その申し出は全面的に断る」

俺たち二人の切羽詰った言葉に美咲は不満げな表情を浮かべるが、あの惨劇を繰り返さないためにも引くわけにはいかない。

「ちえっ、つまんないのお。まあいつか」

そう言つて美咲は足元の雪を掴み、握る。

「んじゃ早速始めましょう。イルさん合図お願い。どっかの雪ダルマが動けないうちに」

は？ はっ！？

「待て美咲っ！？ おま、卑怯だろっ！？」

「さつてと、雪球三回ぶつけられたアウトでも三回“しか”あてちゃ駄目っていうルールはないしねえ」

「いくらあてる気だっ！？ ってかその雪球どんだけ握ってるんだよっ！？ 最早氷じゃねえかっ！」

「えっと、それではよい」

「イルこらあっ！？ 何乗せられてるんだあっ！？」

俺の叫びにイルはしどろもどろになって混乱しているようだった。
「あ、すいません。なぜかつい言葉が」

「何で謝るのイルさん？ いいから早く始めましょう」

「そ、そうですね。では」

「“では”じゃねえ！？ おい宏治にシロツ！ 美咲とイルをとめ
何暢気に茶なんか飲んでんだあつ！？」

宏治とシロは揃ってポットから注いだ茶を飲んでいた。いや、シロはホットミルクか。

「あ、いや。なんかでしゃばったらかつちに矛先がむきそうだしな。
めんどつ！」

「雅いゝ、めんどお！」

「“めんど”は死語だろあつ！？ ってかお前ら状況楽しんでんだ
ろあつ！？」

「まったく五月蠅いダルマねえ。まあいいわ。今樂にしてあげる」

「お、お前は……」

愉快そうに雪球 いや、氷球となった雪を握っては足元に落
とし握っては落として蓄えたその数十個。生身を晒しているのは
顔のみなのでこいつの性格からいって間違いなく頭部に全弾命中さ
せるだろう。

………軽く死ねるぞこのやろつ。

「ふ、ふふ、ふふふ……」

我知らず呼吸とも哄笑ともとれる声が漏れる。

得体の知れない感情が沸々と心を満たしていく感覚。頭はひどく
冷めているのに雪に包まれた体躯が徐々に熱を取り戻していく。

「………ミ、ミヤ？」

「ど、どうしたの雅い？」

俺の異変に戸惑っているのか。ほんの僅かに不安そうな声音で美
咲とシロが呼びかけるが、いまさらもう手遅れだ。

俺の中で今この場にいる全員が敵にまわった。

「てめえら全員……」

「お、おい雅？」

「あの、ミヤ、ビ？」

俺をこんな目にあわせた奴も、現状を傍観していた奴らも、全員、敵だ！　そして敵は

「雅い、どうした　ノオオオツ！？」

俺は“たちあがった”。胴体に雪を纏ったまま雄々しくも気高く！
「雪ダルマからあつ！？」

「あ、脚が……！？」

「生えたあああつ！？」

シロの驚愕に続いて宏治とイル、美咲までも叫びをあげる。
更に両腕を堅牢な雪球から、力ずくで突きだす。

「腕がああつ！？」

「何よあの物体Xつ！？」

「これはちよつと、いえかなりシユールですね……」

好き勝手に言葉を並べたてる少女たちとは対象的に宏治のみは額に汗を一滴垂らして息を飲む。

どうやら奴だけはいち早く気づいたようだ。俺が纏う純白の鎧を漆黒に染めかねない暗黒面ダークサイドのオーラに。

「お前ら全員……、お前ら全員……、お前ら全員……！」

「おい落ち着け雅っ！？　いつもの悪ふざけだろっ！　美咲もなんとか言えっ！」

「え　っ！？　ミヤごめんっ！　マジ謝るから落ち着いてえ！？」
急きよ態度を改めた二人にシロとイルはついていけないように小首を傾げる。

ああ　なんと心地いい感覚だろう。どす黒い負の感情に堕ちゆく過程は

「ちよつとイルさんにシロッ！？　あなたたちも止め　」
「お前ら全員」

俺の眩きが途切れるのを待っていたかのように一切の音が掻き消えた。

二名ほど顔を青ざめて絶望としかとれない表情をこちらにむけていた。

そんな二人に俺は心からの笑みを贈る。日頃の理不尽な仕打ちだとか、偽情報による俺の人間性の悪評だとか、今日の出来事だとか、そういった愉快（憎しみ）を込めて。

さて、ではでは季節外れの“祭”を始めましょう。盛大な音楽（悲鳴）、無邪気に駆ける若者（獲物）。弾ける花火（ピー*検閲削除）。あはは楽しいなあ！

「ミヤ……」

「……頼む、落ち着く」

「“血祭り”だああっ！」

俺は天高く、飛びあがり、戦いの狼煙をあげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9535a/>

我が家のアクマ！？

2010年12月4日04時49分発行